

山形県立博物館研究報告

第 13 号

BULLETIN

OF

THE YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM

NO. 13

山 形 県 立 博 物 館
YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM

Kajo Machi, Yamagata City, Japan

March, 1992

山形県立博物館研究報告

第 13 号

BULLETIN

OF

THE YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM

NO. 13

山 形 県 立 博 物 館

YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM

Kajo Machi, Yamagata City, Japan

March, 1992

序

このたび、『山形県立博物館研究報告』13号を発刊いたしました。

多岐にわたる館活動の大きな柱である「展示」を支えているのが「調査研究」であることは申すまでもないことですが、ともすれば看過されがちです。山形県を代表する文化機関の一つとして、「山形学」に焦点をおいた基礎研究は常に心がけられなければなりません。自然系では、「船形山系の偽高山帯における植物群落についての報告」（竹村健一）、「酒田市沖の日本海海底から得られた現生コイワシクジラの頭蓋」（長澤一雄）、本館の「山形県立博物館における蔵王の樹氷原ジオラマとそれに関する雪氷展示の製作について」（長澤一雄・奥山武夫・矢野勝俊）、「山形県の蛾類分布資料（VII）」（木俣 繁）、人文系では、「近世最上川の文化史的考察」（菊地和博）、「山形水野藩秋元家文書と秋元家について」（川瀬 同）など、今日的課題となっている研究を収録しております。

多忙の中であって、学芸員の思うにまかせないこともあると思いますが、郷土山形をより深く理解していただくために一層の努力を重ねていく所存ですので、各位のご指導、ご叱正をお願い申し上げます。

平成4年3月

山形県立博物館

館長 古沢平太郎

目 次

○序	館 長	
○船形山系の偽高山帯における植物群落についての報告	竹村健一	1
○山形県酒田市沖の日本海海底から得られた現生コイワシクジラの頭蓋	長澤一雄	11
○山形県立博物館における蔵王の樹氷原ジオラマとそれに関する雪氷展示の製作に ついて	長澤一雄・奥山武夫・矢野勝俊	19
○山形県の蛾類分布資料 (VII)	木俣 繁	29
○近世最上川の文化史的考察	菊地和博	59
○山形水野藩秋元家文書と秋元家について	川瀬 同	1

(右開き)

船形山系の偽高山帯における植物群落についての報告

竹村 健一*

1 はじめに

船形山山系は、山形、宮城両県にまたがり奥羽山脈の中央部に位置している。船形山(1500m)を最高峰とし、北から南へ、荒神山、船形山、蛇が岳、三峰山、後白髪山と伸び、さらに、西から黒伏山、白森、柴倉山、楠峰と伸びた尾根が船形山につながっている。

この船形山系の尾根筋には、ミヤマナラ、ミネカエデ、ナナカマド等を中心とした落葉広葉樹林帯があり、いわゆる「偽高山帯」が見られる。

筆者は、この中で、標高1200mから1250mの山地帯に属する黒伏、白森、柴倉山の稜線上見られる「偽高山帯」の様相を呈する群落に注目し、この植生をより詳しく分析することを目的として、この研究を行った。

なお、この研究を進めるにあたり、特に群落の分類について助言をいただいた山形大学教養部斎藤員郎教授に心から感謝申し上げます。

2 調査地、調査方法

調査地域は、船形山系の山形県側(西側)とした。白髪山から粟畑、最上カゴ、柴倉山の稜線上の27地点、と船形山西斜面の8地点、計35地点に植生調査区を設けた。(図1)それぞれの調査区は5m×5mの方形区を基本とし、地形状況、低木の高さ等を考慮しながら設定した。そして、各調査区毎に海拔高度、傾斜方位、傾斜角度等を記録した。

また、植物群落については、階層毎に、高さ、植被率等を記録した後、Braun-Blanquetの全推定法によって群落の構成種の優占度を推定した。

各調査区の優占種により、8つの群落タイプに分けた後、その群落の類似性を調べるために、Jaccardの共通係数を適用した。Jaccardの共通係数(g)は、次のような式で求められる。

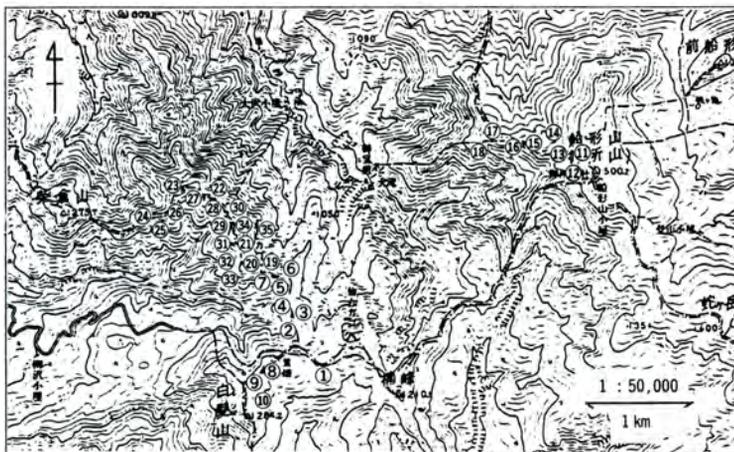


図1 調査地点

$$g = \frac{C}{S} \times 100(\%)$$

ただし、s：両調査区にあわせて出現する種の総数

c：両調査区に共通な種の総数

その後、このgを使って、一番隔たった群落同士をそれぞれ基準とし、各群落の序列化を図った。さらに、この序列に「偽高山帯」でよく見られる構成種の優占度を当てはめて、構成種の量的変化の傾向を調べた。

なお、野外で測定した優占度の種は、斎藤ら¹⁾にならって次のような値に変換して用いた。

Braun-Blanquet法	変換値
5	9
4	8
3	7
2	5
1	4
+	2
r	1

3 結果と考察

(1) 群落の分類と種の構成

各調査区で出現した種および優占度を表1に示す。優占種により分けられた群落は次のようである。

- A ブナーチシマザサ群落
- B ブナーミネカエデ群落
- C リョウブアアカミノイヌツゲ群落
- D チシマザサ群落
- E キタゴヨウ群落
- F ヒメヤシャブシ群落
- G ミヤマナラ群落
- H ミネカエデ群落

I ミヤマハンノキ群落

以下、各群落の特徴を述べる。

A ブナーチシマザサ群落

いわゆる、ブナーチシマザサ群落の矮樹林型のもので、ブナ、ハウチワカエデ、コシアブラ、マルバマンサク、オオカメノキなどのブナ林の構成種の他に、サラサドウダン、ナナカマド、ウラジロヨウラク等、亜高山性落葉広葉樹が出現して来る。草本層では、チシマザサが優占している。

斎藤ら¹⁾のブナーチシマザサ群落と同じである。

B ブナーミネカエデ群落

ブナーチシマザサ群落の構成種と大きな違いはないが、ミネカエデ、アカミノイヌツゲ、サラサドウダン、ナナカマド、ウラジロヨウラクなどの量が増え、優占してくる。草本層にはチシマザサが多く、斎藤ら¹⁾のブナ・ミネカエデ群落と一致する。

C リョウブアアカミノイヌツゲ群落

ブナーミネカエデ群落と比べて、ブナがほとんどなくなってきたこと、リョウブやハナヒリノキ、アカミノイヌツゲの優占度が高いことなどが特徴としてあげられる。樹高も、ほとんど2mまでとなり、前の2つの群落に比べ、低木層の上層の植被率も減少している。

D チシマザサ群落

ほぼ1mの高さにチシマザサ、アカミノイヌツゲ、オオバスノキ、ナナカマド、ブナ、ミネカエデ、リョウブなどが揃い、低木とササが混じり合って構成している。この群落の構成種の数を見ても、他の群落と差はなく、込み合っていることがわかる。チシマザサの量はそれぞれの調査区によって異なり、30%から85%までと幅がある。斎藤ら¹⁾によると、船形山におけるチシマザサが優占する群落はチシマザサーハイマツ群落、チシマザサーヒメノガリヤス群落があるが、種構成のうえで一致しない。

E キタゴヨウ群落

アカミノイヌツゲ、サラサドウダン、ナナカマド、リョウブなどの低木の中にキタゴヨウが出現して来る。チシマザサも草本層に出て来るが、道沿いのチシマザサの周縁部には、アカモノが目立った。尾根筋によくみられるキタゴヨウ群落（石塚²⁾）とおなじものと考えられる。

F ヒメヤシャブシ群落

ヒメヤシャブシ、アカモノ、ヒトツバヨモギ、タニウツギ、ウスノキ等の種がみられることで特徴つけられる群落である。尾根筋上部の急斜面に見られる。一般的には雪崩がよく起きる所にみられる。（石塚²⁾）（石塚³⁾）

G ミヤマナラ群落

「偽高山帯」を代表する群落の一つで、ブナ林の林限より上部に出現することが報告されている（石塚ら⁴⁾⁵⁾）が、この群落もそれと同様で、ミネカエデ、アカミノイヌツゲ、ムラサキヤシオが優占する。標高も前述の群落より高く1300mを越している。なお、この群落は一般的にはチシマザサを持つのが通例とされている（石塚ら⁵⁾）が、今回もチシマザサが確認されている。

H ミネカエデ群落

鳥海山、月山、神室山などでも報告されているように（石塚ら³⁾⁴⁾⁵⁾）（ミネカエデ・ナナカマド林）、普通「偽高山帯」の上部に出現するのがこのミネカエデ群落である。ミネカエデ、アカミノイヌツゲ、ムラサキヤシオ、ハクサンシャクナゲ、コケモモ等がみられるようになり、より高山性を増す種構成となる。

I ミヤマハンノキ群落

ミヤマハンノキ群落は、クロマメノキ、ミネザクラ、ミネヤナギ、シラネニンジン、ヒナウスユキソウ、エゾシオガマ、イワオトギリ、ノガリヤスなど、高山性風衝草原、矮性低木林等によく見られる種で特徴づけられる。

ミヤマハンノキの生育しているところは、岩がたくさんあり、土壌が安定していない所が多い。その中でも土が落ち着いたところにパッチ状にミヤマハンノキが広がっている。

各群落の平均値被率と平均出現種数を表2に示す。

各群落とも植被率は様々であるが、平均出現種数は13から20とほとんど変わらない。（ミネカエデ群落は調査区数が1なので対象としない）

表2 各群落の平均植被率と平均出現種数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
低木層(2m以上)	70	47	53	0	85	90	90	60	79
草木層(1.5m以下)	79	100	90	121	55	45	16	50	30

平均植被率(%)

A	B	C	D	E	F	G	H	I
15	14.5	14.3	14	16.5	20	11.3	8	13

平均出現種数

したがって、チシマザサ群落の様に低木がほとんどないところでも、それだけ単調な種類組成ではなく、草本層が込み合っていることを示している。

群落が出現する場所で見ると、黒伏、白森、柴倉山の稜線は、ほとんどがブナーチシマザサ群落、ブナーミネカエデ群落、リョウブーアカミノイヌツゲ群落、チシマザサ群落、キタゴヨウ群落、ヒメヤシャブシ群落で、月山、鳥海山、神室山等で報告されてきた「偽高山帯」型群落のミヤマナ

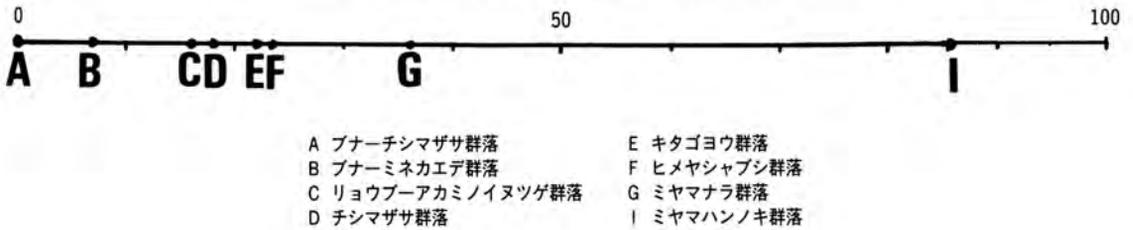


図2 群落の序列

・直線上に基準調査区を決めて、それぞれ植物群落の距離をコンパスでとり、その2つの交点と直線が交わる点を、それぞれの植物群落の位置とする。

この結果は、図2のようになる。

ブナーチシマザサ群落、ブナーミネカエデ群落、などのブナを中心とした群落と高山性の植物が出てくるミヤマハンノキ群落の間に、リョウブーアカミノイヌツゲ群落とチシマザサ群落、キタゴヨウ群落とヒメヤシャブシ群落がまともってくる。これらの群落の出現するところは似ており、リョウブーアカミノイヌツゲ群落とチシマザサ群落は、風当りの強い斜面上部のところ、キタゴヨウ群落とヒメヤシャブシ群落が、尾根筋とそれにつながる崖の部分というふうである。そこで、これらの群落は、地形的特性でまともっているものと考えられる。その他の群落の序列は、(斎藤ら¹¹⁾(山本ら⁷⁾)のように、おもに、標高による変化と考えられる。

さらに、群落の序列をx軸として、優占度の値をy軸として、代表的な構成種15種の優占度の平均値の値の変化を図3に示した。

なお、代表的な構成種は、全調査区の2/3以上に出現する種と、被度2以上が2回以上ある種とした。その結果を見てみると、大きく次のような4つのタイプに分けられた。

Aタイプ・A'タイプ

(分布の中心が左にあり、段々減少していくタイプ)

ブナ、ハウチワカエデなどのブナ林の構成種がこの傾向を示す。

チシマザサも同様の傾向にあるが、ミヤマハンノキ群落でも0にならないので、Aダッシュタイプとした。

Bタイプ

(分布の中心が中央にあり、段々減少していくタイプ)

このタイプは、ブナーチシマザサ群落でもかなりの量があるが、リョウブーアカミノイヌツゲ群落、等で多く、ミヤマハンノキ群落では0になってしまう変化を示すもので、ハイイヌツゲ、リョウブ、ハナヒリノキがこのタイプとしてあげられる。

Cタイプ・C'タイプ

(分布の中心が中央にあり、段々減少して行くが0にならないタイプ)

ブナーチシマザサ群落では量が少なく、チシマザサ群落やキタゴヨウ群落等に変化するに連れて増えていく。その後ミヤマナラ群落では減少するが、ミヤマハンノキ群落においても0にならない種である。ミネカエデ、アカミノイヌツゲ、ウラジロヨウラク、ムラサキヤシオがこのタイプである。さらに、ササドウダン、ナナカマドはミヤマハンノキ群落でも増加しているので、Cダッシュタイプとした。

Dタイプ

(それぞれの群落で、特徴的に量が増えるタイプ)

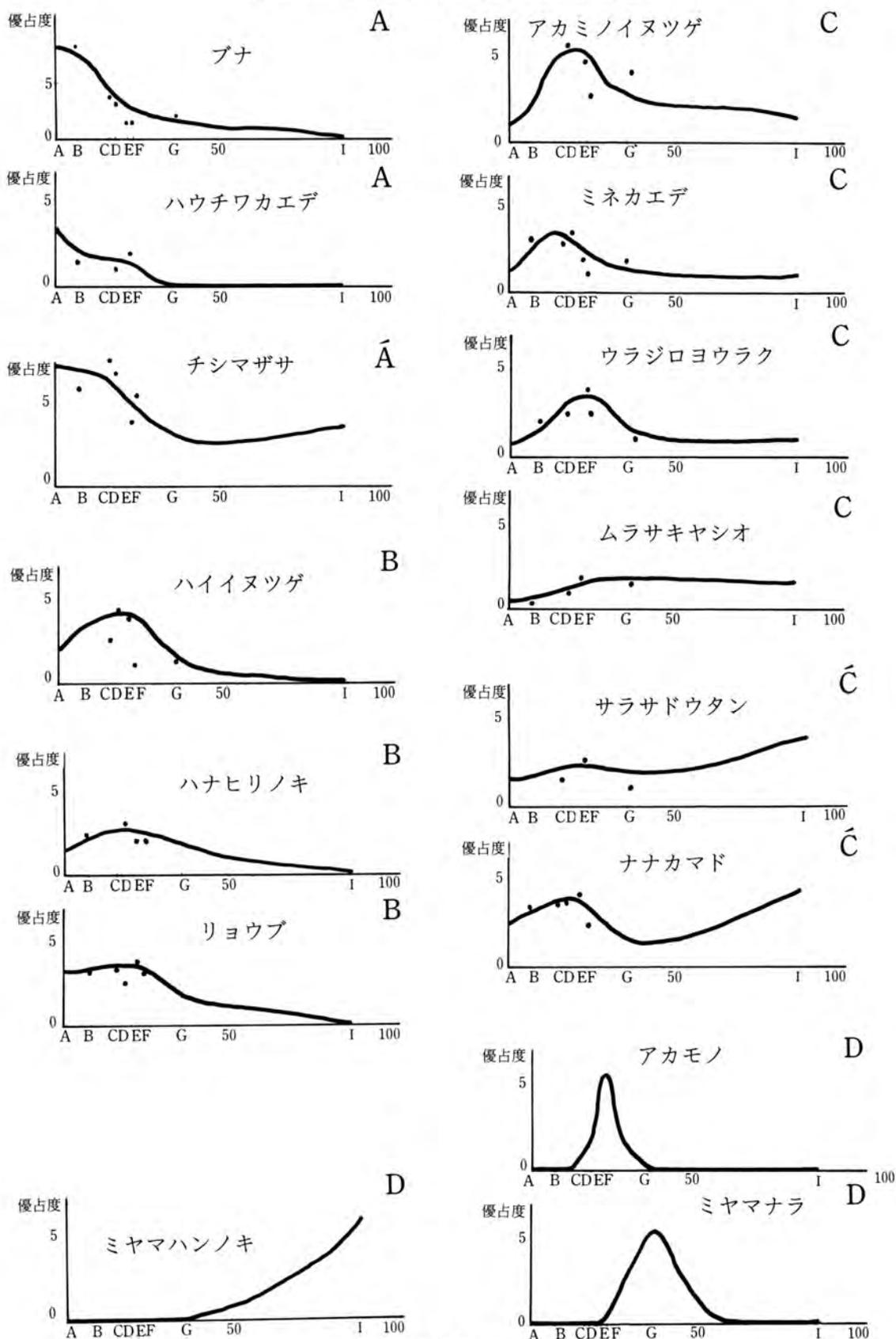


図3 代表的な構成種の優占度の変化

アカモノ、ミヤマナラ、ミヤマハンノキがこういう傾向を示した。

A、B、Cタイプを総合的に考えると、標高が高くなるにつれて、また、地形的特性にあわせて、ブナ林の構成種が減少していくなかで、亜高山性の構成種が次々と連続的に増加して変化していくことがわかる。

このことから「偽高山帯」の様相を示す群落は、ブナ林の要素は減少していき、亜高山性の要素は増加していくという連続的に変化していく中の1ステージに属すると考えることができる。

黒伏、白森、柴倉山の稜線は、標高がまだ亜高山帯には入らないので、主として山頂効果による気象条件の厳しさがこれらの「偽高山帯」の様相を作りだしていると言われるが、(斎藤ら¹¹⁾ 群落の種構成や共通係数、そして優占度の変化などから、やはり、ブナ林の森林限界近くの型と考えると良いと思われる。

一方、船形山の西斜面については、ミヤマナラ群落、ミネカエデ群落、ミヤマハンノキ群落と鳥海山、月山等で報告された、いわゆる、一般的な「偽高山帯」型の群落型であると考えられる。

4 摘要

1) 船形山系の「偽高山帯」の様相を呈する、黒伏、白森、柴倉の稜線の部分と、船形山西斜面の群落について、Braun-Blanquetの全推定法による植生調査を行った。

2) その結果、ブナーチシマザサ群落、ブナーミネカエデ群落、リョウブーアカミノイヌツゲ群落、チシマザサ群落、キタゴヨウ群落、ヒメヤシャブシ群落、ミヤマナラ群落、ミネカエデ群落、ミヤマハンノキ群落の8つの群落型に分けることができた。

3) 黒伏、白森、柴倉山の稜線は、ほとんどがブ

ナーチシマザサ群落、ブナーミネカエデ群落、リョウブーアカミノイヌツゲ群落、チシマザサ群落、キタゴヨウ群落、ヒメヤシャブシ群落で、船形山の西斜面では、ミヤマナラ群落、ミネカエデ群落、ミヤマハンノキ群落が主であった。

4) Jaccardの共通係数を使って、前述の各群落間の類似度を求めた。

その結果、ブナーチシマザサ群落とブナーミネカエデ群落、リョウブーアカミノイヌツゲ群落が特に高い類似性を示した。またミヤマハンノキ群落はどの群落とも低い類似性を示したが、これは、高山性の種の出現によるものと考えられた。そのほかの群落は中間的な値を示した。

5) ブナーチシマザサ群落とミヤマハンノキ群落を基準調査区として、それぞれから各群落の隔たりを求め、群落の序列化をはかった。

その結果、ブナーチシマザサ群落、ブナーミネカエデ群落、リョウブーアカミノイヌツゲ群落、チシマザサ群落、キタゴヨウ群落、ヒメヤシャブシ群落、ミヤマナラ群落、ミネカエデ群落、ミヤマハンノキ群落の順になり、これは主として、標高の変化と地形的特性によるものと考えられた。

6) この群落の序列とそれに伴う代表的な15の構成種の優占度の量的な変化をグラフにして見ると、ブナーチシマザサ群落に中心があるタイプ(A)、と亜高山性の強い群落に中心があるタイプ(B、C)、特定の群落に中心があるタイプ(D)と4つに分類することができた。

これらのことから、「偽高山帯」の様相を示す群落は、ブナ林の構成要素が減少していく中で、亜高山性の種が連続的に増加していく中の1ステージに属すると考えられた。

7) 以上のことを総合的に考えると、黒伏、白森、柴倉山の稜線は、「偽高山帯」の中の、ブナ林の森林限界近くの型と考えると良いと思われる。

一方、船形山の西斜面については、鳥海山、月

山等で報告されたような、一般的な「偽高山帯」の型の群落型であると考えられる。

5 文 献

- 1) 斎藤員郎・寒河江秀寿(1988)：船形山西山腹の自然植生とその分布構造, 山形大学紀要(自然科学) 12, 35-51
- 2) 石塚和雄(1976)：山形県現存植生図解説, 山形県, 1-6
- 3) 石塚和雄・斎藤員郎・橘ヒサ子(1978)：神室・加無山, 118-138, 山形県総合学術調査会
- 4) 石塚和雄・橘ヒサ子・斎藤員郎(1972)：鳥海山の植生, 鳥海山・飛島, 52-88, 山形県総合学術調査会
- 5) 石塚和雄・斎藤員郎・橘ヒサ子(1975)：月山および葉山の植生, 出羽三山・葉山, 59-124, 山形県総合学術調査会
- 6) 生態学実習懇談会(1967)：生態学実習書, 朝倉書店, 220-222
- 7) 山本光雄・辻村東國(1989)：御所山系の植物群落, 御所山, 183-198, 山形県学術調査会

山形県酒田市沖の日本海海底から得られた現生コイワシクジラの頭蓋

長澤 一 雄*

A skull of minke whale from the bottom of the Japan Sea off Sakata City ,
Yamagata Prefecture , Northeast Japan

Kazuo Nagasawa

I はじめに

1989年2月20日に、山形県酒田市の酒田港灯台から北北西約17km沖の日本海で操業中の底引き網漁船によって、水深約75mの海底から大きな骨の断片が引き揚げられた(図1)。この標本は、採集者の阿部喜代治から、酒田市の山形県庄内支庁水産事務所に運ばれ、同所の佐藤清一を通じて山形県立博物館に調査の依頼がなされた。

本標本は、全体の形態や大きさから、明らかに吻部を欠損した鯨類であった。その表面には、現生貝類がいくつか付着し、部分的にもろく風化しているが、欠損断面の海綿質は新しく、組織の化石化が認められないことから、現生種と判断された。

本標本は、本館への搬入当初、全体的な形態からナガスクジラ科Balaenopteridaeのいずれかの種と推察されたが、種の同定にはいたらなかった。その後検討を進めた結果、以下に報告するように、コイワシクジラ *Balaenoptera acutorostrata* と判断された。

こうした日本海海底からの鯨類骨格の乗網記録や、日本海沿岸への漂着鯨類の記録は、山田ほか(1991)にまとめられ、近年研究が進められてきている。そのリストには、1960年から1990年までの、漁網に入った個体、生きて漂着した個体、死後漂

着した個体など約120例が記録されているが、山形県に関するものは1例のみであり、本標本はそのなかに含まれていない。本標本は、海底への定着過程など不明であり、また他の部位も得られていないが、従来あまり知られてこなかった山形県に関する鯨類の記録として意義があると考え、ここに報告する次第である。

以下においては、ナガスクジラ科の各種との頭蓋形態の比較とともに、頭蓋のテレスコピーング状態について検討する。また、山形県の最近の鯨類の記録についても報告する。

II 標本の記載

Order Cetacea Brisson, 1762

Suborder Mysticeti Flower, 1864

Family Balaenopteridae Gray, 1864

Genus *Balaenoptera* Lacépède, 1804*Balaenoptera acutorostrata* Lacépède, 1804

採集地：山形県酒田市酒田港灯台から北北西約17 kmの日本海海底(水深約75m)

採集日：1989年2月20日

採集者：阿部喜代治(酒田市高見台2-18-15)

部 位：頭 蓋

*山形県立博物館

所 蔵：山形県立博物館 YPMG2154

科の同定：本標本は、大きさや形態から鯨類の頭蓋である。標本は吻部の上顎骨・前顎骨・鋤骨・鼻骨を欠損しているほか、口蓋骨・耳骨なども欠損している。頭蓋の背側観は全体的に扁平で幅広く対称形をなし、側方観の背縁がゆるやかに湾曲する形態から、ヒゲ鯨亜目Mysticetiと判断される。

前頭骨は中央部から急に左右へ下降し、眼窩上突起が幅広く発達する。上後頭骨は正三角形状で大きく、先端は眼窩を越えて前方へのびる。頭頂骨は圧縮されて、鼻骨の後の縫合から側方へいたる。鱗状骨の頬骨突起は、左右へ大きく張り出している。後頭顆は大きく、大後頭孔がほぼ円形に開孔している。これら頭蓋の諸形態をヒゲ鯨亜目の各科と比較すると、ナガスクジラ科Balaenopteridaeの特徴を備えており、同科に同定される。

種の同定：本標本の性別・年齢などは不明であ

るが、成体すると頭蓋の大きさから、まずコイワシクジラ*Balaenoptera acutorostrata*が想定される。ナガスクジラ科の各種について、西脇(1965)は、頭蓋の特徴が上顎骨や鼻骨の形態などに表れるとしているが、本標本ではそれらを欠いているので比較できない。しかし残存部の形態において、ザトウクジラ属*Megaptera*のザトウクジラ*M. novaeangliae*は、ナガスクジラ属*Balaenoptera*の各種に比較して、頭蓋が全体的により側方へ発達しており、本標本とも容易に区別できる。従って本標本はナガスクジラ属と判断される。同属の各種と本標本との比較では、背側観において、まずシロナガスクジラ*B. musculus*が前頭骨の大きさに対して上後頭骨が小さい特徴をもつことから区別でき、ナガスクジラ*B. physalus*とは、前頭骨と上後頭骨の形態で区別できる。

そこで、類似性の高いと思われる残りのニタリクジラ*B. edeni*・イワシクジラ*B. borealis*・コイワシクジラ*B. acutorostrata*の3種の頭蓋と本標本を比較した。比較した標本は、太地町立くじらの

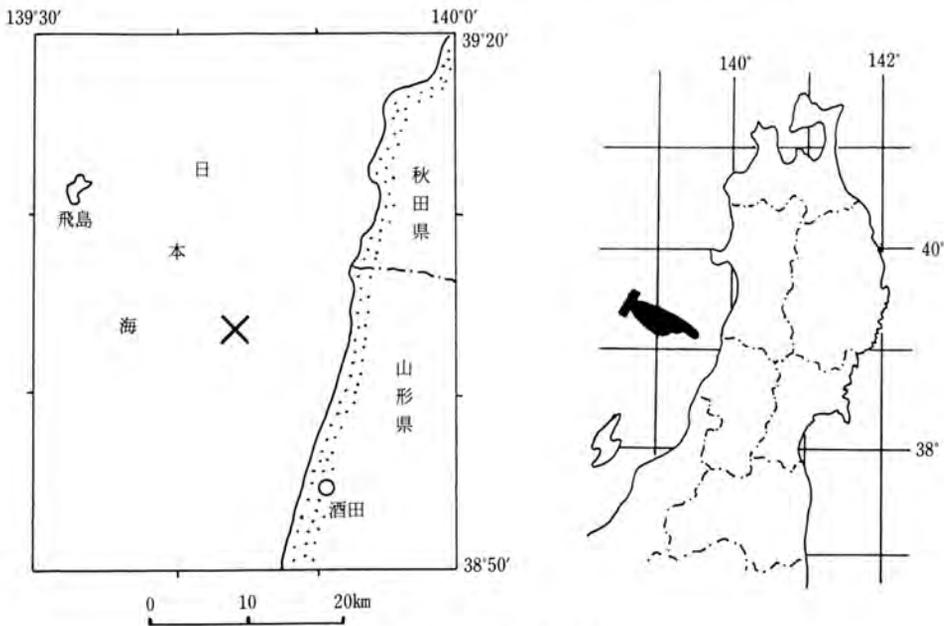


図1 標本の採集地(X)

博物館所蔵のニタリクジラ・イワシクジラ・コイワシクジラ(いずれも和歌山県近海産, 性別不明)の各1標本, 国立科学博物館所蔵のニタリクジラ(no.03538, 産地不明, メス)・イワシクジラ(no.03536, 根室南東方産, メス)の各1標本と, コイワシクジラ4標本(no.05152, 金華山沖産, オス; no.15941, 若狭湾産, 性別不明; no.19792, 南氷洋産, メス; no.21263, 三重県沖産, 性別不明)である。

その結果, いずれのコイワシクジラも, 前頭骨形態において, その前縁と後縁がほぼ直線状に平行して側縁部にいたり, ニタリクジラ・イワシクジラとは異なる。そして後頭骨形態では, 後縁のくの字状に屈曲する形態が同2種に比較して著しい。また大後頭孔の頭蓋に対する大きさは, 同2種に比較して大きく開孔する傾向が認められる。これらコイワシクジラの特徴は, 本標本と共通するものであり, 本標本がコイワシクジラであると判断される。また他標本との外観的な大きさの比較から, 成体と考えられる。

テレスコーピングの検討:大石(1988)は, ヒゲ鯨類の化石の検討に関連して, Dathe(1983)を引用しながら, 現生ナガスクジラ科の各種について, 頭蓋のテレスコーピングtelescoping状態の特徴を述べている。それによると, 上顎骨の眼窩突起を結んだ基線と鼻骨の位置がテレスコーピング状態をよく表すとしている。ナガスクジラ科の6種では, ザトウクジラの鼻骨がその線より前方に位置し, コイワシクジラ・イワシクジラ・ニタリクジラ・ナガスクジラの順に後退し, シロナガスクジラでは最も後退してテレスコーピングの進んだ状態を示しているとした。

本標本は上顎骨・鼻骨を欠いているが, 縫合から推察される鼻骨の基部の位置は, 前記の基線付近かやや前方に位置し, 大石(1988)の示した図のコイワシクジラと同程度である。

この鼻骨の位置について, 前述の比較標本を観察した。その結果, ニタリクジラの2標本(くじらの博物館標本; 国立科博標本no.03538)については, 鼻骨の基部が前記の基線より後退していた。またイワシクジラについては, 1標本(国立科博標本, no.03536)は同様に後退しているが, 1標本(くじらの博物館標本)では鼻骨がほぼ基線上にあった。そしてコイワシクジラの5標本では, 鼻骨が基線上にあるかまたはやや前出していたが, 後退している標本はなかった。これらの結果は, 一般的傾向として大石(1988)の指摘を支持するものと考えられる。そして本標本のテレスコーピング状態がコイワシクジラと同程度であることから, 同種に属すると考えられる。

ただし, 鼻骨の位置と頭蓋のテレスコーピングとの関係については, 今回の限られた比較標本においても, 同種内での小さな変異が認められるため, それが個体差・年齢差・性差・地理差等いずれの影響かなど, さらに詳しい議論が必要と考えられる。

計測:本標本の計測値を示す。計測方法は, 木村(1989)を参考にした。

頭蓋の残存長-665mm

大後頭孔からの上後頭骨の長さ-395mm

頭蓋の最大幅-840mm

前頭骨眼窩境界の中心を通る幅-775mm

上後頭骨の最大幅-645mm

後頭顆の高さ-右95mm, 左95mm

後頭顆の幅-右78mm, 左77mm

大後頭孔の長さ-73mm

大後頭孔の幅-82mm

体長:本標本は不完全な頭蓋のみであるが, これにもとづいて体長を検討する。一般に同種の鯨であれば, 頭蓋の大きさにほぼ比例して体長が長くなることが期待される。これまで計測されたコイワシクジラのいくつかの報告(Omura,

表1 コイワシクジラの頭蓋最大幅(W)と体長(L)

標本	頭蓋最大幅(W)	体長(L)	備 考	文 献
HUE	484mm	4.8m	金華山沖, 若い個体	木村(1989)
OWM	617mm	5.4m	オス	Omura(1957)
NSM	820mm	7.5m	オス	Omura(1957)
TUM	1089mm	8.4m	南氷洋, オス	岡(1990)
YPM	840mm	—	酒田沖	本報告

HUE: 北海道教育大標本, OWM: 牡鹿町立鯨博物館標本, NSM: 国立科学博物館標本,
TUM: 東海大学海洋科学博物館標本, YPM: 山形県立博物館標本.

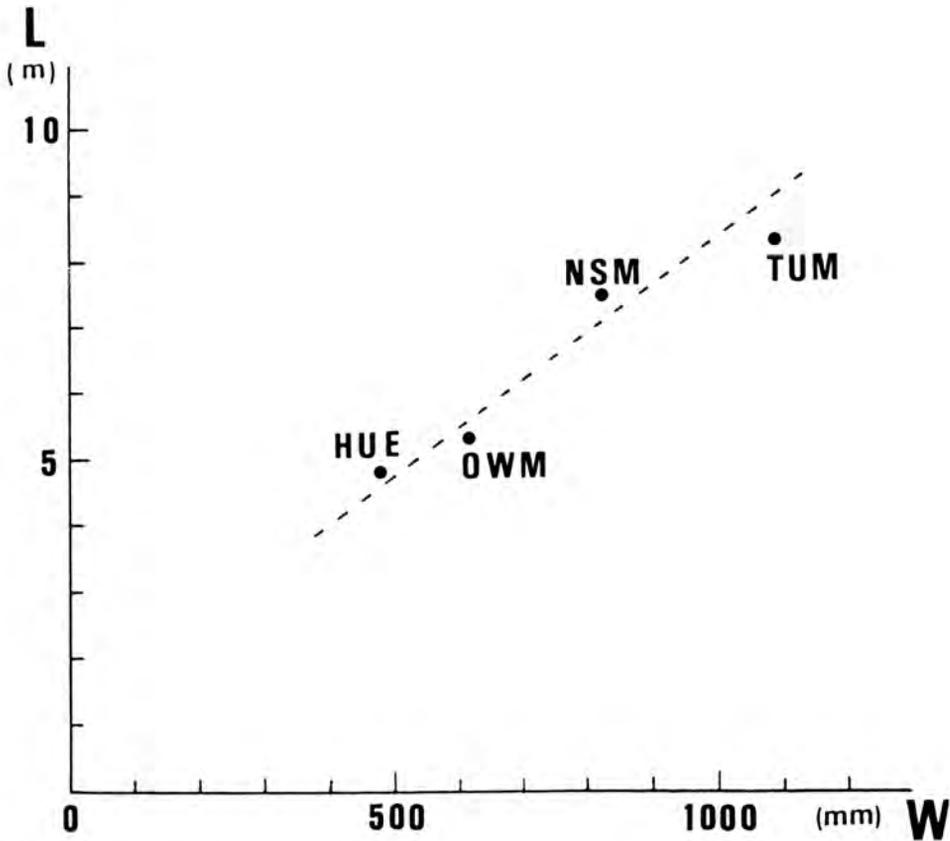


図2 コイワシクジラの頭蓋最大幅(W)と体長(L)の関係
図中の記号は表1の各標本の記号を示す

1957; 木村, 1989; 岡, 1990)について, 頭蓋最大幅に注目して体長との関係を示すと, ほぼ相関関係が認められる(表1, 図2). 本標本はこの計測例のうち, Omura(1957)の国立科学博物館標本に近い値を示していることや, 図2の関係などから, 本標本も概ね7.5m前後の体長を有していたと考えられる.

コイワシクジラは, ナガスクジラ科のなかで最小の種で, ヒゲ鯨類のなかでも小型である. 西脇(1965)によれば最大体長は10.2mで, 日本近海を回遊するもので, 9.2mを越えるものは極めてまれとされ, 日本近海産の成熟個体はメスで7.3m前後, オスで6.6~7.1m程度としている. それによれば, 本標本はほぼ平均的な日本海のコイワシクジラの成体と考えられる.

III 山形県の鯨類の記録

山形県に関する本標本のような乗網した骨格や, 沿岸への漂着鯨類の記録は, 山田ほか(1991)などを参考にすると, 他地域に比べて少ない. これについては, 情報があまり得られていないためなのか, 他の要因によるものなのか, 今後検討する必要があるが, 最近のこうした鯨類の記録をまとめ

ておく(表2). ただしこれらは新聞等による情報であり, その分類についても確かでないため, 記事や写真等から一応予想される種について考察しておく.

1968年には, 酒田市の最上川河口付近の海岸で遺体が発見され, 宮城県の業者に買い取られた. 体長や種についての記録はない.

写真から判断すると, 体長は10m前後と推定され, その頭部でツチクジラ*Berardius bairdii*に特徴的な嘴状の吻部形態がみられることや, 同種に表れる咽候部の八の字状の溝が認められることから, ツチクジラだった可能性が高いと思われる.

1989年7月24日には, 酒田市西方約260kmの海上で大きな漂流遺体が発見され, 漁船によって酒田港までえい航された. 体長約20m, 推定体重70~80tで, ナガスクジラ科として報道された. 遺体は腐敗がひどいため, 再び海へ戻された.

写真から判断して, 腹面での下顎部から尾部に向って発達する長い畝の形態から, やはりナガスクジラ科と考えられる. その大きさから判断すると, ナガスクジラ*Balaenoptera physalus*かイワシクジラ*B. borealis*が考えられるが, 鮮やかな白色の腹部の特徴から, ナガスクジラだった可能性が

表2 山形県に関する鯨類の記録

分類	採集	採集地	採集状況	体長・体重	記録等
ツチクジラ?	1968	酒田市最上川河口付近	生きてあるいは死後漂着	10m前後?	1)
コイワシクジラ	1989・2・20	酒田港北北東約17kmの海底	頭蓋のみ乗網	7.5m前後?	本報告
ナガスクジラ?	1989・7・24	酒田市西方約260kmの海上	死後浮遊	20m, 70~80t	2), 3)
ナガスクジラ科?	1990・3・31	鶴岡市由良沖約500m	定置網に生きて乗網	12m, 30t	4)

1)山形県水産事務所(1968) 広報すいさんno.11, 2)読売新聞(1989・7・26付), 3)山田ほか(1991), 4)山形新聞(1990・4・1付)

高いと思われる。

1990年4月1日には、鶴岡市由良港の沖約500m、水深20mに掛けた定置網に、迷い込んだ後に死んだとみられる遺体が引き揚げられた。体長約12m、体重約30tのシロナガスクジラと報道された。遺体は宮城県石巻市の業者によって買い取られた。

写真ではその特徴がよくわからないが、報道された体長から判断するとシロナガスクジラの成体とすれば小さすぎ、また近年の日本海での記録が知られていないことから、ナガスクジラ科とすれば別の種と思われる。

VI ま と め

- 1) 本標本を他標本の頭蓋形態と比較した結果、コイワシクジラ *Balaenoptera acutorostrata* に同定された。
- 2) ナガスクジラ科の各種において、鼻骨の位置から考えられるテレスコーピング状態は、同種間においても小さな変異が認められた。
- 3) 頭蓋最大幅から推定される本標本の体長は、7.5m前後と推定され、日本海の同種では平均的な成体と考えられる。
- 4) 山形県に関する最近の鯨類の記録は、本標本を含めて4例で、ヒゲ鯨類3例と歯鯨類1例である。

謝 辞：酒田市の阿部喜代治氏からは、ご好意によって標本を本館へ寄贈していただいた。山形県庄内支庁水産事務所の佐藤清一氏からは、標本の本館への搬入にあたってご協力をいただき、また鯨類記録についての情報を提供していただいた。和歌山県の太地町立くじらの博物館館長の菊本国男氏ならびに国立科学博物館の宮崎信之博士からは、所蔵標本の調査にあたって、快く便宜をはかっていただいた。北海道教育大学の木村方一教授

からは、文献をお送りいただいた。岩手県立博物館の大石雅之学芸員からは原稿を読んでいただき、またヒゲ鯨類の頭蓋形態についてご教示いただいた。本館職員の鈴木弘二氏からは、標本の写真撮影をしていただいた。

以上の方々に厚くお礼申し上げます。

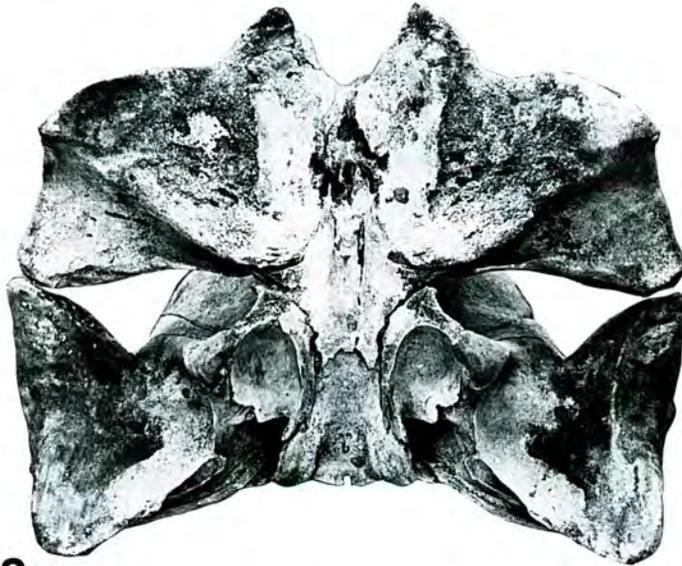
文 献

- Dathe, V. F., 1983: *Megaptera hubachi*. sp., ein fossiler Bartenwal aus marinen Sandsteinschichten des tieferen Pliozäns Chiles. *Z. geol. Wiss. Berlin*, Vol. 11, Nr. 7, S. 813-848. Mit 12 Abbildungen, 8 Tabellen und 3 Tafeln.
- 木村方一, 1989: ヒゲクジラの骨格計測法とコイワシクジラ (little picked whale) の計測値. 郷土と科学, no. 100・101, 37-48.
- 西脇昌治, 1965: 鯨類・鯨脚類. 439p., 東大出版会, 東京.
- 大石雅之, 1988: 岩手県南の鮮新統産ヒゲ鯨類化石. 日本海産海生哺乳類化石の研究 昭和61年度文部省科学研究補助金 総合研究(A), 51-53.
- 岡 有作, 1990: ミンククジラ全身骨格標本の計測値. 東海大学海洋科学博物館年報, no. 18, 26-34.
- Omura, H., 1957: Osteological study of the little picked whale from the coast of Japan. *Sci. Rep. Whales Res. Inst.*, no. 12, 1-21.
- 山田致知・日本海セトロロジー研究グループ, 1991: 日本海産鯨類リスト1960-1990. 日本海セトロロジー研究, no. 1, 16-19.

図版 I (長澤一雄)



1



2

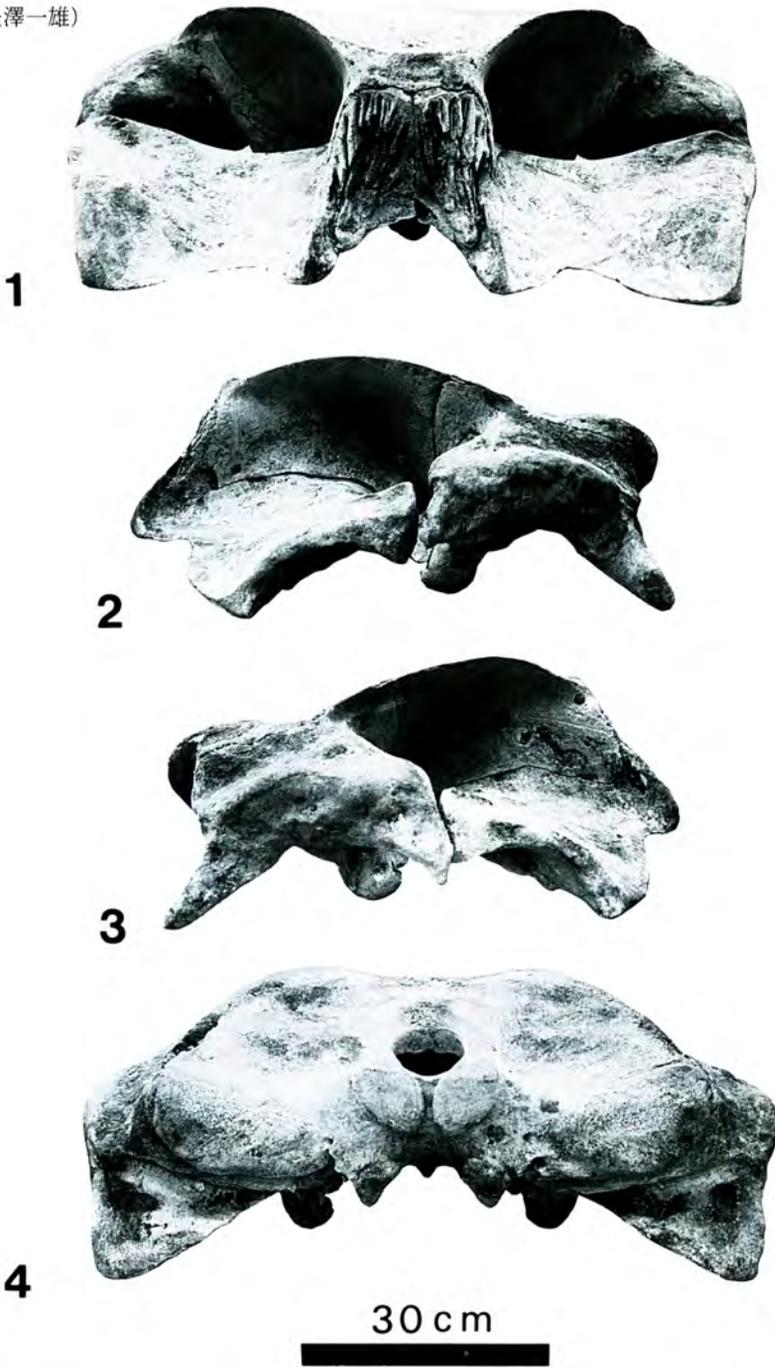
30 cm

酒田市沖産の *Balaenoptera acutorostrata* の頭蓋

1 背側観

2 腹側観

図版 II (長澤一雄)



酒田市沖産の *Balaenoptera acutirostrata* の頭蓋
1 前方観 2 左側方観 3 右側方観 4 後方観

山形県立博物館における蔵王の樹氷原ジオラマと それに関連する雪氷展示の製作について*

長澤一雄**・奥山武夫**・矢野勝俊***

I はじめに

山形県立博物館では、平成2年度に一階吹抜けホールに「蔵王の樹氷原ジオラマ」を製作し、新常設展示として公開している。そして平成3年度には、樹氷の解説用のVTR展示と気象解説電光パネルを製作し、ジオラマコーナーに設置している。また、ジオラマへの遮光のために壁面工事も実施した。

本館では、昭和46年の開館以来、様々な常設展示替えを実施してきたが、そのなかでも今回のものは、平成4年に山形県で開催されるべにばな国体に関わる文化事業の一環として実施した規模の大きなものである。その予算は、平成2年度が約3,000万円、平成3年度が約600万円であった。これを表1・2に示す。

委託業者は、平成2年度が(株)丹青社で、ジオラマの主体をなす実物模型製作は(株)森田環境企画が行った。そして平成3年度が(株)山新建築で、VTR編集は(株)東北映音が担当した。

本館における樹氷に関わる雪氷展示製作は、2年にわたって実施され、今回一応完成したことから、それぞれの概要について報告する。今回の展示は、雪氷展示とすれば国内的にも規模の大きなものであり、また、特色ある展示と考えられることから、展示についての考察とともにその意義についても報告する。

II 蔵王の樹氷原ジオラマの製作

1 展示の意図

本展示は、山形県の象徴的な資料を展示することと主旨として、平成元年度より館内で検討され、平成2年度に製作された展示である。蔵王の樹氷は、国内外に広く知られている自然現象であり、山形のイメージとよく結びつくものであるとともに、雪氷に関する大規模な展示は国内的にもあまり例がないことから、特色ある展示になるものと考えられた。

その展示の意図は、次にまとめられる。1)最盛期の蔵王の樹氷原を再現し、その臨場感と迫力を楽しんでもらうこと。2)精密な樹氷模型によって、樹氷の形態的な特徴を知ってもらうこと。3)こうした特徴は、樹氷の形成のしくみに密接に関係していることを知ってもらうこと。

最初案では、樹氷原内に歩道を設けたり、樹氷の断面模型の製作なども検討されたが、予算の制限から、樹氷模型を中心としたジオラマの製作にとどめられた。

2 製作の工程

製作にあたっては、製作技術者との討議を行いつつ、冬季の蔵王での現地調査のなかでの技術者の指導を行い、その製作方法や素材の検討がなされた。そして樹氷のモデルとして、調査資料や写真をもとにして大小8つの基本モデルを選定した。雪の素材としては、硬質発砲ウレタン樹脂を用い、各種の表面塗装によって質感を高めることとした。

* 平成3年度日本雪氷学会全国大会(つくば市)で内容の一部を発表

** 山形県立博物館

*** 山形大学理学部物理学教室

表1 平成2年度の展示製作予算

名 称	数量	単 価	金 額
大型樹氷模型	3本	2,500,000	7,500,000
中型樹氷模型	5本	1,200,000	6,000,000
バック写真パネル	1式		3,700,000
解 説 板	1枚	250,000	250,000
照 明 灯	12灯	50,000	600,000
床 工 事	1式		3,500,000
雪 原 作 成	1式		3,000,000
仮設工事・運搬費・ 現場構成費・諸経費	1式		2,440,000
設 計 費	1式		2,136,000
			計 29,126,000
消 費 税			873,780
			合計 29,999,780

表2 平成3年度の展示製作予算

名 称	数量	金 額
・VTR関係		
ソフト製作	1式	1,230,000
ハード関係	1式	546,800
		小計 1,776,800
・電光解説パネル関係		
テクナレーションシステム	1式	1,000,000
イラスト・ボックス	1式	710,000
制御システム・取付費	1式	500,000
		小計 2,210,000
・壁面工事関係		
仮 設 工 事	1式	90,000
壁面造作工事	1式	629,000
内装仕上工事	1式	190,000
フィルム貼工事	1式	604,800
		小計 1,513,800
・諸 経 費		239,400
		計 5,740,000
消 費 税		172,200
		合計 5,912,200

そして技術的に最も難しいと考えられた樹氷表面のエビのしっぽは、いくつかの試作品を製作した結果、FRP樹脂でつくった基本形モデルに硬質発泡ウレタンを吹き付け、これを削り込んで造形することとした。

樹氷模形の製作は、東京の工場で行われた。細部の仕上がりについては、現場で何度か検修を行いつつ製作が進められた。また樹氷の配置を検討するため、1/40のミニジオラマも製作された。具体的な工程を次に示す。

A 樹氷の基本形の製作

1) 下地骨組み：樹氷モデルに基づいて木組みをつくる。2) メタルラス張り：木組みをメタルラスで鳥かご状におおい、基本形をつくる。3) 下地紙張り：メタルラスの表面を脱型用の紙でおおう。4) ガラスマット張り：全体にガラスマットを張る。5) FRP樹脂含浸：ガラスマットにFRP樹脂を含浸・硬化させ、FRP基本形をつくる。6) 下地骨組みの脱型：下地骨組みを抜き、FRP基本形を完成7) 設置用土台の取付：基本形の底にジオラマベース固定用土台を取り付ける。

B 樹氷本体の造形

1) ウレタン樹脂の吹き付け：FRP基本形に硬質発泡ウレタン樹脂を吹き付け、厚みや凹凸の変化をつける。2) 削り込み造形：表面の削り込みによって、エビのしっぽとその集合体の構造をつくる。3) 整形・仕上げ：ウレタン樹脂吹き付けと削り込み工程をくり返し、樹氷の形を整える。

C 塗装仕上げ

1) 水性ゴム吹き付け：質感を出すための吹き付け。2) 水性白色塗料の吹き付け：白色の強調のための吹き付け。3) パイル・雪母粉付着：雪の質感をだすため、部分的にパイル（軟毛）や雪母粉を付着させる。4) 塗装仕上げ：塗装不備の部分について、同じ工程で仕上げる。

本館の1階ホールでは、並行して樹氷を設置す

るジオラマベースの製作が行われた。完成した模型は、本館に搬入して最終的な位置を決めた後に固定された。固定後に雪原の造形が行われたが、その工程は模型製作でのウレタン吹き付け以降と同じ工程で行われた。ジオラマの背景には、蔵王の地蔵山西斜面と東斜面の最盛期の樹氷原の大型写真パネルが使用された。

完成したジオラマは、雪原に立つ大小8本の樹氷模型(高さ3.3~4.4m)、青色の12灯の照明、壁面を構成する2枚の大型写真パネルから構成される。ジオラマ本体の床面積は約85㎡で、タイルカーペットを張った観覧スペースが約45㎡である。ジオラマは、1階吹き抜けホールにあるため、ホールでの観覧のほか、2階の階段踊り場や展示室の渡り廊下からも見下して観覧できる配置になっている。これを図1・2に示す。

また本館では、これに合わせて樹氷解説パンフレットを新たにつくり、観覧者に配布している。

III 樹氷VTRの製作

1 展示の意図

樹氷VTRは、ジオラマ展示の解説を補完し、蔵王の樹氷の生成のしくみをよりわかりやすく解説して、その理解を広める主旨で平成3年度に製作された展示である。樹氷の解説は、ジオラマ展示の解説パネルとともに、平成2年度に製作した樹氷解説パンフレットがあるが、簡潔な映像解説によって、その理解はさらに深まるものと期待された。

今回のVTR展示は、野外の映像とともに、低温実験室での実験映像を積極的に取り入れることによって、ミクロ的な視野からもその生成のしくみを解説しようとするものである。そして内容が小学生高学年でもある程度理解でき、興味や関心が広げられることを目標とした。

2 製作の工程

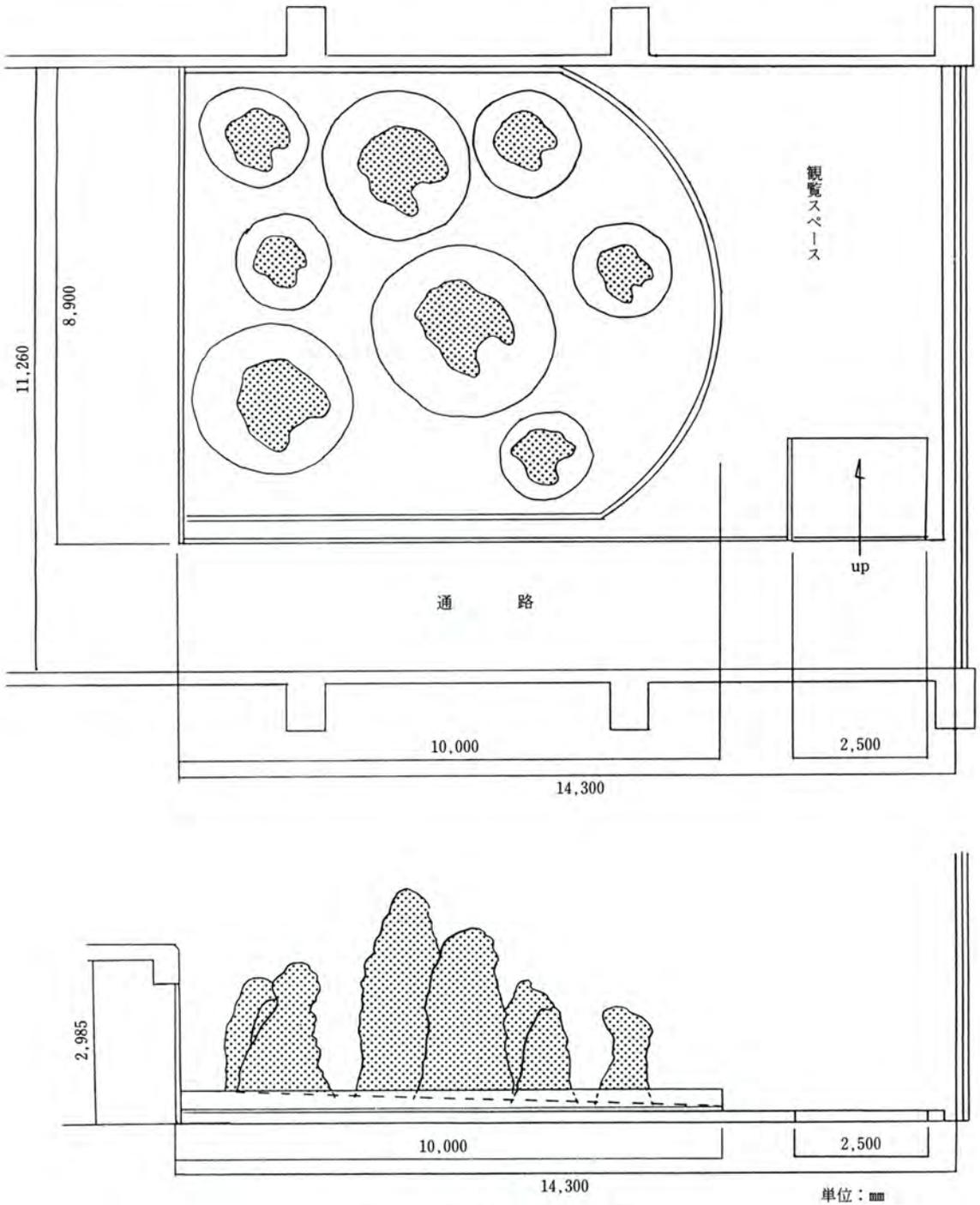


図1 ジオラマの平面図と立面図

単位：mm

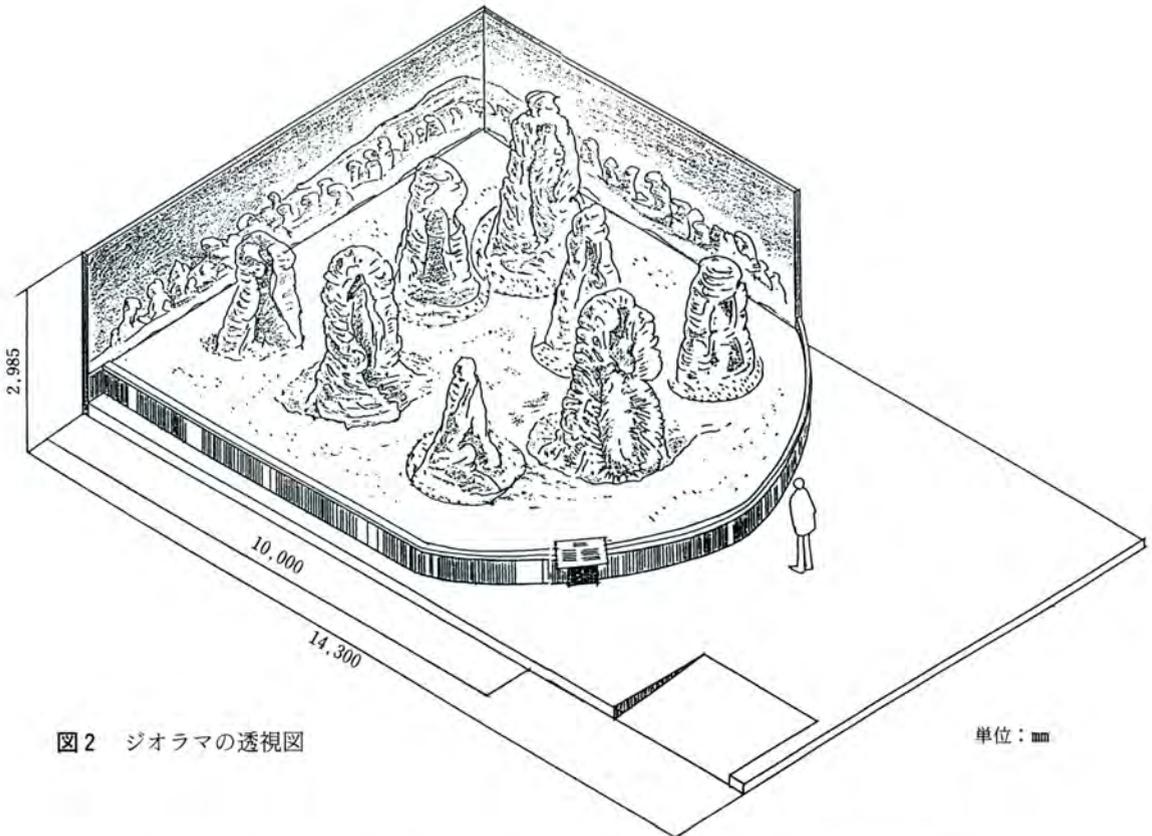


図2 ジオラマの透視図

単位：mm

VTR展示の中心となるソフト製作については、その内容や時間などについて検討を重ね、当初1番組の予定から、観覧者の理解度に応じた2番組を製作することとした。内容は1つが樹氷についてのよりやさしく紹介的な野外映像を中心とするもので、1つがやや専門的で実験映像を中心とするものである。そしてハードについては、メンテナンスの点、番組の頭出しの早さ、画質などで優れているレーザーディスク方式にした。

ソフト製作の工程は次のようにまとめられる。

1) 番組内容の検討。2) 絵コンテの作製と解説ナレーションの検討。3) 蔵王の野外ロケと実験映像の撮影。4) 映像の選定とナレーションの検討。5) VTRの編集・音入れ

蔵王の野外ロケは、晩秋の風景撮りを実施した。冬季の樹氷原の映像については、編集を担当する

東北映音㈱の所蔵テープを使用することとした。また実験映像は、山形大学理学部の低温実験室を使用して行った。

2本の番組の内容を次に示す。

A タイトル：蔵王の樹氷(時間3分)

ねらい：野外映像を主として、蔵王の季節感を折り込みながら、アオモリトドマツが吹雪のなかで成長する様子をわかりやすく紹介する。またアイスモンスターとよばれる様々な姿の樹氷と、その分布上の特異性についても紹介する。

キーワード：アオモリトドマツ、吹雪、エビのしっぽ、アイスモンスター

内容：1) 春のお釜－蔵王山の概観。2) 晩秋の亜高山帯－冬への予感。3) アオモリトドマツ近景－植生と樹氷の関連。4) 吹雪と樹氷－樹氷の成長。5) 晴天の樹氷原－アイスモンスターとよばれ

る形のおもしろさ。6) スキーヤー—冬の蔵王と人とのかかわり。7) 樹氷原の遠景—その規模の紹介。

B タイトル：樹氷の科学(時間3分50秒)

ねらい：実験映像を主として、吹雪のなかで、起こっている着氷現象を、種々の実験を通して説明し、樹氷形成のしくみとともに解説する。また着雪とシタリングのしくみについても、顕微鏡写真などを使いながら解説する。

キーワード：過冷却水滴、着氷、着雪、シタリング

内容：吹雪と樹氷—吹雪と樹氷の関連性の提示。2) 針金への着氷実験—着氷の1次元モデル。3) 円盤への着氷実験—着氷の2次元モデル。4) クシ形モデルへの着氷実験—着氷の3次元モデルとミニモンスターの形成。5) 偏光顕微鏡写真—エビのしっぽのミクロのすがた。6) 雪結晶—着雪と雪のシタリング。7) アオモリトドマツへの着氷実験—実際の葉への着氷。8) 樹氷原の遠景—まとめ

IV 気象解説電光パネルの製作

1 展示の意図

蔵王の樹氷は、冬季の気象と密接に関連してできるが、その気象とのかかわりを、大型のパネルによって解説しようとする主旨で平成3年度に製作された展示である。パネルには、山形県付近を通る東西方向の地形の模式断面をえがき、季節風の流れと雪や雲の様子を電光によって表現している。

この展示も、ジオラマ展示をVTRとともに補完的に解説するもので、よりマクロ的な視野からの樹氷生成のしくみの解説を意図したものである。また電光パネルに関連して、気象と樹氷に関するQ&Aを6題設け、その解説を補っている。

展示の検討のなかで、季節風の効果を出すために、電光とともに風の音を出す方式が考えられた

が、予算の制約から実現できなかった。

2 製作の工程

地形断面の模式図は、特に蔵王連峰と朝日連峰を強調する形でえがいた。また雪雲や降雪は、朝日連峰で多くなるように表現した。雪や降雪の発光は、テクナレーション方式によって、よりリアルになるようにした。またQ&Aについては、小学生高学年でも理解できるように、やさしい表現に留意して検討された。その工程を次に示す。1) 地形断面模式図の製作。2) 図と色の校正。3) 解説文とQ&Aの設問の検討。4) 電光の方式と制御の検討。

完成した気象解説電光パネルは、カラーコルトンで地形断面を表し、そのパネル上で風の流れとともに雲や雪が次々に発光していく展示となった。1回の時間は約40秒間にコントロールしてある。発光の順序は次のようである。1) 日本海での水蒸気の発生。2) 朝日連峰での上昇気流と雪雲・降雪の発生。3) 蔵王連峰での再上昇と雪雲・降雪・樹氷の発生。

V 展示の考察

完成した展示について、今後のよりよい展示のために、以下にそれぞれについて考察しておく。

1 蔵王の樹氷原ジオラマ

樹氷模型については、具体的なモデルが身近にあってそれに基づいて模型の精度を高めていくといった方法が取れなかったため、種々の点での困難さがあった。当初、製作技術者側でも樹氷の知識が不足していたため、かなりイメージの溝があったと思われるが、冬季の現地調査での指導などを通して討議を重ねた結果、樹氷に対するイメージが館側と近いものになっていったと思われる。その結果、樹氷模型については、エビのしっぽの構造、雪の質感などもかなりよく仕上り、ジオラマ展示の当初の意図をある程度達成できたと

思われる。

ただし、以下のような反省点が考えられる。1) ジオラマ展示への動線が袋小路であるため、観覧者の動きがスムーズでないこと。2) 背景の写真パネルが、樹氷模型に対して小さいため見えにくく、ジオラマの奥行感を出す効果が十分でないこと。3) 個々の樹氷模型の形が、模式的な形にまとめられたため、ジオラマ全体としてのバランスがやや単調になったこと。4) 南側から入る自然光が強く、ジオラマの照明が十分に効果を上げていないこと。

2 VTR展示

博物館でのVTR展示は、製作番組によって差異があるものの、経験的にはその時間を3分程度にするのが理想的とされる。観覧者は常に動く存在であることと、その主たる目的が実物の標本等の「もの」にあるため、長すぎるVTRはやはり人を飽きさせ、その効果を十分上げることは期待できない。このことを考慮しながら、内容の精選に努めるべきである。

今回のVTRは、時間的にそれぞれ3分程度におさえることができ、内容についても精選されてわかりやすく編集できたと思われる。そのなかでも、以下のようないくつかの反省点が考えられる。1) 冬季の野外映像において、吹雪の迫力がやや欠けていること。2) 「雪の科学」の時間が若干長く、まだ精選できる余地があったこと。3) 既存の29インチテレビをモニターとして使用したが、ボックスの構造が悪く、音声が入部でややこもるようになったこと。4) モニターボックスのデザインが平凡で単調なこと。

3 気象解説電光パネル

電光パネルについては、種々の反省があり以下にあげておく。1) 水蒸気・過冷却水滴・雲・雪についてのテクナメーションのパターンが単調で、期待された効果を十分に上げていないこと。2)

内部の回転円盤の位置が悪く、部分的にテクナメーションが作動していないこと。3) ボックスのデザインが単調であること。4) 解説文がやや暗く、読まれにくいこと。

IV 展示の意義

今回の展示製作については、上記のようないくつかの反省があるものの、全体的にはユニークに仕上がったものと考えられる。最後に今回の展示の意義について考察しておく。

蔵王の樹氷についての雪氷学的研究については、矢野勝俊や故阿部正二郎などによってなされ、その成果も蓄積されてきている。しかし、蔵王の樹氷の知名度のわりには、その科学的理解が一般に浸透していたとはいいがたい。このことは「樹氷」に限らず、研究の成果をどう教育普及していくかという博物館の問題でもあると考えられる。

従来、社会教育施設としての自然系・理工系博物館においては、雪氷展示が大きく扱われることはまれで、その情報の質・量とも乏しい状態であった。のみならず、学校の理科教育の場においても、雪氷教材の占める割合が極めて低いのが現実である。小・中学校での教科書におけるその割合は、多くみても2～3%程度であり、「雪」ということば自体もあまりみられない。従って現行のカリキュラムで授業を行えば、北海道・東北・北信越などのくらしと雪に関係の深い地域でも、児童生徒は雪を科学的に考える機会を失うことになる。教科書における雪関係の教材内容は次のようなものである。小学校1年：こおりはどこにあるか、こおりをつくってみよう(身近な氷の発見)。小学校4年：水と氷と水蒸気(水の状態変化)中学校第二分野：雲の発生と雨や雪(気象現象のなかの雪)。

この現状は、社会教育と学校教育の両面で雪氷に関する教育普及が立ち遅れていることを示すも

のであり、今後の課題と考えられる。本館で製作したジオラマやVTR展示等は、雪氷展示としては国内的にも規模の大きなものであり、こうした現状のなかで、「樹氷」をとおしての雪氷知識の教育普及効果が期待できるものと考えられる。さらにはこうした展示を通して、学校教育での雪の教材化にまで発展することを期待している。

謝 辞：今回の展示替えにあたっては、予算面

において教育庁文化課・財務課などの暖いご理解の上に実施できたことにまずお礼申し上げます。展示の検討にあたっては、古沢平太郎館長や矢口隆一前館長をはじめ、本館職員に多くのご助言やばげましをいただいた。尾形典典専門学芸員には、VTR編集にあたってご苦労をおかけした。

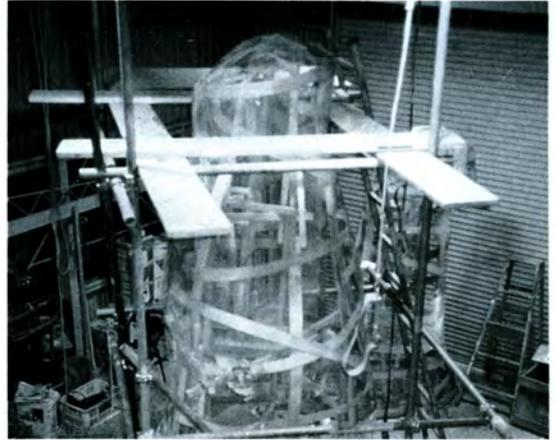
最後に、展示の製作を真摯に遂行いただいた(株)丹青社、(株)森田環境企画、(株)山新建装、(株)東北映音の担当諸氏に厚くお礼申し上げます。

写 真 説 明

- 1 下地骨組 2 メタルラス張り 3 FRP樹脂含浸 4 水性ゴム吹き付け 5 整形・仕上げ
- 6 樹氷模型の完成 7 写真パネル取り付けとジオラマベースの製作 8 樹氷模型の固定
- 9 雪面の造形 10 塗装仕上げ 11 完成したジオラマ



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11

山形県の蛾類分布資料 (VII)

囑託 木 俣 繁

NOCTUIDAE ヤガ科 (3)

1 はじめに

県内の蛾の分布資料として、今回はヤガ科の第3報として、Ophiderinaeクチバ亜科、Hypeninaeアツバ亜科、Herminiinaeクルマアツバ亜科及びAgaristinaeトラガ亜科の4亜科143種類を記載した。この報告を纏めるにあたり、資料の提供、あるいは文献の引用をさせていただいた、東京の岸田泰則氏、横浜の柳田慶浩氏、浦和の市川和夫氏、仙台の渡辺義汎氏、白鷹町の加藤和彦氏、山形市の横倉明氏、山形東高校の菊地賢治氏、鶴岡市の水野重紀氏、布施寛氏及び南陽市の伊藤之巳氏、また、標本を調べさせていただいた山谷文仁氏、更にヤガ科に関して種々ご指導をいただいている日本蛾類学会の杉繁郎氏、国立科学博物館の大和田守博士に対して深く感謝の意を表する。

2 調査地域

調査地域として、所検標本や文献等に記された地域は次のとおりである。

山形市：山形市、市内、本町、旅籠町、霞城公園、東原町、平清水、盃山、沼の辺、村木沢、村木沢早坂林道、本沢、門伝大平、上宝沢、不動沢、西藏王高原、蔵王温泉、山寺、山寺馬形、奥山寺、二口溪谷、面白山、大森山、高瀬、高瀬戸沢、瀬ノ原山、雁戸山、白鷹山
米沢市：米沢市、館山、白布高湯、滑川、大平
鶴岡市：由良、金峯山、高館山、荒倉山

酒田市：酒田市、北千日町、北里町、飛島
上市市：金瓶、三吉山、経塚山、蔵王ライン
村山市：葉山大円院
天童市：荒谷、石倉、田麦野、天童高原
東根市：神町、山口乱川、関山、寒風山木葉沢、柳沢林道、柳沢小屋、滝の沢林道
尾花沢市：銀山温泉、御所山荘
南陽市：宮内、宮内双松公園
山辺町：荒沼
中山町：岩谷
西川町：間沢、月山沢、弓張平、志津、志津月山荘、上島、大井沢中村
大江町：古寺鉱泉
最上町：花立峠
真室川町：及位、川の内
大蔵村：肘折温泉
高島町：二井宿砥石山
小国町：小国町、伊佐領、叶水、玉川中里、玉川新田
余目町：余目町
藤島町：藤島町
朝日村：荒沢ダム、倉沢林道、大鳥
温海町：湯の瀬温泉、越沢林道、大道林道、入山林道、越沢榎野台林道、温海岳、摩耶山
遊佐町：三崎山
松山町：柏谷沢
鳥海山：鳥海山、鳥ノ海、ソブ谷地、河原宿、白井新田
朝日連峰：天狗角力取場、天狗小屋

月山：月山，姥沢，姥沢小屋，羽黒山
 蔵王連峰：横川林道，坊平，ドッコ沼，御田神
 飯豊連峰：ヌクミ平
 吾妻連峰：新高湯，滑川温泉

3 目 録

現在まで筆者が見ることの出来た文献等に記録されたものも，疑問のあるものを除き，すべての種類を引用するとともに，未発表の資料としては，筆者の採集したもの，山形県立博物館所蔵の標本，故白畑孝太郎氏の標本の中から未発表のもの，山谷文仁氏の標本等筆者の見ることの出来た標本のすべてを記録することとした。

データの後ろ右肩に示した数字は，文献引用等を示したもので，本報文の最後に文献名をあげてあり，その文献の番号を示してある。また，データの後ろの () 内の名前を書いてあるものは未発表の資料で，採集者の名前を記したものであり，(白畑)は白畑孝太郎氏，(山谷)は山谷文仁氏，(加藤)は加藤和彦氏，(横倉)は横倉明氏，(伊藤)は伊藤之巳氏，(水野)は水野重紀氏，(木俣)は筆者で，(博物館)とあるのは，山形県立博物館所蔵のものである。

NOCTUIDAE ヤガ科

蛾類の中で最大の科で，日本からは1200種を超える種類がこれに含まれている。さらに，従来 Nolidae コブガ科及び Agaristidae トラガ科とされていたものが，ヤガ科の Nolinae コブガ亜科及び Agaristinae トラガ亜科に変更されたことで，県内からのヤガ科の種類も現在までのところ606種となっている。調査が進めば，県内からもさらに多くの種類が見つかると思う。

Ophiderinae クチバ亜科

451 *Lygephila maxima* (BREMER) クビグロクチ

バ

山形市村木沢²⁹⁾³³⁾

山形市上宝沢 6 ♂♂ 2 ♀♀, 19880821³²⁾

鶴岡市湯野浜¹³⁾

上山市金瓶²⁹⁾

〃 経塚山 (木俣)

天童市天童高原 1 ♀, 19910901 (木俣)

最上町花立峠 1 ♂, 19610716²²⁾

藤島町 19740823³⁰⁾

452 *Lygephila vulcanea* (BUTLER) アサマクビグロクチバ

山形市村木沢 1 ♂, 19840830²⁹⁾³³⁾

山形市村木沢早坂林道 19890829³³⁾

上山市金瓶 1 ♂, 19800901²⁹⁾

天童市天童高原 1 ♂, 19910901 (木俣)

453 *Lygephila nigricostata* (GRAESER) スミレクビグロクチバ (Fig. 1)

上山市金瓶²⁹⁾

天童市荒谷 1 ♀, 19820902¹⁷⁾

454 *Lygephila recta* (BREMER) ヒメクビグロクチバ

山形市不動沢 1 ♂, 19880622 (木俣)

上山市金瓶²⁹⁾

尾花沢市銀山温泉 1 ♀, 19870530 (木俣)

455 *Anomis flava flava* (FABRICIUS) ワタアカキリバ (Fig. 2)

山形市本町 1 ♀, 19611021 (木俣)

〃 村木沢²⁹⁾³³⁾

〃 門伝大平 1 ♂, 19850708³³⁾

上山市金瓶²⁹⁾

藤島町 19731004³⁰⁾

456 *Anomis mesogona* (WALKER) アカキリバ
 山形市 1 ♀, 19601109 (博物館) ; 1 ♂,
 19601124 (博物館)

上山市金瓶²⁹⁾

西川町志津 1 ♂, 19730813²¹⁾²⁶⁾

- 大蔵村折温泉 1♂, 19860703 (木俣)
- 457 *Anomis commoda* (BUTLER) オオアカキリ
バ
山形市本町 1♀, 19610502 (博物館); 1♂,
19610503 (博物館); 1♀, 19610515 (博物館)
酒田市北千日町 1 ex., 19670923²⁰⁾
// 1♀, 19600724²²⁾; 1♂, 19610711²²⁾
上山市金瓶²⁹⁾
村山市北町¹³⁾
// 大久保¹³⁾
東根市関山 1♀, 19780721 (博物館)
南陽市荻小 1♂, 19880819 (伊藤)
藤島町 19710720・19711001・19730731³⁰⁾
- 458 *Anomis longipennis* SUGI ムラサキオオア
カキリバ
上山市経塚山 (木俣)
- 459 *Scoliopteryx libatrix* (LINNAEUS) ハガタキ
リバ
山形市本町 1♀, 19610428 (博物館)
// 旅籠町 1♀, 19610415 (博物館)
酒田市飛島¹⁶⁾; 1♂, 19670627²⁰⁾
上山市金瓶²⁹⁾
村山市北町¹³⁾
南陽市矢ノ沢 2♂♂, 19880517 (伊藤)
西川町月山沢 1♀, 19791011²⁰⁾²⁶⁾
高島町二井宿砥石山 1♀, 19701009²⁰⁾²²⁾
藤島町 19730628・19730826・19750416・
19750430・19750503・19750525・19760707³⁰⁾
鳥海山 1♀, 19810923 (山谷)
// 鳥ノ海 19660800⁹⁾
- 460 *Gonicraspidum pryeri* (LEECH) プライヤ
キリバ
鶴岡市高館山 2♂♂, 19640417⁶⁾⁷⁾
朝日村大鳥 2♂♂, 19630622⁶⁾
- 461 *Calyptra thalictri* (BORKHAUSEN) ウスエグ
リバ
山形市本町 1♀, 19610621 (博物館); 1♂,
19610623 (博物館)
// 盃山 1♂, 19600619 (博物館)
// 上宝沢³²⁾
// 不動沢 1♂, 19880712³²⁾
// 西藏王高原 2♀♀, 19840711¹⁸⁾
// 山寺馬形 4♀♀, 19610829 (博物館)
上山市金瓶²⁹⁾
山辺町荒沼 2♂♂, 19880704³³⁾
藤島町 19730623³⁰⁾
温海町越沢楨野台林道 1♀, 19890626³⁴⁾
- 462 *Calyptra hokkaida* (WILEMAN) キタエグリ
バ (Fig. 3)
山形市上宝沢 1♀, 19880821 (木俣); 1♂ 1
♀, 19890730 (木俣)
// 本沢 1♀, 19890727³³⁾
上山市金瓶²⁹⁾
南陽市築沢岡原 1♀, 19910916 (伊藤)
西川町志津月山荘 1♀, 19880723 (木俣)
- 463 *Calyptra lata* (BUTLER) キンイロエグリバ
(Fig. 4)
山形市上宝沢 1♂, 19880821 (木俣); 1♀,
19890730 (木俣)
// 山寺馬形 1♀, 19610829 (博物館)
上山市金瓶²⁹⁾
南陽市築沢岡原 1♀, 19910731 (伊藤)
- 464 *Calyptra gruesa* (DRAUDT) オオエグリバ
山形市村木沢²⁹⁾³³⁾
// 山寺 1♂, 19760816 (博物館)
鶴岡市荒倉山³⁴⁾
上山市金瓶²⁹⁾
// 経塚山 (木俣)
村山市北町¹³⁾
西川町間沢 1♂, 19660814¹⁰⁾
蔵王連峰坊平 1♂, 19800817¹⁸⁾
- 465 *Oraesia excavata* (BUTLER) アカエグリバ

- 山形市 1 ♂, 19601109 (博物館); 1 ♀,
19601112 (博物館); 1 ♂, 19601110 (博物
館); 1 ♂, 19601120 (博物館); 1 ♂ 3 ♀,
19601114 (博物館)
// 西蔵王高原 1 ♂ 1 ♀, 19830826¹⁸⁾
上山市金瓶²⁹⁾
- 466 *Plusiodonta casta* (BUTLER) マダラエグリ
バ
山形市盃山 1 ♂, 19600614 (博物館)
// 面白山 1 ♂, 19820619¹⁷⁾
// 高瀬戸沢 1 ♂, 19840804²³⁾
酒田市 1 ♂, 19590900²⁰⁾
上山市金瓶²⁹⁾
天童市荒谷 1 ♀, 19800809 (木俣)
西川町間沢 1 ♂, 19730804¹⁰⁾
小国町叶水 1 ♀, 19750614 (木俣)
藤島町 19690812・19740805³⁰⁾
飯豊連峰ヌクミ平 1 ♂, 19680824²²⁾
- 467 *Adris tyrannus* (GUENÉE) アケビコノハ
山形市 1 ♀, 19601114 (博物館); 2 exs.,
19601112 (博物館); 1 ex., 19601110 (博物
館); 1 ex., 19601120 (博物館)
// 霞城公園 1 ♀, 19711012 (博物館); 1
♂, 19761002 (博物館); 1 ♀, 19771014 (博
物館)
// 東原町 2 ♀ ♀, 19701104 (博物館)
// 平清水 1 ex., 19470809 (博物館)
// 西蔵王高原 1 ♂, 19841023 (木俣)
// 高瀬 1 ♂, 19831106²³⁾; 1 ♀,
19831113²³⁾
// 山寺馬形 2 exs., 19610829 (博物館)
米沢市 1 ♂, 19710926 (山谷)
上山市金瓶²⁹⁾
// 三吉山 1 ♂, 19320800 (博物館)
東根市神町 1 ♂, 19711000²²⁾; 1 ♂,
19710900 (博物館)
- 藤島町 19720812³⁰⁾
摩耶山 1 ♂, 19590824 (博物館)
遊佐町三崎山 1 ex., 19590802²⁰⁾
朝日連峰天狗角力取場 1 ♀, 19610807²²⁾
- 468 *Hypocala subsatura* GUENÉE タイワンキシ
タクチバ (Fig. 5)
山形市 1 ♂, 19600916¹⁾
// 旅籠町 1 ♂, 19600916³⁾; 1 ♂,
19610822³⁾
// 西蔵王高原 2 ♂♂ 1 ♀, 19830826¹⁸⁾
// 不動沢 1 ♀, 19880712³²⁾
- 469 *Hypocala deflorata deflorata* (FABRICIUS)
ムーアキシタクチバ
山形市本町 1 ♂, 19610608³⁾; 1 ♂,
19610926³⁾
- 470 *Erygia apicalis* (GUENÉE) アカテックチバ
山形市村木沢²⁹⁾³³⁾
// 上宝沢 1 ♂, 19890730 (木俣)
鶴岡市高館山 1 ♂, 19910818³⁴⁾
上山市金瓶²⁹⁾
南陽市築沢岡原 1 ♂, 19910731 (伊藤)
中山町岩谷 1 ♂, 19860803 (木俣)
温海町温海岳 3 ♂♂, 19890825 (木俣)
蔵王連峰ドッコ沼 1 ♀, 19880807³²⁾
- 471 *Sypnoides picta* (BUTLER) シラフクチバ
山形市面白山 1 ♀, 19740727¹⁷⁾
米沢市白布高湯 1 ♀, 19770807 (山谷)
上山市金瓶²⁹⁾
村山市大久保¹³⁾
西川町月山沢 1 ♂, 19791011²⁰⁾²⁶⁾
- 472 *Sypnoides fumosa* (BUTLER) クロシラフク
チバ
山形市山寺 1 ♀, 19760915 (博物館)
天童市天童高原 1 ♀, 19910901 (木俣)
西川町月山沢 1 ♂, 19791011²⁰⁾²⁶⁾
- 473 *Sypnoides hercules* (BUTLER) アヤシラフク

- チバ
- 山形市盃山 1 ♀, 19600710 (博物館); 1 ♀, 19610709 (博物館)
- // 面白山 2 ♂♂ 2 ♀♀, 19740727¹⁷⁾; 5 ♂♂, 19750719¹⁷⁾
- // 不動沢³²⁾
- // 奥山寺 1 ♂, 19750727¹⁷⁾
- // 高瀬戸沢 1 ♀, 19840804²³⁾
- 米沢市白布高湯 1 ♂, 19700727²²⁾
- // 滑川 1 ♂, 19830728 (山谷)
- // 大平 1 ♂, 19710717 (山谷)
- 上山市金瓶²⁹⁾
- 東根市柳沢小屋 1 ♂, 19860728 (木俣)
- 尾花沢市銀山温泉 1 ♂ 1 ♀, 19860712³¹⁾
- 西川町志津 1 ♀, 19750725¹²⁾; 1 ♀, 19860824²⁶⁾
- // 志津月山荘 1 ♂, 19850803²⁵⁾
- 大江町古寺鉾泉 1 ♂ 1 ♀, 19850720 (木俣)
- 朝日村倉沢林道 2 ♂♂ 1 ♀, 19910707³⁴⁾
- 温海町大道林道 2 ♂♂, 19910624³⁴⁾
- 鳥海山鳥ノ海 19660800⁹⁾
- // ソブ谷地 19660800⁹⁾
- 月山姥沢 1 ♂, 19730813²¹⁾²⁶⁾
- 蔵王連峰ドッコ沼 1 ♀, 19880807³²⁾
- // 坊平 1 ♂, 19610715 (博物館)
- // 御田神 1 ♂, 19840814¹⁸⁾; 1 ♂, 19840730 (木俣)
- 吾妻連峰新高湯 1 ♂, 19700727²⁰⁾; 1 ♂, 19710725 (山谷)
- 474 *Hypersypnoides astrigera* (BUTLER) シロテンクチバ
- 山形市不動沢 2 ♂♂ 7 ♀♀, 19840604¹⁸⁾; 1 ♂ 1 ♀, 19880622³²⁾
- // 瀬ノ原山 3 ♀♀, 19840607²³⁾
- 米沢市白布高湯 1 ♀, 19650622 (博物館)
- 東根市寒風山木葉沢 1 ♀, 19850629³¹⁾
- 尾花沢市御所山荘 1 ♀, 19880613³¹⁾
- 西川町志津 1 ♂ 1 ♀, 19860622²⁶⁾
- 小国町叶水 1 ♂, 19760530 (木俣)
- 475 *Daddala lucilla* (BUTLER) ハガタクチバ (Fig. 6)
- 鶴岡市高館山³⁴⁾
- 476 *Ericeia pertendens* (WALKER) ウスムラサキクチバ (Fig. 7)
- 山形市高瀬戸沢 1 ♂ 1 ♀, 19840804²³⁾
- // 門伝大平 1 ♂, 19860518³³⁾
- // 山寺 1 ♂, 19770511 (博物館); 1 ♂ 1 ♀, 19770512 (博物館)
- 鶴岡市高館山 2 ♂♂, 19900503³⁴⁾
- 上山市金瓶²⁹⁾
- 中山町岩谷 1 ♂, 19860803 (木俣)
- 朝日村荒沢ダム 1 ♂, 19820818 (木俣)
- 477 *Blasticorhinus ussuriensis* (BREMER) コウモンクチバ
- 山形市上宝沢¹⁶⁾³²⁾; 1 ♂, 19600923 (博物館)
- // 不動沢 1 ♂, 19880902³²⁾
- // 村木沢²⁹⁾³³⁾
- 山形市村木沢早坂林道 1 ♀, 19890803³³⁾; 1 ♀, 19890829³³⁾
- // 奥山寺 1 ♀, 19730903¹⁷⁾
- // 高瀬戸沢 1 ♂, 19840804²³⁾
- 鶴岡市高館山 1 ♂, 19910818³⁴⁾
- 酒田市 1 ♀, 19610801²²⁾
- 上山市金瓶²⁹⁾
- 村山市北町¹³⁾
- 天童市田麦野 3 ♂♂, 19910813 (木俣)
- // 天童高原 1 ♀, 19910901 (木俣)
- 尾花沢市御所山荘 1 ♂, 19870814³¹⁾
- 中山町岩谷 4 ♂♂, 19860803 (木俣), 1 ♂, 19860915 (木俣)
- 山辺町荒沼 2 ♂♂, 19870827³³⁾
- 西川町大井沢中村¹⁶⁾; 1 ♂, 19610806 (博物館)

- 藤島町 19710828・19760723³⁰⁾
 温海町温海岳 1♂1♀, 19890825 (木俣)
 // 摩耶山 1♀, 19620720²⁰⁾²²⁾
 鳥海山ソブ谷地 19660800⁹⁾
 朝日連峰天狗小屋 1♂, 19540814²²⁾
- 478 *Aedia kumamotonis* (MATSUMURA) クマモトナカジロシタバ (Fig. 8)
 小国町叶水 1♂, 19750614 (木俣); 2♀♀, 19760530 (木俣)
 鳥海山白井新田¹⁶⁾; 1♀, 19710527²⁰⁾
- 479 *Chrysorithrum amatum* (BREMER et GREY) カクモンキシタバ
 山形市本町 2♀♀, 19610621 (博物館)
 // 東原町 1♂, 9600630 (博物館)
 // 高瀬戸沢 2 exs., 19840703²³⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 // 三吉山 1 ex., 19340621²⁰⁾
 山辺町荒沼 1♂, 19880704³³⁾
 小国町叶水 2♂♂, 19750614 (木俣)
 藤島町 19720606・19720830³⁰⁾
- 480 *Chrysorithrum flavomaculatum* (BREMER) ウンモンキシタバ (Fig. 9)
 山形市本町 1♀, 19620731 (木俣)
 上山市金瓶 1 ex., 19750817²⁹⁾
 藤島町 19710827³⁰⁾
- 481 *Dinumma deponens* WALKER ウスツマクチバ
 山形市沼の辺 19830000¹⁹⁾
 // 山寺 1♀, 19770512 (博物館)
 上山市金瓶²⁹⁾
 村山市大久保¹³⁾
 西川町志津月山荘 1♀, 19880723 (木俣)
 小国町叶水 1♀, 19750614 (木俣); 1♂, 19761009 (木俣)
 鳥海山鳥ノ海 19660800⁹⁾
 飯豊連峰ヌクミ平 1♀, 19670512²²⁾
- 482 *Arytrura ussuriensis* (MÉNÉTRIÈS) ソトジロツマキリクチバ
 山形市村木沢²⁹⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 村山市北町¹³⁾
 藤島町 19670617・19690821・19720702・19730629・19740905³⁰⁾
- 483 *Pangrapta trimantesalis* (WALKER) ウンモンツマキリアツバ (Fig. 10)
 山形市門伝大平 1♂, 19850708³³⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 東根市柳沢林道 1♂, 19870902³¹⁾
 尾花沢市御所山荘 1♂, 19870814³¹⁾
 南陽市吉野中 1 ex., 19880622 (伊藤)
- 484 *Pangrapta umbrosa* (LEECH) シロモンツマキリアツバ
 山形市盃山 1♂, 19600619 (博物館)
 // 上宝沢 1♀, 19880709³²⁾
 // 村木沢早坂林道 1♂, 19890614³³⁾
 // 面白山 1♀, 19750719¹⁷⁾; 1♂, 19820710¹⁷⁾
 鶴岡市高館山³⁴⁾
 上山市金瓶 1 ex., 19820721²⁹⁾
 // 蔵王ライン 1♀, 19840707¹⁸⁾
 東根市柳沢小屋 1♀, 19860728³¹⁾
 山辺町荒沼 1♀, 19870827³³⁾; 1♂, 19880704³³⁾
 西川町志津 1♂2♀♀, 19860726²⁶⁾; 1♂, 19860824²⁶⁾
 西川町志津月山荘 1♀, 19880723 (木俣)
 真室川町川の内 1♂, 19890624 (木俣)
 大江町古寺鉱泉 1♀, 19850720 (木俣)
 朝日村倉沢林道 1♂, 19910707³⁴⁾
 温海町大道林道 1♀, 19910624³⁴⁾
 蔵王連峰ドッコ沼³²⁾
- 485 *Pangrapta porphyrea* (BUTLER) シロツマキ

- リアツバ (Fig.11)
 小国町叶水 1♂1♀, 19750614 (木俣)
 朝日村倉沢林道 2♀, 19910707³⁴⁾
 温海町大道林道 1♂, 19910624³⁴⁾
- 486 *Pangrapta suaveola* STAUDINGER ウゴウン
 モンツマキリアツバ
 上山市経塚山 (木俣)
- 487 *Pangrapta vasava* (BUTLER) ミツボシツマ
 キリアツバ
 山形市村木沢早坂林道 1♀, 19890714³³⁾
 // 本沢 1♀, 19890707³³⁾
 鶴岡市高館山 3♀♀, 19910818³⁴⁾
 // 荒倉山³⁴⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 東根市寒風山木葉沢 1♀, 19850629³¹⁾
 南陽市吉野中 1 ex., 19880615 (伊藤)
 // 須刈田 1 ex., 19880702 (伊藤)
 真室川町及位 1 ex., 19610623²¹⁾
- 488 *Pangrapta indentalis* (LEECH) ムラサキツ
 マキリアツバ
 上山市金瓶 1 ex., 19740618²⁹⁾; 1 ex.,
 19740823²⁹⁾
 鳥海山 1♀, 19610608²²⁾
- 489 *Pangrapta flavomacula* STAUDINGER キモ
 ンツマキリアツバ
 山形市不動沢 2♂♂, 19880712³²⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 南陽市須刈田 2 exs., 19880702 (伊藤)
 西川町志津 1♀, 19860824²⁶⁾
 小国町叶水 1♂, 19750614 (木俣)
 鳥海山ソブ谷地 19660800⁹⁾
- 490 *Pangrapta albistigma* (HAMPSON) ツマジロ
 ツマキリアツバ
 上山市金瓶²⁹⁾
 // 経塚山 1♂1♀, 1990614 (木俣)
 東根市寒風山木葉沢 8♂♂, 19850629³¹⁾
- 尾花沢市銀山温泉³¹⁾
 // 御所山荘 1♂, 19870814³¹⁾
 山辺町荒沼 1♂1♀, 19880704³³⁾
 西川町間沢 1♀, 19750728¹⁰⁾
 // 志津 1♀, 19860726²⁶⁾
 小国町叶水 1♂1♀, 19750614 (木俣)
 朝日村倉沢林道 1♂2♀♀, 19900828³⁴⁾・1
 ♀, 19910707³⁴⁾
 温海町大道林道 1♂2♀♀, 19910624³⁴⁾
- 491 *Pangrapta costinotata* (BUTLER) マエモン
 ツマキリアツバ (Fig.12)
 山形市本沢 1♂, 19890707³³⁾
 // 村木沢早坂林道 1♂, 19890714³³⁾
 鶴岡市高館山³⁴⁾
 // 由良 3♂♂, 19890701³⁴⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 朝日村倉沢林道 1♂, 19900828 (木俣)
- 492 *Pangrapta obscurata* (BUTLER) リンゴツマ
 キリアツバ
 山形市面白山 1♀, 19740727¹⁷⁾
 // 上宝沢 2♀♀, 19880709³²⁾; 1♀,
 19880821³²⁾
 // 村木沢²⁹⁾
 // 村木沢早坂林道 1♀, 19890614³³⁾; 1
 ♀, 19890829³³⁾; 1♂1♀, 19890803³³⁾
 // 門伝大平 1♂, 19850708 (木俣); 1
 ♂, 19880608³³⁾
 鶴岡市高館山 1♀, 19910818³⁴⁾
 // 由良 1♀, 19890701³⁴⁾
 酒田市 1♂, 19610713²²⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 // 経塚山 1♀, 19900614 (木俣)
 東根市寒風山木葉沢 3♂♂, 19850629³¹⁾
 // 柳沢小屋 1♂1♀, 19860728³¹⁾
 尾花沢市銀山温泉 1♂, 19860712³¹⁾
 山辺町荒沼 1♀, 19880704³³⁾

- 西川町間沢 1♂, 19730804¹⁰⁾
 真室川町川の内 1♀, 19890624 (木俣)
 藤島町 19560603・19680816・19720701・
 19720806・19750902・19760927³⁰⁾
- 493 *Polysciera manleyi* (LEECH) マンレイツマ
 キリアツバ (Fig.13)
 上山市蔵王ライン 1♂, 19840707¹⁸⁾
 西川町志津月山荘 1♂, 19850803²⁵⁾
 蔵王連峰ドッコ沼³²⁾
 // 御田神 2♂♂ 1♀, 19840730¹⁸⁾
- 494 *Stenograpta stenoptera* SUGI ホソツマキリ
 アツバ (Fig.14)
 山形市高瀬戸沢 4♂♂, 1940804²³⁾
 上山市蔵王ライン 1♂, 19840707¹⁸⁾
 天童市田麦野 1♂ 1♀, 19910813 (木俣)
 南陽市吉野中 1 ex., 19880622 (伊藤)
 山辺町荒沼 1♂, 19880704³³⁾
 西川町間沢 1♀, 19750725¹⁰⁾
- 495 *Amphitrogia amphidecta* (BUTLER) シロテ
 ンツマキリアツバ
 山形市奥山寺 1♂, 19740707¹⁷⁾
 // 面白山 1♀, 19740727¹⁷⁾; 1♀,
 19820710¹⁷⁾
 // 高瀬戸沢 1 ex., 19840703²³⁾
 米沢市館山 1♀, 19700831 (加藤)
 上山市金瓶 1 ex., 19780809²⁹⁾
 松山町柏谷沢 1 ex., 19650606²⁰⁾
 鳥海山 1♂, 19610608²²⁾
- 496 *Lophomilia polybapta* (BUTLER) キマダラア
 ツバ (Fig.15)
 山形市西蔵王高原 1♀, 19840630¹⁸⁾; 1♀,
 19840711¹⁸⁾
 // 村木沢早坂林道 1♂, 19890614³³⁾; 1
 ♀, 19890803³³⁾
 // 不動沢 1♂, 19880712³²⁾
 鶴岡市高館山 1♂, 19910818³⁴⁾
- 上山市金瓶²⁹⁾
 山辺町荒沼 2♂♂, 19880704³³⁾
 温海町温海岳 2♂♂ 2♀♀, 19890825³⁴⁾
- 497 *Lophomilia flaviplaga* (WALKER) ミカドア
 ツバ
 山形市蔵王温泉 1 ex., 19860830 (木俣)
- 498 *Stenbergmania albomaculalis* (BREMER) シ
 ロテンアツバ
 上山市金瓶²⁹⁾
- 499 *Gonepatica opalina* (BUTLER) フタスジエ
 グリアツバ
 山形市村木沢²⁹⁾
 // 村木沢早坂林道 1♂ 1♀,
 19890714³³⁾; 1♀, 19890803³³⁾
 // 門伝大平 1♂, 19850708³³⁾
 // 本沢 1♂, 19890727 (木俣)
 上山市金瓶²⁹⁾
 // 経塚山 (木俣)
 村山市大久保¹³⁾
 天童市田麦野 1♀, 19910813 (木俣)
 南陽市築沢岡原 1♂, 19910731 (伊藤)
 西川町志津月山荘 1♂ 2♀♀, 19850803²⁵⁾
- 500 *Antatha misae* SUGI ヒメナミグルマアツバ
 西川町志津月山荘 1♀, 19850803²⁵⁾
- 501 *Antatha wilemani* (SUGI) クロオビアツバ
 (Fig.16)
 小国町叶水 1♀, 19750614 (木俣)
 蔵王連峰ドッコ沼³²⁾
- 502 *Diomea cremata* (BUTLER) ムラサキアツバ
 山形市上宝沢 1♂, 19890730 (木俣)
 // 村木沢²⁹⁾³³⁾
 // 村木沢早坂林道 1♂, 19890803³³⁾
 // 本沢 1♂, 19890707³³⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 南陽市吉野中 1 ex., 19880622 (伊藤)
 中山町岩谷 1♂, 19860628 (木俣)

- 山辺町荒沼 1 ♂, 19880704³³⁾
 朝日村倉沢林道 1 ♀, 19910707³⁴⁾
- 503 *Diomea jankowskii* (OBERTHÜR) マエヘリ
 モンアツバ (Fig.17)
 山形市村木沢²⁹⁾³³⁾
 山形市本沢 1 ♂, 19890707³³⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 山辺町荒沼 1 ♂, 19870827 (木俣); 3 ♂♂,
 19880704³³⁾
 真室川町川の内 1 ♀, 19890624 (木俣)
- 504 *Hypostrotia cinerea* (BUTLER) マエジロア
 ツバ
 山形市村木沢²⁹⁾³³⁾
 山辺町荒沼 1 ♂, 19880704³³⁾
- 505 *Scedopla regalis* BUTLER キヅマアツバ
 上山市金瓶²⁹⁾
- 506 *Scedopla diffusa* SUGI ウスマダラアツバ
 山形市村木沢早坂林道 1 ♂, 19890714 (木俣)
 東根市寒風山木葉沢 1 ♀, 19850629³¹⁾
 南陽市吉野中 1 ex., 19880822 (伊藤)
- 507 *Leiostola mollis* (BUTLER) トビフタスジア
 ツバ
 上山市金瓶 1 ex., 19780627²⁹⁾
- 508 *Naganoella timandra* (ALPHERÁKY) ベニト
 ガリアツバ (Fig.18)
 山形市奥山寺 1 ♂, 19730630¹⁷⁾
 // 村木沢 1 ♂, 19840826²⁹⁾³³⁾; 1 ♂,
 19840830²⁹⁾³³⁾
 鶴岡市高館山 1 ♂, 19910818³⁴⁾
 山辺町荒沼 1 ♂, 19880704³³⁾
 中山町岩谷 1 ♂ 1 ♀, 19860628 (木俣)
 西川町志津月山荘 1 ♂, 19880723²⁸⁾
 大蔵村肘折温泉 1 ♂, 19860719 (木俣)
 小国町叶水 1 ♀, 19750614 (木俣)
 朝日村倉沢林道 1 ♀, 19910707³⁴⁾
 温海町温海岳 4 ♂♂ 1 ♀, 19890825³⁴⁾
- // 大道林道 2 ♂♂, 19910624³⁴⁾
- 509 *Oglasa bifidalis* (LEECH) ソトキイロアツバ
 (Fig.19)
 山形市上宝沢 1 ♀, 19890730 (木俣)
 天童市荒谷 1 ♀, 19820804¹⁷⁾
 東根市柳沢小屋
 尾花沢市御所山荘 1 ♂, 19870814 (木俣)
 朝日村倉沢林道 1 ♂, 19900828 (木俣)
- 510 *Colobochyla salicalis* (DENIS et SCHIFFER-
 MÜLLER) キンスジアツバ
 山形市村木沢²⁹⁾³³⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 中山町岩谷 1 ♂ 1 ♀, 19860628 (木俣)
 真室川町川の内 2 ♂♂ 1 ♀, 19890624 (木俣)
 大蔵村肘折温泉 1 ♂, 19860703 (木俣)
 温海町入山林道 1 ♂, 19890528³⁴⁾
 朝日村倉沢林道 1 ♀, 19900828 (木俣)
- 511 *Corsa petrina* (BUTLER) オオトウアツバ
 (Fig.20)
 山形市西藏王高原 1 ♂, 19840630¹⁸⁾
- 512 *Rhesala imparata* WALKER マエテンアツバ
 上山市経塚山 (木俣)
- 513 *Paragabara flavomacula* (OBERTHÜR) キボ
 シアツバ
 山形市村木沢²⁹⁾
 // 村木沢早坂林道 1 ♂, 19890714³³⁾; 1
 ♂, 19890829³³⁾
 // 本沢 2 ♂♂, 19890707³³⁾; 1 ♀,
 19890727³³⁾
 鶴岡市由良³⁴⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 村山市楯岡¹³⁾
 // 大久保¹³⁾
 西川町間沢 1 ♀, 19750728¹⁰⁾
 小国町叶水 1 ♀, 19740629 (木俣)
 藤島町 19560702・19560729・19720716・

- 19740625・19740806³⁰⁾
- 514 *Paragabara ochreipennis* SUGI チャバネキ
ボシアツバ
鶴岡市由良 19890701³⁴⁾
上山市金瓶 1♂, 19840709²⁹⁾
南陽市吉野中 1 ex., 19880622 (伊藤)
// 須刈田 1 ex., 19880702 (伊藤)
- 515 *Paragona inchoata* (WALKER) ウスグロセ
ニジモンアツバ
上山市金瓶 1 ex., 19730928²⁹⁾; 1 ex.,
19750719²⁹⁾
- 516 *Paragona cleorides* WILEMAN セニジモン
アツバ
上山市金瓶 1 ex., 19730821²⁹⁾
温海町温海岳³⁴⁾
// 大道林道 1♂, 19910624³⁴⁾
- 517 *Hemipsectra fallax* (BUTLER) アトヘリヒト
ホシアツバ
上山市金瓶²⁹⁾
山辺町荒沼 1♀, 19870827 (木俣)
- 518 *Micreremites pyraloides* SUGI ウラモンチビ
アツバ
南陽市矢ノ沢 1 ex., 19880821 (伊藤)
- 519 *Anachrostitis nigripunctalis* (WILEMAN) ク
ロテンカバアツバ
上山市金瓶²⁹⁾
南陽市矢ノ沢 1 ex., 19880821 (伊藤)
- 520 *Rivula sericealis* (SCOPOLI) テンクロアツバ
山形市村木沢²⁹⁾
// 不動沢 1♀, 19880902³²⁾
上山市金瓶²⁹⁾
村山市北町¹³⁾
天童市天童高原 1♀, 19910901 (木俣)
南陽市築沢岡原 1♂1♀, 19910916 (伊藤)
西川町間沢 1♂, 19750725¹⁰⁾
藤島町 19730829・19750918³⁰⁾
- 521 *Rivula inconspicua* (BUTLER) フタテンア
ツバ
藤島町 19570705・19650812・19680819³⁰⁾
- 522 *Ectogonia butleri* (LEECH) シロズアツバ
上山市金瓶 1 ex., 19750729²⁹⁾
西川町間沢 1♂, 19730804¹⁰⁾
- 523 *Gynaephila maculifera* STAUDINGER フタキ
ボシアツバ
上山市金瓶²⁹⁾
- 524 *Hyphenodes rectifascia* SUGI ミジンアツバ
上山市金瓶²⁹⁾
- 525 *Schrankia costaestrigalis* (STEPHENS) クロ
スジヒメアツバ
上山市金瓶²⁹⁾
藤島町 19680919・19720825・19750604³⁰⁾
- 526 *Schrankia separatalis* (HERZ) ハスオビヒメ
アツバ
上山市金瓶²⁹⁾
南陽市須刈田 1 ex., 19880702 (伊藤)
- 527 *Schrankia masuii* INOUE ウスオビヒメアツ
バ
上山市金瓶 1♀, 19850808²⁹⁾
中山町岩谷 1♀, 19860628 (木俣)
- 528 *Chibidokuga hypenodes* INOUE チビクロア
ツバ
上山市金瓶²⁹⁾

Hypheninae アツバ亜科

- 529 *Latirostrum bisacutum* HAMPSON テングア
ツバ (Fig.21)
山形市内 1♀, 19601108 (木俣)
// 本町 1♀, 19620504 (木俣)
// 面白山 1♂, 19820530¹⁷⁾
南陽市吉野中 1 ex., 19881114 (伊藤)
余目町 1♂, 19741008²¹⁾
- 530 *Harita belinda* (BUTLER) ナカジロアツバ

- 上山市金瓶 1 ex., 19781019²⁹⁾; 1 ex., 19830512²⁹⁾
- 531 *Hypena claripennis* (BUTLER) キシタアツバ
 上山市金瓶 1 ex., 19850624²⁹⁾
- 532 *Hypena amica* (BUTLER) クロキシタアツバ
 山形市 1 ♀, 19600913 (博物館); 1 ♂, 19600914 (博物館)
 // 上宝沢¹⁶⁾³²⁾
 // 雁戸山¹⁶⁾
 // 村木沢²⁹⁾
 米沢市白布高湯 1 ex., 19700927²²⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 尾花沢市御所山荘 1 ♂, 19870814³¹⁾
 西川町大井沢中村 1 ♀, 19870523 (木俣)
 大蔵村肘折温泉 1 ♀, 19860703 (木俣)
 藤島町 19710611・19730818³⁰⁾
 朝日村大鳥 1 ♀, 19800831 (山谷)
 温海町温海岳 19890825³⁴⁾
 鳥海山ソブ谷地 19660800⁹⁾
 蔵王連峰ドッコ沼 1 ♀, 19880908³²⁾
- 533 *Hypena trigonalis* (GUENÉE) タイワンキシ
 タアツバ (Fig. 22)
 山形市面白山 1 ♀, 19820530¹⁷⁾
 // 蔵王高原 1 ♂, 19840614 (木俣)
 // 高瀬 1 ♂, 19830918²³⁾
 鶴岡市由良 1 ♂ 3 ♀♀, 19880611³⁴⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 東根市寒風山木葉沢 1 ♂, 19850629³¹⁾
 山辺町荒沼 1 ♂, 19870827³³⁾
 西川町間沢 1 ♂, 19730804¹⁰⁾
 大蔵村肘折温泉 1 ♀, 19860703 (木俣)
 朝日村倉沢林道 1 ♂, 19900828 (木俣)
- 534 *Hypena proboscidalis* (LINNAEUS) フタオビ
 アツバ (Fig. 23)
 西川町志津 1 ♂, 19870912²⁸⁾
- 535 *Hypena tatorhina* BUTLER ヒトスジアツバ
 西川町志津月山荘 1 ♀, 19850803²⁵⁾
- 536 *Hypena whitelyi* (BUTLER) ホソバアツバ
 (Fig. 24)
 山形市村木沢²⁹⁾
 // 面白山 1 ♀, 19770917 (木俣)
 上山市金瓶²⁹⁾
 西川町月山沢 1 ♀, 19791011²⁰⁾
 小国町叶水 1 ♂, 19771103 (木俣)
 温海町越沢榎野台林道 1 ♂, 19891005³⁴⁾
 蔵王連峰御田神 1 ♀, 19840730¹⁸⁾
- 537 *Hypena tristalis* LEDERER ミツボシアツバ
 山形市村木沢²⁹⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 村山市大久保¹³⁾
 天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)
 尾花沢市銀山温泉 1 ♂ 1 ♀, 19870530 (木俣)
 西川町弓張平 1 ♂, 19880616²⁸⁾
 // 志津 1 ♂, 19860724²⁸⁾; 1 ♂, 19870820 (木俣)
 小国町叶水 1 ♀, 19760530 (木俣)
 藤島町 19560529・19730802・19740829³⁰⁾
 鳥海山河原宿 19660800⁹⁾
 // ソブ谷地 19660800⁹⁾
 朝日連峰天狗小屋¹⁶⁾; 2 ♂♂, 19610807 (博物館)
 蔵王連峰ドッコ沼 2 ♂♂ 1 ♀, 19880908³²⁾
 // 御田神 6 ♀♀, 19840730¹⁸⁾; 2 ♀♀, 19840814¹⁸⁾
 吾妻連峰滑川温泉 1 ♂, 19650817 (博物館)
- 538 *Hypena narratalis* WALKER ムラサキミツ
 ボシアツバ
 山形市不動沢 1 ♂, 19840604¹⁸⁾³²⁾
 米沢市白布高湯 1 ♂, 19701009²⁰⁾
 西川町志津姥沢小屋 2 ♀♀, 19830528²⁴⁾
 鳥海山ソブ谷地 19660800⁹⁾

- 539 *Hypena kengkalis* BREMER ソトウスナミガ
 タアツバ
 山形市沼の辺 19830000¹⁹⁾
 酒田市北里町 1 ♂, 19720916²¹⁾
 上山市金瓶 1 ex., 19741009²⁹⁾
- 540 *Hypena similalis* LEECH ナミガタアツバ
 山形市村木沢²⁹⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 南陽市吉野中 2 exs., 19880628 (伊藤)
- 541 *Bomolocha stygiana* (BUTLER) ヤマガタアツバ
 山形市高瀬戸沢 2 ♂♂, 19840703 (木俣)
 上山市金瓶²⁹⁾
 中山町岩谷 1 ♂, 19860803 (木俣)
 鳥海山鳥ノ海 19660800⁹⁾
- 542 *Bomolocha squalida* (BUTLER) ハングロアツバ (Fig. 25)
 山形市西藏王高原 1 ♂, 19830826¹⁸⁾
 藤島町 19690828³⁰⁾
- 543 *Bomolocha semialbata* SUGI ミヤマソトジロアツバ
 西川町弓張平 1 ♂, 19880616²⁸⁾
- 544 *Bomolocha zilla* (BUTLER) シラクモアツバ
 山形市上宝沢 2 ♂♂, 19890730 (木俣)
 // 村木沢²⁹⁾
 // 村木沢早坂林道 1 ♀, 19890614³³⁾
 // 門伝大平 1 ♂, 19850708 (木俣) ; 2 ♀, 19880608 (木俣) ; 6 ♀♀, 19890601 (木俣)
 上山市金瓶²⁹⁾
 // 経塚山 1 ♂ 2 ♀♀, 19900517 (木俣) ; 2 ♀♀, 19900614 (木俣)
 尾花沢市御所山荘 1 ♀, 19870814 (木俣)
 南陽市築沢岡原 1 ♀, 19910731 (伊藤)
 小国町叶水 1 ♀, 19740629 (木俣)
- 545 *Bomolocha rivuligera* (BUTLER) アイモン
- アツバ
 山形市不動沢³²⁾
 // 面白山 1 ♂, 19820530¹⁷⁾
 尾花沢市銀山温泉 2 ♂♂, 19870530 (木俣)
 小国町叶水 1 ♀, 19750614 (木俣)
- 546 *Bomolocha perspicua* (LEECH) ウスヅマアツバ
 山形市山寺 1 ♂, 19770829 (博物館)
 // 門伝大平 1 ♂, 19850708³³⁾
 南陽市築沢岡原 1 ♀, 19910731 (伊藤)
 中山町岩谷 1 ♂, 19860628 (木俣) ・ 1 ♂, 19860803 (木俣) ・ 1 ♀, 19860915 (木俣)
 小国町叶水 1 ♀, 19750614 (木俣)
 朝日連峰天狗小屋¹⁶⁾
- 547 *Bomolocha bicoloralis* GRAESER マルモンウスヅマアツバ
 東根市柳沢林道 1 ♀, 19870902 (木俣)
- 548 *Bomolocha nigrobasalis* HERZ ホシムラサキアツバ
 山形市村木沢²⁹⁾
 // 本沢 2 ♂♂, 19890727³³⁾
 // 門伝大平 1 ♂, 19890601 (木俣)
 // 不動沢 1 ♀, 19880622³²⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 天童市田麦野 3 ♀♀, 19910813 (木俣)
 上山市経塚山 (木俣)
 東根市関山 1 ♀, 19780721 (博物館)
 尾花沢市銀山温泉 1 ♂ 2 ♀♀, 19870530³¹⁾
 // 御所山荘 1 ♀, 19870814 (木俣)
 山辺町荒沼 1 ♀, 19870827³³⁾
 中山町岩谷 1 ♀, 19860628 (木俣)
 西川町弓張平 1 ♀, 19880616²⁸⁾
 // 志津 1 ♀, 19880923 (木俣)
 // 大井沢中村 1 ♀, 19870523 (木俣)
 小国町叶水 2 ♀♀, 19750614 (木俣)
 藤島町 19760608³⁰⁾

- 温海町湯の瀬温泉 1♂, 19890805 (木俣)
 鳥海山ソブ谷地 19660800⁹⁾
 蔵王連峰坊平 1♂, 19830702¹⁸⁾
- 549 *Bomolocha melanica* SUGI ムラクモアツバ
 (Fig.26)
 山形市西藏王高原 1♂, 19840614¹⁸⁾
 西川町間沢 2♀♀, 19750725¹⁰⁾
 温海町越沢林道 19890626³⁴⁾
- Herminiinae クルマアツバ亜科**
- 550 *Adrapsa simplex* (BUTLER) シラナミクロア
 ツバ (Fig.27)
 山形市村木沢早坂林道 1♂, 19890803³³⁾
 // 本沢 1♂, 19890727³³⁾
 村山市甑岳¹³⁾
- 551 *Adrapsa notigera* (BUTLER) フジロアツバ
 (Fig.28)
 温海町大道林道 1♂, 19910624³⁴⁾
- 552 *Hydrillodes lentalis* GUENÉE ソトウスグロ
 アツバ
 酒田市北千日町 1♀, 19670903²²⁾
 村山市大久保¹³⁾
 藤島町 19730919・19760505³⁰⁾
- 553 *Hydrillodes morosa* (BUTLER) ヒロオビウ
 スグロアツバ
 山形市面白山 1♀, 19820530 (木俣)
 // 不動沢 14♂♂11♀♀, 19840604¹⁸⁾³²⁾ ;
 3♂♂1♀, 19880622 (木俣)
 // 村木沢²⁹⁾³³⁾
 // 本沢 1♂, 19890607 (木俣)
 // 門伝大平 1♂1♀, 19880608 (木俣)
 // 西藏王高原 1♀, 19840529 (木俣)
 // 不動沢 2♂♂1♀, 19880622 (木俣)
 鶴岡市金峯山 2♀♀, 19900421 (木俣)
 // 高館山 4♂♂2♀♀, 19900503³⁴⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
- // 経塚山 4♂♂3♀♀, 19900517(木俣)
 // 蔵王ライン 2♂♂, 19890611 (木俣)
 尾花沢市銀山温泉 1♂4♀♀, 19870530 (木
 俣)
 // 御所山荘 4♂♂2♀♀, 19880613(木
 俣)
 西川町弓張平 1♂, 19880616²⁸⁾
 // 志津姥沢小屋 1♀, 19830528²⁴⁾
 真室川町川の内 5♀♀, 19890624 (木俣)
 藤島町 19580825・19720524・19730423・
 19730501³⁰⁾
 温海町関川口 1♂, 19890527 (木俣)
- 554 *Edessena hamada* (FELDER et ROGENHO-
 FER) オオシラホシアツバ
 山形市面白山 1♂, 19820710¹⁷⁾
 // 村木沢²⁹⁾³³⁾
 // 村木沢早坂林道 2♂♂, 19890714³³⁾ ;
 1♀, 19890803³³⁾ ; 19890829³³⁾
 // 上宝沢 2♂♂, 19880709³²⁾ ; 5♂♂,
 19880821³²⁾
 // 不動沢³²⁾
 // 本沢 2♂♂, 19890727³³⁾
 // 西藏王高原 1♂, 19840711¹⁸⁾
 // 高瀬戸沢 3♂♂, 19840804²³⁾
 鶴岡市高館山 1♀, 19610615²²⁾ ; 2♂♂,
 19910818³⁴⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 // 経塚山 (木俣)
 村山市北町¹³⁾
 東根市山口乱川 1♀, 19480710 (博物館)
 尾花沢市御所山荘 1♂, 19870814³¹⁾
 山辺町荒沼 3♂♂1♀, 19880704³³⁾
 中山町岩谷 1♂, 19860803 (木俣)
 大蔵村肘折温泉 1♂, 19760719 (木俣)
 小国町弁当沢 1♂, 19880730 (木俣)
 藤島町 19710719³⁰⁾

- 朝日村倉沢林道 3 ♂♂, 19910707³⁴⁾
- 555 *Hadennia incongruens* (BUTLER) ハナマガ
リアツバ
山形市村木沢 1 ex., 19840829²⁹⁾³³⁾
// 不動沢 1 ♂, 19880902³²⁾
鶴岡市高館山 1 ♀, 19910818³⁴⁾
上山市金瓶 1 ♀, 19830912²⁹⁾
// 蔵王ライン 1 ♂, 19840707¹⁸⁾
天童市田麦野 1 ♂ 1 ♀, 19910813 (木俣)
// 天童高原 1 ♀, 19910901 (木俣)
尾花沢市銀山温泉³¹⁾
// 御所山荘 1 ♂, 19870814³¹⁾
南陽市築沢岡原 1 ♂, 19910916 (伊藤)
山辺町荒沼 2 ♂♂, 19870827³³⁾; 2 ♂♂,
19880704³³⁾
西川町志津 1 ♂, 19870820 (木俣)
朝日村倉沢林道 1 ♂, 19900828 (木俣); 1
♂, 19910707 (木俣)
温海町大道林道 1 ♀, 19910624³⁴⁾
蔵王連峰ドッコ沼 1 ♂, 19880908³²⁾
// 御田神 1 ♂, 19840730¹⁸⁾
- 556 *Mosopia sordida* (BUTLER) フサキバアツバ
(Fig. 29)
山形市高瀬戸沢 1 ♀, 19840804²³⁾
上山市金瓶²⁹⁾
- 557 *Cidariphura galadiata* BUTLER ハナオイア
ツバ (Fig. 30)
山形市村木沢 1 ex., 19830809²⁹⁾³³⁾
上山市金瓶 1 ex., 19790801²⁹⁾
中山町岩谷 1 ♂, 19860803 (木俣)
- 558 *Idia curvipalpis* (BUTLER) シロホシクロア
ツバ
上山市金瓶²⁹⁾
西川町上島 1 ♂, 19790902²⁰⁾
- 559 *Paracolax albinotata* (BUTLER) シロモンア
ツバ
山形市上宝沢¹⁶⁾; 1 ♂, 19880709³²⁾
// 不動沢 1 ♂, 19880622³²⁾; 2 ♂♂ 2 ♀
♀, 19880712³²⁾
// 村木沢 1 ex., 19840717²⁹⁾³³⁾
// 門伝大平 1 ♀, 19850708³³⁾; 1 ♀,
19880608³³⁾
// 本沢 1 ♂, 19890607³³⁾; 1 ♂,
19890707³³⁾
上山市蔵王ライン 3 ♂♂ 1 ♀, 19840707¹⁸⁾
村山市葉山大円院 1 ♂, 19740704²¹⁾
東根市柳沢小屋 1 ♂, 19860728³¹⁾
西川町志津 2 ♂♂, 19750725¹²⁾; 2 ♂♂ 2 ♀
♀, 19860728²⁶⁾
// 志津月山荘 1 ♀, 19850803²⁵⁾; 4 ♂♂
2 ♀♀, 19880723²⁸⁾
大江町古寺鉱泉 1 ♂, 19850720 (木俣)
大蔵村肘折温泉 1 ♀, 19860703 (木俣)
朝日村倉沢林道 2 ♂♂ 2 ♀♀, 19910707³⁴⁾
蔵王連峰坊平 1 ♀, 19790728 (木俣)
- 560 *Paracolax tristalis* (FABRICIUS) クルマアツ
バ
山形市不動沢 1 ♂ 1 ♀, 19880712³²⁾
上山市金瓶²⁹⁾
山辺町荒沼 1 ♀, 19870827³³⁾
- 561 *Paracolax trilinealis* (BREMER) ミスジアツ
バ
山形市村木沢早坂林道 1 ♂ 1 ♀,
19890614³³⁾; 1 ♀, 19890829 (木俣)
// 不動沢 1 ♂, 19880712³²⁾; 1 ♂,
19880902³²⁾
鶴岡市高館山 1 ♀, 19610615²²⁾
上山市金瓶²⁹⁾
// 経塚山 1 ♀, 19900614 (木俣)
村山市大久保¹³⁾
尾花沢市銀山温泉 1 ♂ 1 ♀, 19860715³¹⁾
南陽市須刈田 2 exs., 19880702 (伊藤)

- 山辺町荒沼 1♂1♀, 19870827³³⁾
 真室川町川の内 2♂♂4♀♀, 19890624 (木俣)
 大蔵村肘折温泉 1♀, 19860703 (木俣)
 小国町叶水 1♀, 19740629 (木俣)
- 562 *Paracolax pryeri* (BUTLER) シロテムムラサキアツバ
 山形市面白山 1♀, 19820710¹⁷⁾
 // 西藏王高原 1♂, 19830826¹⁸⁾
 鶴岡市高館山 1♀, 19910818 (木俣)
 上山市金瓶 1 ex., 19810826²⁹⁾; 1 ex., 19850718²⁹⁾
 尾花沢市銀山温泉 1♂, 19860712³¹⁾
 南陽市築沢岡原 1♂, 19910916 (伊藤)
 西川町志津月山荘 1♀, 19850803²⁵⁾
 藤島町 19560722³⁰⁾
- 563 *Paracolax fasciallis* (LEECH) オピアツバ
 山形市二口溪谷 1♂, 19820704¹⁷⁾
 // 不動沢 2♂♂, 19880712³²⁾; 1♀, 19880902³²⁾
 米沢市白布高湯 2♂♂, 19800802 (木俣)
 上山市蔵王ライン 1♀, 19840707¹⁸⁾
 東根市柳沢小屋 1♀, 19860728 (木俣)
 西川町志津 1♀, 19860726²⁶⁾; 1♀, 19860824²⁶⁾; 1♂, 19840820 (木俣); 3♂♂, 19870729 (木俣)
 藤島町 19730721³⁰⁾
 温海町大道林道 1♀, 19910624³⁴⁾
 蔵王連峰御田神 1♀, 19840730¹⁸⁾
- 564 *Bertula bistrigata* (STAUDINGER) フタスジアツバ
 山形市本沢 1♂, 19890607³³⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 南陽市金山 1 ex., 19880731 (伊藤)
 中山町岩谷 2♂♂, 19860628 (木俣)
 西川町間沢 1♂, 19750728¹¹⁾
- 大江町古寺鉱泉 4♀♀, 19850720 (木俣)
 朝日村倉沢林道 1♀, 19910707³⁴⁾
 温海町大道林道³⁴⁾
- 565 *Bertula spacoalis* (WALKER) シロスジアツバ
 山形市本沢 1♂, 19891005 (木俣)
 // 高瀬戸沢 1♀, 19840804²³⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 温海町越沢檜野台林道 1♂, 19891005 (木俣)
- 566 *Simplicia niphona* (BUTLER) オオアカマエアツバ
 山形市 1♀, 19600920 (博物館); 1♀, 19600922 (博物館); 1♂1♀, 19601006 (博物館)
 // 上宝沢 1♀, 19880821³²⁾
 // 高瀬 1♂, 19831113²³⁾
 // 村木沢²⁹⁾³³⁾
 酒田市飛鳥¹⁶⁾; 1 ex., 19690628²⁰⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 村山市大久保¹³⁾
 天童市天童高原 1♀, 19910901 (木俣)
 藤島町 19670706・19730626・19741014・19760824・19760928³⁰⁾
 温海町越沢檜野台林道³⁴⁾
- 567 *Simplicia xanthoma* PROUT ニセアカマエアツバ
 鶴岡市由良 2♂♂, 19880611³⁴⁾; 1♀, 19890701³⁴⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
- 568 *Pechipogo strigirata* (LINNAEUS) カシワアツバ
 上山市金瓶 1♂, 19840726²⁹⁾
- 569 *Zanclognatha griselda* (BUTLER) ツマオビアツバ
 山形市村木沢²⁹⁾³³⁾
 // 不動沢 2♀♀, 19880712³²⁾

- 上山市金瓶²⁹⁾
 南陽市須刈田 3 exs., 19880702 (伊藤)
 山辺町荒沼 1 ♀, 19870827 (木俣)
 中山町岩谷 1 ♂, 19860628 (木俣)
 藤島町 19720706・19730709³⁰⁾
 温海町越沢檜野台林道 1 ♀, 19890626³⁴⁾
 // 大道林道 1 ♀, 19910624³⁴⁾
- 570 *Zanclognatha lilacina* (BUTLER) ウスイロ
 アツバ
 山形市村木沢²⁹⁾³³⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
- 571 *Zanclognatha lunalis* (SCOPOLI) コブヒゲア
 ツバ
 鶴岡市由良 1 ♀, 19880611³⁴⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)
 村山市大久保¹³⁾
 中山町岩谷 2 ♂♂ 2 ♀♀, 19860803 (木俣)
- 572 *Zanclognatha fumosa* (BUTLER) ウスグロ
 アツバ
 山形市不動沢 3 ♂♂, 19880712³²⁾
 鶴岡市金峯山 2 ♀♀, 19820818³⁴⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 南陽市宮内双松公園 1 ♀, 19770714 (伊藤)
 中山町岩谷 1 ♂, 19860628 (木俣)
 大江町古寺鉾泉 1 ♀, 19850720 (木俣)
 温海町温海岳 1 ♀, 19890825 (木俣)
- 573 *Zanclognatha helva* (BUTLER) キイロアツ
 バ
 山形市門伝大平 1 ♀, 19850708³³⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
- 574 *Zanclognatha tarsipennalis* (TREITSCHKE)
 ヒメコブヒゲアツバ
 山形市面白山 1 ♂, 19740824 (木俣)
 // 村木沢²⁹⁾³³⁾
 鶴岡市由良 1 ♀, 19880611³⁴⁾
- 上山市金瓶²⁹⁾
 村山市大久保¹³⁾
 尾花沢市銀山温泉 1 ♀, 19860712³¹⁾
 南陽市宮内 1 ♀, 19770621 (伊藤)
 西川町志津 1 ♂, 19880923 (木俣)
- 575 *Zanclognatha subgriselda* SUGI ヒメツマオ
 ビアツバ
 藤島町 19690819・19730827³⁰⁾
- 576 *Zanclognatha triplex* (LEECH) ツマテンコブ
 ヒゲアツバ
 上山市金瓶²⁹⁾
- 577 *Zanclognatha reticulatis* (LEECH) アミメア
 ツバ
 西川町志津 2 ♀♀, 19870820 (木俣)
- 578 *Zanclognatha violacealis* STAUDINGER ウラ
 ジロアツバ
 山形市村木沢²⁹⁾³³⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 中山町岩谷 1 ex., 19860628 (木俣)
 藤島町 19720707・19730626・19730920・
 19740608³⁰⁾
- 579 *Zanclognatha perfractalis* BRYK コウスグロ
 アツバ
 上山市金瓶²⁹⁾
- 580 *Herminia nemoralis* (FABRICIUS) クロスジ
 アツバ
 山形市面白山 1 ♂, 19820530¹⁷⁾
 // 村木沢²⁹⁾³³⁾
 // 門伝大平 3 ♂♂, 19880608 (木俣)
 // 高瀬戸沢 1 ♂, 19840804²³⁾
 上山市金瓶²⁹⁾
 // 経塚山 1 ♂ 1 ♀, 19900517 (木俣)
 村山市大久保¹³⁾
 尾花沢市御所山荘 1 ♀, 19870814³¹⁾
 藤島町 19660909³⁰⁾
- 581 *Herminia dolosa* BUTLER フシキアツバ

(Fig. 31)

山形市村木沢²⁹⁾³³⁾

// 本沢 1♂, 19890607 (木俣)

上山市金瓶²⁹⁾

南陽市荻小学校 1 ex., 19880615 (伊藤)

温海町温海岳³⁴⁾// 越沢楨野台林道 1♀, 19890626³⁴⁾582 *Herminia innocens* BUTLER シラナミアツバ

山形市東原町 1♂, 19600515 (博物館)

// 山寺 1♀, 19770603 (博物館)

// 村木沢²⁹⁾³³⁾上山市金瓶²⁹⁾村山市大久保¹³⁾西川町間沢 1♂, 19750728¹¹⁾藤島町 19660907・19720916³⁰⁾583 *Herminia arenosa* BUTLER ウスキミスジアツバ山形市面白山 1♀, 19820530¹⁷⁾// 高瀬 2♂♂ 2♀♀, 19830910²³⁾// 村木沢²⁹⁾³³⁾// 西藏王高原 1♂ 1♀, 19840630¹⁸⁾; 1♀, 19840711¹⁸⁾; 1♀, 19840818¹⁸⁾鶴岡市由良 2♀♀, 19880611³⁴⁾酒田市飛島¹⁶⁾上山市金瓶²⁹⁾村山市大久保¹³⁾尾花沢市銀山温泉 2♂♂, 19860712³¹⁾

南陽市吉野中学校 1 ex., 19880615 (伊藤)

// 須刈田 1 ex., 19880702 (伊藤)

藤島町 19710904・19720717・19720829・19750518・19750606・19750625・19750729・19760808³⁰⁾月山羽黒山 1♂, 19730615²¹⁾584 *Herminia stramentacealis* BUTLER キタミスジアツバ山形市上宝沢³²⁾585 *Herminia tarsicrinalis* (KNOCH) トビスジアツバ

山形市本沢 5♂♂ 1♀, 19890607 (木俣)

// 門伝大平 1♂, 19880608 (木俣)

// 上宝沢 1♂ 1♀, 19880821 (木俣)

// 不動沢 1♂, 19880622 (木俣)

// 奥山寺 1♂, 19730630 (木俣)

鶴岡市由良 4♂♂, 19880611³⁴⁾上山市金瓶²⁹⁾村山市大久保¹³⁾

天童市田麦野 1♀, 19910813 (木俣)

東根市滝の沢林道 1♂, 19860605³¹⁾

南陽市宮内 2♀♀, 19770611 (伊藤)

中山町岩谷 1♀, 19860628 (木俣)

藤島町 19730702³⁰⁾

温海町温海岳 1♀, 19890825 (木俣)

// 越沢楨野台林道 2♀♀, 19890626 (木俣)

586 *Sinarella aegrota* (BUTLER) ミツオビキンアツバ (Fig. 32)

山形市上宝沢 2♂♂, 19880821 (木俣)

上山市金瓶 1 ex., 19740830²⁹⁾村山市大久保¹³⁾

山辺町荒沼 1♂, 19870827 (木俣)

587 *Sinarella punctalis* (HERZ) ネグロアツバ
藤島町 19720706³⁰⁾

Agaristinae トラガ亜科

従来トラガ科Agaristidaeとされていたが、ヤガ科に組み入れられ、トラガ亜科とされた。

588 *Sarbanissa subflava* (MOORE) トビイロトラガ (Fig. 33)

山形市 1♀, 19540812 (博物館); 1♂, 19550601 (博物館)

// 本町 2♀♀, 19610527 (博物館)

- // 山寺 1 ♀, 19760814 (博物館)
 米沢市 1 ♀, 19750724 (山谷)
 鶴岡市高館山 1 ♂, 19610615²²⁾
 酒田市 1 ♂, 19610606 (博物館); 1 ♀,
 19610706 (博物館)
 上山市金瓶²⁹⁾
 // 経塚山 (木俣)
 藤島町 19710705・19710802・19720609³⁰⁾
- 589 *Sarbanissa venusta* (LEECH) ベニモントラガ
 山形市高瀬戸沢 1 ♂, 19840804²³⁾
 鶴岡市高館山 5 ♂♂, 19910818³⁴⁾
 藤島町 19710802³⁰⁾
 温海町湯の瀬温泉 3 ♂♂, 19890805³⁴⁾
- 590 *Maikona jezoensis jezoensis* MATSUMURA
 マウコトラガ
 鶴岡市高館山 2 ♀♀, 19640417⁸⁾
- 591 *Asteropetes noctuina* (BUTLER) ヒメトラガ
 山形市面白山 1 ♂, 19820530¹⁷⁾
 // 蔵王高原 1 ♀, 19840711¹⁸⁾
 // 不動沢 1 ♀, 19840714¹⁸⁾³²⁾
 // 村木沢早坂林道 1 ♂, 19890614 (木俣)
 // 門伝大平 1 ♂, 19850708 (木俣)
 米沢市 1 ♀, 19730609 (山谷)
 上山市金瓶²⁹⁾
 温海町大道林道 1 ♂ 1 ♀, 19910624³⁴⁾
- 592 *Mimeusemia persimilis* BUTLER コトラガ
 (Fig.34)
 山形市大森山 1 ♂, 19830617 (博物館)
- 593 *Chelonomorpha japana* MOTSCHULSKY ト
 ラガ
 山形市山寺 1 ♂ 1 ♀, 19750511¹⁷⁾
 // 上宝沢¹⁶⁾³²⁾; 1 ♀, 19540613 (博物館)
 // 雁戸山 1 ♂, 19470615 (博物館)
 米沢市 1 ♀, 19690524 (山谷)
 天童市石倉 1 ♂, 19770626 (博物館)

- 小国町 1 ♀, 19800601 (山谷)
 // 伊佐領 1 ♀, 19630603 (博物館)
 // 玉川中里 1 ♂ 1 ♀, 19750611 (博物館)
 // 玉川新田 1 ♂, 9740618 (博物館)
 蔵王連峰横川林道 1 ♀, 19610716 (博物館)
 白鷹山 1 ♂, 19690628 (山谷)

4 追 録

ヤガ科については、これまで山形県立博物館研究報告第11号 (1990) 及び同第12号 (1991) において報告してきた。この間筆者による「山形西部地域の昆虫類」(1990) 及び筆者らによる「摩耶山及びその周辺の昆虫」(1992) その他調査により種類や採集地が追加され、あるいは、その後の未整理標本の整理によりデータが追加されたものもあるので、追録として報告し、ヤガ科全体のまとめとしたい。

なお、学名前の番号は、450までは前回の報告書と同じ番号を使用し、594以降は新たに追加される種類である。

Pantheinae ウスベリケンモン亜科

- 1 *Anacronicta nitida* (BUTLER) ウスベリケンモン
 鶴岡市高館山 1 ♀, 19910818³⁴⁾
- 2 *Anacronicta caliginea* (BUTLER) コウスベリケンモン
 温海町湯の瀬温泉³⁴⁾
- 7 *Colocasia jezoensis* (MATSUMURA) ネグロケンモン
 小国町弁当沢 2 ♂♂, 19880730 (木俣)

Acronictinae ケンモンヤガ亜科

- 8 *Belciades niveola* (MOTSCHULSKY) アオケンモン
 温海町大道林道 1 ♀, 19910624³⁴⁾

- 9 *Moma alpium* (OSBECK) ゴマケンモン
山形市村木沢早坂林道 2 ♀♀, 19890614 (木俣)
// 本沢 1 ♂ 1 ♀, 19890727 (木俣)
鶴岡市金峯山³⁴⁾
// 高館山 1 ♀, 19910818³⁴⁾
天童市田麦野 2 ♀♀, 19910813 (木俣)
朝日村倉沢林道 1 ♀, 19910707³⁴⁾
- 10 *Moma fulvicollis* (LATTIN) キクビゴマケンモン
山形市本沢 1 ♀, 19890727 (木俣)
- 11 *Nacna malachitis* (OBERTHÜR) ニッコウアオケンモン
温海町大道林道 3 ♂♂ 2 ♀♀, 19910624³⁴⁾
朝日村倉沢林道 1 ♂, 19900828³⁴⁾; 4 ♀♀, 19910707³⁴⁾
- 12 *Nacna sugitanii* (NAGANO) スギタニアオケンモン
天童市天童高原 1 ♀, 19910901 (木俣)
- 17 *Acronicta major* (BREMER) オオケンモン
鶴岡市高館山 1 ♀, 19910818³⁴⁾
天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)
朝日村倉沢林道 2 ♂♂, 19910707³⁴⁾
- 23 *Triaena intermedia* (WARREN) リンゴケンモン
朝日村倉沢林道 1 ♀, 19900828 (木俣)
- 26 *Jocheaera alni* (LINNAEUS) ハンノケンモン
天童市田麦野 1 ♀, 19910813 (木俣)
温海町大道林道³⁴⁾
朝日村倉沢林道³⁴⁾
- 27 *Hylonycta catocaloida* (GRAESER) キシタケンモン
朝日村倉沢林道 1 ♀, 19910707³⁴⁾
- 29 *Viminia rumicis* (LINNAEUS) ナシケンモン
山形市村木沢早坂林道³³⁾
鶴岡市金峯山 1 ♂, 19910505 (木俣)
- // 高館山³⁴⁾
温海町湯の瀬温泉³⁴⁾
- 33 *Craniophora jankowskii* (OBERTHÜR) クロフケンモン
山形市村木沢早坂林道 2 ♀♀, 19890803 (木俣)
天童市田麦野 2 ♀♀, 19910813 (木俣)
// 天童高原 1 ♀, 19910901 (木俣)
温海町大道林道 1 ♂ 1 ♀, 19910624³⁴⁾

Bryophilinae キノコヨトウ亜科

- 36 *Bryomoia melachlora* (STAUDINGER) マルモンキノコヨトウ
天童市天童高原 1 ♀, 19910901 (木俣)
- 41 *Cryphia griseola* (NAGANO) ハイイロキノコヨトウ
鶴岡市高館山³⁴⁾
- 42 *Cryphia sugitanii* BOURSIN マダラキノコヨトウ
鶴岡市高館山³⁴⁾
- 43 *Stenoloba clara* (LEECH) ウスアオキノコヨトウ
鶴岡市高館山³⁴⁾
天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)
- 44 *Stenoloba assimilis* (WARREN) アオキノコヨトウ
鶴岡市高館山³⁴⁾
- 45 *Stenoloba manleyi* (LEECH) ウンモンキノコヨトウ
鶴岡市高館山³⁴⁾
- 46 *Stenoloba jankowskii* (OBERTHÜR) シロスジキノコヨトウ
天童市田麦野 2 ♂♂, 19910813 (木俣)
朝日村倉沢林道 1 ♂, 19910707³⁴⁾

Noctuidae モンヤガ亜科

- 55 *Euxoa oberthueri* (LEECH) ムギヤガ
山辺町荒沼 2 ♀♀, 19870827 (木俣)
- 56 *Agrotis ipsilon* (HUFNAGEL) タマナヤガ
鶴岡市高館山³⁴⁾
- 59 *Agrotis segetum* (DENIS et SCHIFFER-MÜLLER) カブラヤガ
山形市本沢 1 ♂, 19890727³³⁾
- 64 *Ochropleura plecta glaucimacula* (GRAESER) マエジロヤガ
山形市本沢³³⁾
上山市蔵王ライン 1 ♂, 19890611 (木俣)
- 65 *Hermonassa arenosa* (BUTLER) ホシボシヤガ
小国町弁当沢 1 ♀, 19880730 (木俣)
朝日村倉沢林道 3 ♂♂ 5 ♀♀, 19910707³⁴⁾
- 70 *Sineugraphe exusta* (BUTLER) カバスジヤガ
山形市村木沢早坂林道³³⁾
〃 本沢³³⁾
- 71 *Sineugraphe bipartita* (GRAESER) ウスイロカバスジヤガ
天童市天童高原 1 ♂ 1 ♀, 19910901 (木俣)
朝日村倉沢林道 2 ♂♂ 1 ♀, 19910707³⁴⁾
- 75 *Diarsia canescens* (BUTLER) オオパコヤガ
鶴岡市高館山³⁴⁾
- 80 *Diarsia ruficauda* (WARREN) ウスイロアカフヤガ
山形市門伝大平 1 ♂ 1 ♀, 19890601 (木俣)
〃 本沢³³⁾
鶴岡市高館山³⁴⁾
〃 荒倉山³⁴⁾
天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)
〃 天童高原 2 ♂♂, 19910901 (木俣)
山辺町荒沼 1 ♂, 19870827 (木俣)
- 82 *Xestia c-nigrum* (LINNAEUS) シロモンヤガ
天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)
- 84 *Xestia fuscostigma* (BREMER) クロフトビイロヤガ
天童市天童高原 1 ♂, 19910901 (木俣)
- 88 *Xestia efflorescens* (BUTLER) キシタミドリヤガ
山形市本沢³³⁾
鶴岡市高館山 1 ♂, 19910818³⁴⁾
天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)
〃 天童高原 3 ♂♂ 1 ♀, 19910901 (木俣)
朝日村倉沢林道³⁴⁾
- 89 *Xestia semiherbida decrata* (BUTLER) ハイイロキシタヤガ
朝日村倉沢林道 1 ♀, 19910707³⁴⁾
- 92 *Anaplectoides virens* (BUTLER) オオアオバヤガ
天童市天童高原 1 ♂ 1 ♀, 19910901 (木俣)
朝日村倉沢林道 1 ♀, 19900828 (木俣)・2 ♂♂, 19910707³⁴⁾
- 93 *Cerastis pallescens* (BUTLER) カギモンヤガ
鶴岡市金峯山 1 ♀, 19910505³⁴⁾

Hadeninae ヨトウガ亜科

- 97 *Melanchra persicariae* (LINNAEUS) シラホシヨトウ
山形市本沢³³⁾
- 98 *Mamestra brassicae* (LINNAEUS) ヨトウガ
鶴岡市高館山³⁴⁾
- 102 *Sarcopolia illoba* (BUTLER) シロシタヨトウ
鶴岡市金峯山³⁴⁾
温海町温海岳³⁴⁾
- 104 *Hadena rivularis* (FABRICIUS) フサクビヨトウ

- 鶴岡市高館山³⁴⁾
 107 *Egira saxea* (LEECH) ケンモンキリガ
 山形市本沢³³⁾
 鶴岡市金峯山³⁴⁾
 天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)
 東根市ムクロ沢林道 2 ♂♂ 1 ♀, 19880518 (木俣)
- 108 *Panolis flammea japonica* DRAUDT マツキリガ
 鶴岡市金峯山³⁴⁾
 山辺町荒沼³³⁾
- 109 *Clavipalpus aurariae* (OBERTHÜR) キンイロキリガ
 上山市蔵王ライン 1 ♂, 19890611 (木俣)
- 112 *Orthosia evanida* (BUTLER) カバキリガ
 鶴岡市金峯山³⁴⁾
 上山市経塚山 3 ♂♂ 1 ♀, 19910608 (木俣)
- 116 *Orthosia angustipennis* (MATSUMURA) ホソバキリガ
 上山市経塚山 2 ♂♂ 3 ♀♀, 19910408 (木俣)
- 119 *Orthosia munda* (DENIS et SCHIFFER-MÜLLER) スモモキリガ
 上山市経塚山 2 ♂♂, 19910408 (木俣)
- 120 *Orthosia odiosa* (BUTLER) チャイロキリガ
 東根市ムクロ沢林道 1 ♂, 19880518 (木俣)
- 121 *Orthosia gothica askoldensis* (STAUDINGER) カシワキリガ
 鶴岡市金峯山³⁴⁾
- 123 *Mythimna turca* (LINNAEUS) フタオビキョトウ
 天童市田麦野 2 ♀♀, 19910813 (木俣)
 // 天童高原 1 ♂ 2 ♀♀, 19910901 (木俣)
- 125 *Mythimna grandis* BUTLER オオフトオビキョトウ
 温海町温海岳³⁴⁾
- 126 *Mythimna divergens* BUTLER ナガフトオビキョトウ
 天童市田麦野 1 ♀, 19910813 (木俣)
- 131 *Aletia flavostigma* (BREMER) マダラキョトウ
 温海町温海岳³⁴⁾
- 132 *Aletia inornata* (LEECH) ツマアカキョトウ
 山形市村木沢早坂林道³³⁾
- 134 *Aletia simplex* (LEECH) ツマグロキョトウ
 朝日村倉沢林道 1 ♂, 19910707³⁴⁾
- 135 *Aletia radiata stellata* (HAMPSON) フタテンキョトウ
 温海町大道林道 1 ♂, 19910624³⁴⁾
 朝日村倉沢林道 1 ♀, 19910707³⁴⁾
- 140 *Anapoma postica* (HAMPSON) アカスジキョトウ
 山形市村木沢早坂林道 1 ♀, 19890829 (木俣)
 // 門伝大平 1 ♀, 19890601³³⁾
 天童市天童高原 1 ♂, 19910901 (木俣)

Cuculliinae セダカモクメ亜科

- 145 *Cucullia maculosa* STAUDINGER ハイイロセダカモクメ
 天童市天童高原 1 ♀, 19910901 (木俣)
- 149 *Cucullia elongata* BUTLER キクセダカモクメ
 鶴岡市荒倉山³⁴⁾
- 151 *Daseochaeta viridis* (LEECH) ケンモンミドリキリガ
 温海町越沢榎野台林道 1 ♀, 19891005³⁴⁾
- 156 *Xylena formosa* (BUTLER) キバラモクメキリガ
 上山市経塚山 2 ♂♂, 19910408 (木俣)
- 165 *Hemiglaea costalis* (BUTLER) キマエキリガ
 温海町越沢榎野台林道 1 ♂ 1 ♀, 19891105³⁴⁾
- 177 *Telorta edentata* (LEECH) キトガリキリガ
 温海町越沢榎野台林道 1 ♂ 4 ♀♀,

- 19891105³⁴⁾
 179 *Antivaleria viridimacula* (GRAESER) アオバ
 ハガタヨトウ
 温海町越沢榎野台林道 1♂1♀, 19891105³⁴⁾
- Amphipyrinae カラスヨトウ亜科**
- 188 *Apamea aquila oriens* (WARREN) アカモク
 メヨトウ
 天童市天童高原 1♂, 19910901 (木俣)
 温海町大道林道³⁴⁾
- 190 *Apamea hamptoni* SUGI ネスジシラクモヨ
 トウ
 温海町大道林道 1♂3♀♀, 19910624³⁴⁾
 朝日村倉沢林道 1♀, 19910707³⁴⁾
- 195 *Leucapamea askoldis* (OBERTHÜR) コマエ
 アカシロヨトウ
 山形市本沢 1♀, 19890727³³⁾
 天童市天童高原 2♂♂2♀♀, 19910901 (木
 俣)
 温海町大道林道 1♀, 19910624³⁴⁾
 朝日村倉沢林道 3♀♀, 19900828³⁴⁾
- 197 *Oligia fodinae* (OBERTHÜR) セアカヨトウ
 天童市田麦野 1♂, 19910813 (木俣)
 温海町温海岳³⁴⁾
- 198 *Mesapamea concinnata* HEINICKE ホシミ
 ヨトウ
 中山町岩谷 1♂, 19860915 (木俣)
- 201 *Bambusiphila vulgaris* (BUTLER) ハジマヨ
 トウ
 天童市天童高原 1♀, 19910901 (木俣)
- 204 *Amphipoea ussuriensis* (PETERSEN) ショウ
 プヨトウ
 山形市村木沢早坂林道 4♂♂, 19890714 (木
 俣)
 山辺町荒沼 3♂♂3♀♀, 19870827 (木俣)
- 215 *Sesamia inferens* (WALKER) イネヨトウ
 山形市村木沢早坂林道 1♂, 19890614(木俣)
 鶴岡市高館山³⁴⁾
- 218 *Triphaenopsis cinerescens* BUTLER ウスキ
 シタヨトウ
 天童市天童高原 1♀, 19910901 (木俣)
- 220 *Colocasia albifera* SUGI ソトシロフヨトウ
 山形市本沢³³⁾
- 221 *Euplexia lucipara* (LINNAEUS) アカガネヨ
 トウ
 鶴岡市高館山 1♀, 19910818³⁴⁾
 天童市天童高原 1♂, 19910901 (木俣)
 尾花沢市銀山温泉 1♂, 19870530 (木俣)
 温海町湯の瀬温泉 1♀, 19890805 (木俣)
 朝日村倉沢林道 1♀, 19900828³⁴⁾
- 223 *Euplexia illustrata* GRAESER シラオビアカ
 ガネヨトウ
 温海町大道林道 1♀, 19910624³⁴⁾
 朝日村倉沢林道 1♀, 19910707³⁴⁾
- 226 *Phlogophora beatrix* BUTLER キグチヨトウ
 温海町大道林道 1♀, 19910624³⁴⁾
- 231 *Axylia putris* (LINNAEUS) モクメヨトウ
 鶴岡市高館山 2♂♂, 19910818³⁴⁾
 天童市田麦野 1♂1♀, 19910813 (木俣)
 // 天童高原 1♂1♀, 19910901 (木俣)
 温海町大道林道³⁴⁾
 朝日村倉沢林道 2♂♂1♀, 19900828³⁴⁾; 1
 ♂, 19910707³⁴⁾
- 234 *Trachea tokiensis* (BUTLER) ハガタアオヨ
 トウ
 温海町大道林道³⁴⁾
- 235 *Karana laetevirens* (OBERTHÜR) アオアカ
 ガネヨトウ
 天童市田麦野 1♂, 19910813 (木俣)
 // 天童高原 6♂♂1♀, 19910901(木俣)
- 236 *Dipterygina cupreotincta* SUGI ウスクロモ
 クメヨトウ

- 温海町大道林道³⁴⁾
 237 *Dipterygina japonica* (LEECH) コクロモク
 メヨトウ
 鶴岡市高館山³⁴⁾
 // 荒倉山³⁴⁾
- 243 *Athetis cinerascens* (MOTSCHULSKY) クロ
 テンヨトウ
 鶴岡市金峯山 1♂, 19910505³⁴⁾
- 246 *Athetis lapidea* WILEMAN ヒメウスグロヨ
 トウ
 朝日村倉沢林道 2♂♂, 19910707³⁴⁾
- 249 *Athetis dissimilis* (HAMPSON) テンウスイ
 ロヨトウ
 天童市田麦野 1♂, 19910813 (木俣)
- 250 *Athetis albisignata* (OBERTHÜR) シロテン
 ウスグロヨトウ
 天童市田麦野 1♂, 19910813 (木俣)
 温海町大道林道 2♂♂, 19910624³⁴⁾
 朝日村倉沢林道 1♀, 19900828 (木俣)
- 251 *Athetis stellata* (MOORE) ヒメサビスジヨト
 ウ
 鶴岡市高館山³⁴⁾
 // 荒倉山³⁴⁾
 天童市天童高原 1♂, 19910901 (木俣)
 朝日村倉沢林道 1♂, 19900828 (木俣)
- 252 *Athetis lineosa* (MOORE) シロモンオビヨト
 ウ
 鶴岡市金峯山³⁴⁾
 天童市田麦野 3♂♂ 1♀, 19910813 (木俣)
 // 天童高原 1♂ 3♀♀, 19910901 (木俣)
 朝日村倉沢林道 1♀, 19900828³⁴⁾; 1♂ 2♀
 ♀, 19910707³⁴⁾
- 253 *Amphipyra pyramidea obscura* OBERTHÜR
 シマカラスヨトウ
 天童市田麦野 1♂, 19910813 (木俣)
- 257 *Amphipyra erebina* BUTLER オオウスヅマ
 カラスヨトウ
 鶴岡市金峯山 1♂, 19910803³⁴⁾
 // 高館山³⁴⁾
- 258 *Amphipyra schrenckii* MÉNÉTRIÈS ツマジ
 ロカラスヨトウ
 鶴岡市金峯山³⁴⁾
 // 高館山 1♀, 19910818 (木俣)
 朝日村倉沢林道 2♂♂, 19910707³⁴⁾
- 265 *Cosmia restituta picta* (STAUDINGER) シラ
 ホシキリガ
 天童市田麦野 1♀, 19910813 (木俣)
 // 天童高原 1♂, 19910901 (木俣)
 朝日村倉沢林道 1♂ 1♀, 19910707³⁴⁾
- 268 *Cosmia camptostigma* (MÉNÉTRIÈS) シラオ
 ビキリガ
 小国町弁当沢 1♂, 19880730 (木俣)
- 269 *Cosmia exigua* (BUTLER) イタヤキリガ
 鶴岡市高館山 1♀, 19910818³⁴⁾
 天童市田麦野 2♂♂, 19910813 (木俣)
 // 天童高原 2♂♂, 19910901 (木俣)
- 270 *Cosmia moderata* (STAUDINGER) キシタキ
 リガ
 小国町弁当沢 2♂♂, 19880730 (木俣)
 朝日村倉沢林道 1♀, 19910707³⁴⁾
- 272 *Xanthocosmia jankowskii* (OBERTHÜR) ヤ
 ンコウスキーキリガ
 鶴岡市高館山 7♀♀, 19910818³⁴⁾
- 275 *Ipimorpha retusa* (LINNAEUS) ヤナギキリ
 ガ
 天童市天童高原 1♂, 19910901 (木俣)
- 280 *Chasminodes aino* SUGI アイノクロハナ
 ギンガ
 朝日村倉沢林道 2♀♀, 19910707³⁴⁾
- 282 *Chasminodes unipuncta* SUGI ヒメギンガ
 朝日村倉沢林道 1♀, 19910707³⁴⁾
- 286 *Chytonix albonotata* (STAUDINGER) ネグロ

- ヨトウ
鶴岡市高館山³⁴⁾
朝日村倉沢林道 2 ♂♂, 19900828 (木俣)
- 287 *Chytonix subalbonotata* SUGI ホソバネグロ
ヨトウ
鶴岡市高館山³⁴⁾
- 289 *Oligonyx vulnerata* (BUTLER) ベニモンヨトウ
西川町月山荘 1 ♀, 19880723 (木俣)
- 290 *Pyrrhivalva sordida* (BUTLER) マエホシ
ヨトウ
天童市天童高原 4 ♂♂ 2 ♀♀, 19910901 (木俣)
- 291 *Chalconyx ypsilon* (BUTLER) ヒトテンヨトウ
鶴岡市高館山³⁴⁾
- 293 *Eucarta arctides* (STAUDINGER) ヒメシマヨトウ
山形市上宝沢 1 ♀, 19890730 (木俣)
温海町湯の瀬温泉 1 ♀, 19890805 (木俣)
- 294 *Eucarta virgo* (TREITSCHKE) ウスムラサキ
ヨトウ
山形市村木沢早坂林道 1 ♀, 19890803 (木俣)
- 295 *Dysmilichia gemella* (LEECH) モンオビヒメ
ヨトウ
朝日村倉沢林道 3 ♂♂, 19900828 (木俣)
- 298 *Iambia japonica* SUGI シロマダラヒメヨトウ
鶴岡市高館山 1 ♀, 19910818 (木俣)
- 301 *Callopietria juvenina* (STOLL) ムラサキツマキリヨトウ
山形市村木沢早坂林道 1 ♀, 19890803 (木俣)
温海町大道林道 2 ♂♂ 1 ♀, 19910624³⁴⁾
朝日村倉沢林道 2 ♀♀, 19910707³⁴⁾
- 302 *Callopietria repleta* WALKER マダラツマキリヨトウ

- 鶴岡市高館山³⁴⁾
天童市天童高原 1 ♀, 19910901 (木俣)
温海町大道林道 5 ♂♂ 3 ♀♀, 19910624³⁴⁾
朝日村倉沢林道 2 ♂♂, 19910707³⁴⁾
- 303 *Callopietria albolineola* (GRAESER) シロスジツマキリヨトウ
朝日村倉沢林道 1 ♂, 19900828 (木俣)
- 306 *Sphragifera sigillata* (MÉNÉTRIÈS) マルモンシロガ
鶴岡市高館山 1 ♀, 19910818³⁴⁾
天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)
温海町大道林道 2 ♂♂ 1 ♀, 19910624³⁴⁾
朝日村倉沢林道 1 ♂ 1 ♀, 19910707³⁴⁾

Euteliinae フサヤガ亜科

- 309 *Atacira grabczewskii* (PÜNGELER) ニッコウフサヤガ
温海町湯の瀬温泉³⁴⁾

Sarrothripinae キノカワガ亜科

- 310 *Nolathripa lactaria* (GRAESER) コマバシロキノカワガ
温海町大道林道³⁴⁾
朝日村倉沢林道 1 ♂, 19900828 (木俣)
- 311 *Negritothripa hampsoni* (WILEMAN) ネジロキノカワガ
温海町温海岳³⁴⁾
- 594 *Gadirtha uniformis* WARREN ナンキンキノカワガ (Fig.00)
朝日村倉沢林道³⁴⁾
- 312 *Blenina senex* (BUTLER) キノガワガ
山形市愛宕山 1 ♀, 19891125 (木俣)
- Chloephorinae リンガ亜科
- 315 *Iragades nobilis* (STAUDINGER) マエキンガ

- 鶴岡市高館山³⁴⁾
 温海町天魄山³⁴⁾
 // 湯の瀬温泉 1♀, 19890805 (木俣)
 // 大道林道 1♀, 19910624³⁴⁾
- 321 *Macrochthonia fervens* BUTLER カマフリンガ
 鶴岡市高館山 1♀, 19910818³⁴⁾
 温海町大道林道 1♂1♀, 19910624³⁴⁾
- 324 *Pseudoips fagana* (FABRICIUS) アオスジアオリンガ
 山形市本沢³³⁾
 鶴岡市金峯山³⁴⁾
 鶴岡市高館山 1♂2♀♀, 19910818³⁴⁾
 天童市田麦野 3♂♂2♀♀, 19910813(木俣)
 // 天童高原 2♀♀, 19910901 (木俣)
 温海町天魄山³⁴⁾
 // 湯の瀬温泉 1♀, 19890805 (木俣)
 // 大道林道 2♂♂1♀, 19910624³⁴⁾
- 326 *Ariolica argentea* (BUTLER) ギンボシリンガ
 天童市天童高原 1♀, 19910901 (木俣)
 温海町大道林道³⁴⁾
 朝日村倉沢林道 1♂1♀, 19910707³⁴⁾
- Acontiinae コヤガ亜科**
- 332 *Corgatha argillacea* (BUTLER) カバイロシマコヤガ
 温海町湯の瀬温泉 1♀, 19890805 (木俣)
- 334 *Corgatha obsoleta* MARUMO ツマベニシマコヤガ
 鶴岡市高館山³⁴⁾
- 339 *Eublemma amasina* (EVERSMANN) ベニチラシコヤガ
 天童市田麦野 1♂, 19910813 (木俣)
- 340 *Eublemma ragusana* (FREYER) ツマテンコヤガ
 天童市田麦野 2♀♀, 19910813 (木俣)
 341 *Perynea subrosea* (BUTLER) ウスベニコヤガ
 鶴岡市高館山³⁴⁾
 天童市天童高原 1♂, 19910901 (木俣)
 温海町大道林道 2♂♂, 19910624³⁴⁾
- 342 *Lophruza pulcherrima* (BUTLER) モモイロツマキリコヤガ
 温海町大道林道 1♂3♀♀, 19910624³⁴⁾
 朝日村倉沢林道 1♂, 19900828 (木俣)
- 350 *Maliattha bella* (STAUDINGER) ソトムラサキコヤガ
 天童市田麦野 1♂, 19910813 (木俣)
- 354 *Koyaga numisma* (STAUDINGER) キモンコヤガ
 天童市田麦野 1♀, 19910813 (木俣)
 温海町越沢林道³⁴⁾
- 355 *Koyaga falsa* (BUTLER) スジシロコヤガ
 天童市田麦野 1♀, 19910813 (木俣)
- 357 *Deltote nemorum* (OBERTHÜR) マダラコヤガ
 温海町大道林道 1♀, 19910624³⁴⁾
- 358 *Protodeltote pygarga* (HUFNAGEL) シロフコヤガ
 鶴岡市由良³⁴⁾
 温海町越沢榎野台林道³⁴⁾
 // 大道林道 1♂, 19910624³⁴⁾
- 359 *Protodeltote distinguenda* (STAUDINGER) シロマダラコヤガ
 鶴岡市高館山³⁴⁾
 温海町大道林道 1♀, 19910624³⁴⁾
 朝日村倉沢林道 1♂, 19900828 (木俣)
- 361 *Sugia stygiodes* (SUGI) ニセシロフコヤガ
 温海町越沢林道³⁴⁾
 朝日村倉沢林道 1♂1♀, 19910707³⁴⁾
- 363 *Erastroides fentoni* (BUTLER) シロモンコ

ヤガ

温海町越沢林道³⁴⁾

367 *Neustrotia noloides* (BUTLER) エゾコヤガ
温海町越沢林道³⁴⁾

368 *Neustrotia sugii* (TANAKA) ナカキマエモン
コヤガ
温海町大道林道³⁴⁾
朝日村倉沢林道 1 ♀, 19910707³⁴⁾

372 *Bryophilina mollicula* (GRAESER) ウスアオ
モンコヤガ
天童市天童高原 2 ♂♂ 1 ♀, 19910901(木俣)
温海町湯の瀬温泉³⁴⁾
朝日村倉沢林道 1 ♂ 1 ♀, 19900828 (木俣)

373 *Hyperstrotia flavipuncta* (LEECH) モンキコ
ヤガ
鶴岡市高館山³⁴⁾
天童市田麦野 1 ♂ 1 ♀, 19910813 (木俣)

Plusiinae キンウワバ亜科

384 *Abrostola abrostolina* (BUTLER) ユミガタ
マダラウワバ
山形市本沢 1 ♀, 19890729 (木俣)

385 *Polychrysis aurata* (STAUDINGER) アカキン
ウワバ
温海町大道林道 1 ♀, 19910624³⁴⁾

388 *Macdunnoughia confusa* (STEPHENS) キク
ギンウワバ
山形市村木沢早坂林道³³⁾

403 *Diachrysis leonina* (OBERTHÜR) マガリキ
ンウワバ
天童市天童高原 1 ♂, 19910901 (木俣)

407 *Trichoplusia intermixta* (WARREN) キクキ
ンウワバ
天童市天童高原 1 ♂, 19890929 (木俣)

Catocalinae シタバガ亜科

421 *Catocala nivea* BUTLER シロシタバ
山辺町県民の森³³⁾

424 *Catocala duplicata* BUTLER マメキシタバ
鶴岡市金峯山 1 ♂, 19910803³⁴⁾
天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)

425 *Catocala dissimilis* BREMER エゾシロシタ
バ
天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)
// 天童高原 1 ♂, 19910901 (木俣)

427 *Catocala nagioides* WILEMAN ヒメシロシタ
バ
鶴岡市高館山³⁴⁾

429 *Catocala nubila* BUTLER ゴマシオキシタバ
鶴岡市荒倉山³⁴⁾
天童市田麦野 1 ♂, 19910813 (木俣)
// 天童高原 1 ♂, 19890929 (木俣)
尾花沢市鍋越峠 1 ♂ 5 ♀ ♀, 19870930(木俣)

431 *Catocala patala* FELDER et ROGENHOFER キ
シタバ
鶴岡市金峯山³⁴⁾
// 高館山 1 ♀, 19910818³⁴⁾
鶴岡市荒倉山³⁴⁾

天童市田麦野 1 ♂ 1 ♀, 19910813 (木俣)
朝日村倉沢林道³⁴⁾

440 *Mocis annetta* (BUTLER) ウンモンクチバ
朝日村倉沢林道 1 ♂, 19910707³⁴⁾

443 *Ercheia umbrosa* BUTLER モンムラサキク
チバ
鶴岡市高館山³⁴⁾

444 *Ercheia niveostrigata* WARREN モンシロム
ラサキクチバ
天童市田麦野 1 ♀, 19910813 (木俣)
尾花沢市銀山温泉 1 ♂, 19870530 (木俣)
温海町湯の瀬温泉 1 ♀, 19890805³⁴⁾

- 445 *Lagoptera junio* (DALMAN) ムクゲコノハ
朝日村倉沢林道 1 ♀, 19910707³⁴⁾
- 448 *Spirama retorta* (CLERCK) オスグロトモエ
鶴岡市高館山³⁴⁾
// 荒倉山³⁴⁾
温海町大道林道 2 ♀♀, 19910624³⁴⁾
- 449 *Spirama helicina* (HÜBNER) ハグルマトモ
エ
鶴岡市高館山³⁴⁾

Nolinae コブガ亜科

従来コブガ科 Nolidae とされていたが、ヤガ科に組み入れられ、コブガ亜科とされた。

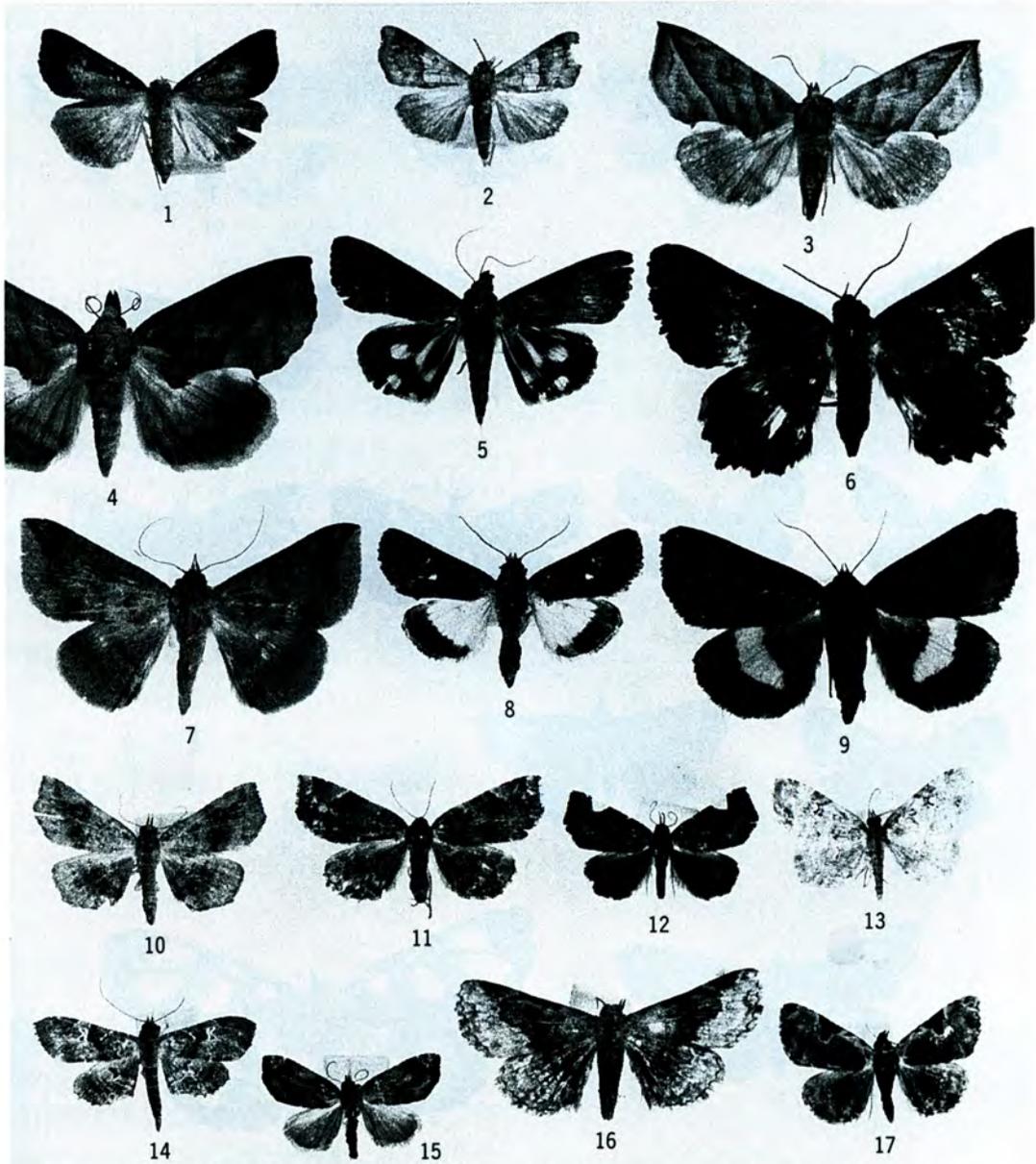
- 4 *Nola okanoi* (INOUE) ソトグロコブガ
温海町大道林道 1 ♂, 19910624³⁴⁾
- 6 *Meganola banghaasi sumi* (INOUE) スミコブガ
温海町大道林道 1 ♀, 19910624³⁴⁾
- 7 *Meganola gigas* (BUTLER) オオコブガ
温海町温海岳³⁴⁾
- 12 *Meganola fumosa* (BUTLER) クロスジコブガ
温海町温海岳³⁴⁾
// 越沢林道³⁴⁾
// 大道林道 1 ♀, 19910624³⁴⁾
- 13 *Mimerastria mandschuriana* (OBERTHÜR)
リングコブガ
鶴岡市由良³⁴⁾
温海町温海岳³⁴⁾
// 越沢林道³⁴⁾

5 引用及び参考文献

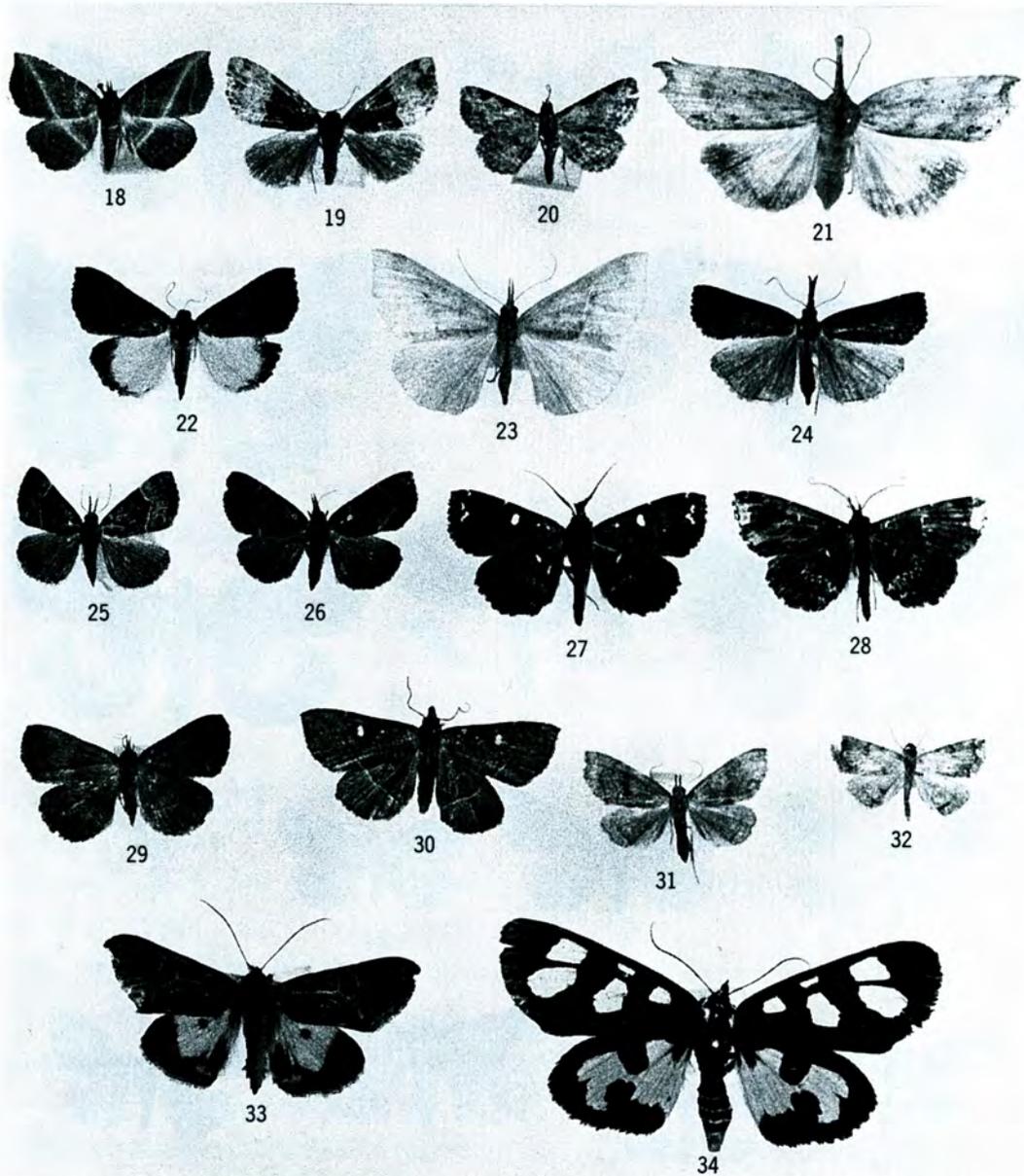
- 1) 江被戸俊弥・前波鉄也・関口武司・杉繁郎・横山敏(1961)東日本におけるタイワンキシタクチバの最近の採集記録. 蛾類通信, 24: 89—90. 日本蛾類学会.
- 2) 杉 繁郎(1961)果樹吸収蛾 *Calpe*(ウスエグリ

- バ属)の分類学的再検討. 昆虫, 29(2): 94—105. 日本昆虫学会.
- 3) 木俣 繁(1962)山形の *Hypocala* 属(ヤガ属). 蛾類通信, 27: 143. 日本蛾類学会.
- 4) 村木弘昌(1962)山形県東根市に於ける蛾類採集記録. 誘蛾燈, 13: 44—47. 誘蛾会.
- 5) 木俣 繁(1964)新庄温泉の蛾. 山形昆虫同好会会誌, 2(1): 3—4.
- 6) 水野重紀(1964)日本でのプライヤキリバの最北の記録. 庄内生物調査会誌, 1(1): 37.
- 7) ——(1965)注目すべき山形県(庄内地方)の蛾. 蛾類通信, 38: 333—334. 日本蛾類学会.
- 8) ——(1965)山形県におけるマイコトラガの採集記録. 蝶と蛾, 16(1/2): 52. 日本鱗翅学会.
- 9) 柳田慶浩(1967)鳥海山の動物調査報告. 早稲田生物, 16: 35—44. 早稲田大学生物同好会.
- 10) 岸田泰則(1974)山形県間沢の蛾. 誘蛾燈, 58: 108—112. 誘蛾会.
- 11) ——(1975)山形県間沢の蛾(II). 誘蛾燈, 62: 35—44. 誘蛾会.
- 12) ——(1977)山形県志津の蛾. 誘蛾燈, 67: 16—20. 誘蛾会.
- 13) 高谷 太(1975)郷土昆虫標本目録. 山形県立村山農業高等学校生物クラブ.
- 14) 佐藤力夫・桜井精・清野昭夫(1979)長岡市立科学博物館に寄贈された故村木弘昌氏採集の蛾類. 長岡市立科学博物館研究報告, 14: 29—102.
- 15) 白畑孝太郎・菊池賢治(1981)馬見ヶ崎川上流の昆虫類. 馬見ヶ崎川上流環境保全計画調査報告書, pp.39—78. 山形市.
- 16) 白畑孝太郎・黒沢良彦・菊池賢治(1982)山形県産昆虫目録. 最上川, pp.463—553. 山形県総合学術調査会.

- 17) 木俣繁・菊池賢治(1982)立谷川上流域の昆虫類. 立谷川上流環境保全調査報告書, pp.279—301. 山形市.
- 18) ———・————(1985)蔵王連峰の昆虫類. 蔵王連峰, pp.294—333. 山形県総合学術調査会.
- 19) 武田隆・横倉明(1983)糖蜜採集で得られた蛾. 山形昆虫同好会会誌, 12: 23—25.
- 20) 木俣 繁(1984)故白畑孝太郎氏所蔵蛾類標本 (I). 誘蛾燈, 96: 87—94. 誘蛾会.
- 21) ———(1985)故白畑孝太郎氏所蔵蛾類標本 (II). 誘蛾燈, 99: 31—34. 誘蛾会.
- 22) ———(1986)故白畑孝太郎氏所蔵蛾類標本 (III). 誘蛾燈, 103: 17—25. 誘蛾会.
- 23) ———(1985)高瀬川上流域の昆虫類. 高瀬川上流域環境保全計画調査報告書, pp.33—57. 山形市.
- 24) 市川和夫(1985)5月下旬, 月山々麓姥沢小屋付近の蛾. 寄せ蛾記, 45: 624—626. 埼玉昆虫談話会.
- 25) ———(1987)月山々麓, 8月上旬の蛾類. 寄せ蛾記, 49: 767—770. 埼玉昆虫談話会.
- 26) 木俣 繁(1987)月山及びその周辺の蛾(1). 山形県立自然博物館自然環境基礎調査報告書, pp.83—93. 日本自然保護協会.
- 27) ———(1988)月山及びその周辺の蛾(2). 山形県立自然博物館自然環境基礎調査報告書, pp.105—109. 日本自然保護協会.
- 28) ———(1989)月山及びその周辺の蛾(3). 山形県立自然博物館自然環境基礎調査報告書, pp.99—124. 日本自然保護協会.
- 29) 渡辺義汎(1987)上山市金瓶と山形市村木沢の蛾. 誘蛾燈, Supplement 4. 誘蛾会.
- 30) 布施 寛(1987)庄内支場の誘蛾燈に誘殺された蛾類とその出現時期. 山形県立農業試験場研究報告, 22: 77—103.
- 31) 菊池賢治・木俣繁(1989)御所山系の昆虫類. 御所山, pp.258—313. 山形県総合学術調査会.
- 32) 木俣 繁(1989)昆虫類. 蔵王スキー場環境影響調査報告書, pp.216—224, 319—343. 日本林業技術協会.
- 33) ———(1990)山形西部地域の昆虫類. 西部地域自然環境調査報告書, pp.47—113. 山形市.
- 34) 木俣繁・菊池賢治(1992)摩耶山及びその周辺の昆虫. 摩耶山, pp.254—299. 山形県総合学術調査会.
- 35) 木俣繁(1990)山形県の蛾類分布資料(V). 山形県立博物館研究報告, 11: 21—59.
- 36) ———(1991)山形県の蛾類分布資料(VI). 山形県立博物館研究報告, 12: 33—71.
- 37) 江崎悌三ほか(1957)原色日本蛾類図鑑(上). 保育社.
- 38) 江崎悌三ほか(1958)原色日本蛾類図鑑(下). 保育社.
- 39) 井上寛ほか(1959)原色昆虫図鑑 I (蝶蛾篇). 北隆館.
- 40) 井上寛ほか(1982)日本産蛾類大図鑑 I・II. 北隆館.
- 41) Owada, Mamoru(1987)A Taxonomic Study on the Subfamily Herminiinae of Japan (Lepidoptera, Noctuidae). National Science Museum, Tokyo.
- 42) Owada, Mamoru(1992)Synonymic notes on the herminiine moths (Noctuidae) of Japan, with descriptions of three new species. TINEA, (13)18: 183—203. Japan Heterocerists' Society, Tokyo.



Figs. 1—17. 1. (453) *Lygephila nigricostata* (GRAESER) スミレクビゴクチバ 2. (455) *Anomis flava flava* (FABRICIUS) ワタアカキリバ 3. (462) *Calyptra hokkaida* (WILEMAN) キタエグリバ 4. (463) *Calyptra lata* (BUTLER) キンイロエグリバ 5. (468) *Hypocala subsatura* GUENÉE タイワンキシタクチバ 6. (475) *Daddala lucilla* (BUTLER) ハガタクチバ 7. (476) *Ericeia pertendens* (WALKER) ウスムラサキクチバ 8. (478) *Aedia kumamotois* (MATSU-MURA) クマモトナカジロシタバ 9. (480) *Chrysothrum flavomaculatum* (BREMER) ウンモンキシタバ 10. (483) *Pangrapta trimantesalis* (WALKER) ウンモンツマキリアツバ 11. (485) *Pangrapta porphyrea* (BUTLER) シロツマキリアツバ 12. (491) *Pangrapta costinotata* (BUTLER) マエモンツマキリアツバ 13. (493) *Polysciera manleyi* (LEECH) マンレイツマキリアツバ 14. (494) *Stenograpta stenoptera* SUGI ホソツマキリアツバ 15. (496) *Lophomilia polybapta* (BUTLER) キマダラアツバ 16. (501) *Antatha wilemani* (SUGI) クロオピアツバ 17. (503) *Diomea jankowskii* (OBERTHÜR) マエヘリモンアツバ



Figs. 18—34. 18. (508) *Naganoella timandra* (ALPHERÁKY) ベニトガリアツバ 19. (509) *Oglasa bifidalis* (LEECH) ソトキイロアツバ 20. (511) *Corsa petrina* (BUTLER) オオトウアツバ 21. (529) *Latirostrum bisacutum* HAMPSON テングアツバ 22. (533) *Hypena trigonalis* (GUENÉE) タイワンキシタアツバ 23. (534) *Hypena proboscidalis* (LINNAEUS) フタオピアツバ 24. (536) *Hypena whitelyi* (BUTLER) ホソバアツバ 25. (542) *Bomolocha squalida* (BUTLER) ハングロアツバ 26. (549) *Bomolocha melanica* SUGI ムラクモアツバ 27. (550) *Adrapsa simplex* (BUTLER) シラナマイクロアツバ 28. (551) *Adrapsa notigera* (BUTLER) フジロアツバ 29. (556) *Mosopia sordida* (BUTLER) フサキバアツバ 30. (557) *Cidariplura galadiata* BUTLER ハナオイアツバ 31. (581) *Herminia dolosa* BUTLER フシキアツバ 32. (586) *Sinarella aegrota* (BUTLER) ミツオビキンアツバ 33. (588) *Sarbanissa subflava* (MOORE) トビイロトラガ 34. (592) *Mimeusemia persimilis* BUTLER コトラガ

近世最上川の文化史的考察

菊地 和博*

[1] はじめに

最上川は、古来から山形県の人々のくらしとここに深くかかわってきた。特に江戸時代、水運の発達で産業・経済の大動脈として本県産の物資を日本海経由で京・大坂などに運ぶ重要な役割を担った。また、下り荷(帰り荷)として上方をはじめとする各地の物資も船積みされて本県に運ばれた。

本稿は、こうした水運による交易によってもたらされた文物に焦点を当て、これらが文化財的価値を所有し、今なお県民の生活にかかわっている事例を示しながら、最上川の果たした役割を文化史的側面から考察し、「最上川=文化を運んだ道」を明らかにしようとしたものである。

[2] 最上川水運概史

最上川は福島県との県境にある西吾妻連峰から水源を発し、米沢盆地、村山盆地、新庄盆地、そして庄内平野を貫流して日本海に注いでいる。流路延長は229km、全国第7位で、他県にまたがることなく山形県のみを流れる「一県一河川」をなし、この種の河川としては全国第1位である。

また、流域面積は7,040km²、全国第9位で、東北地方では北上川に次ぐ大河であり、この流域面積は県土面積の約76%に相当する。

図1を見れば歴然としているが、流域外はすべて山間部であり、4盆地に12市21町3村、総計約180万人の人々が集中して住み、この人口は山形県

総人口の約85%に相当する。(注1)

このような地勢的状况から、古来から最上川とその流域に住む人々とのかかわりは当然ながら深いものがあり、近世の水運開発による経済的文化的恩恵の深さも含めて「母なる川」といわれるゆえんである。

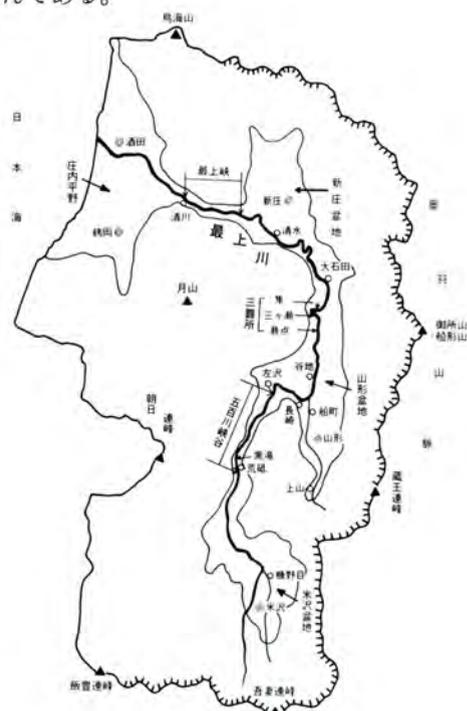


図1 最上川と地勢

さて、最上川が果たした文化史的側面を考察する前に、その基盤となった水運史の概略に触れなければならない。これまでの多くの先学諸氏の研究成果を活用させていただき、簡潔に記していきたい。(注2)

近世以前、最上川が交通路として利用されたこ

*山形県立博物館専門学芸員

とをうかがわせるものはいくつか見い出せる。(注3) しかし、それらは最上川の一時的、かつ部分的活用にとどまり、日常性をともなうものではなかった。

最上川に物資の輸送手段として船が往来したのは戦国時代で、最上郡南半分を領有していた大蔵の城主清水氏が庄内との交易に最上川航路を開き、酒田と清水間には川船が運行した。

図1には最上川をめぐる地形的特徴が示されている。酒田から清水に至るまでには最上峡がある。最上峡の流程約1kmは出羽丘陵を横断する狭隘部であるが、河床勾配は比較的緩い。両岸は杉・ブナ混交林の絶壁をなし陸上交通路はほとんど開けなかったために、庄内との交流をはかるには、しぜん最上川の水運に頼る方法がとられた。

下流部の水運事情は以上のごとくであるが、中流・上流部については容易ならざる難問をかかえていた。すなわち、^{はやぶさ}隼・^{みかのせ}三ヶ瀬・^{ごてん}基点のいわゆる三難所と^{いもがわ}五百川峡谷、とりわけ黒滝の開削という難工事が必要であった。

これら難所の河床は凝灰質砂岩からなる岩盤であり、渇水期には、岩盤が航行をさえぎるようにいよいよ水面に露出する。180度方向転換している三難所附近は流れが蛇行し、岩盤の突出とともに急流をなす一因ともなっていた。

図2でみるように、五百川峡谷の河床勾配は激しく急流をなし、当時黒滝附近は高さ約3mほど

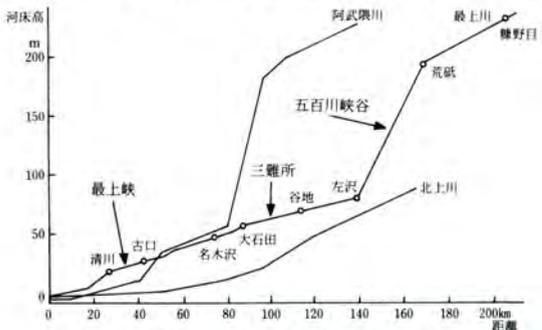


図2 最上川の河床勾配
小野寺淳『近世河川絵図の研究』に加筆・修正

の滝になっていたといわれる。三難所や五百川峡谷などの上りは、曳き子たちによる陸からの曳船がなければ航行が不可能であった。

これらの問題を解決したのは最上義光と西村久左衛門の二人とってよいであろう。



図3 最上氏の支配領域
(●印…家臣を配置した城)
『山形県史』第二巻図16に加筆

まず、中流部については、山形城主最上義光が慶長年間(1596~1614)に三難所を開削し、大石田と船町を村立して河岸を設置したことから水運が開かれる。図3のとおり、最上氏は関ヶ原の合戦以後、57万石の大々名となって庄内及び由利郡(現秋田県)までを領有し、置賜郡をのぞく現在の山形県のすべてを統一支配した。こうした政治力を背景に、最上氏は村山郡、最上郡、そして庄内を一元的に切り結ぶ交通路として、最上川中流、下流部の航路開発に取り組んだ。

こうして最上川水運史の中で最も重要な役割を果たすことになる大石田河岸の基盤が築かれ、さらに最上川支流の須川に設置された船町河岸は、領国支配の中心地山形に最も接近する外港、又は表

玄関の役割を果たすことになる。

このように、最上川水運の成立基盤は近世初頭の最上氏の時代に形成されたといえる。

さらに上流部の開発は、米沢藩がかかえる御用商人西村久左衛門によって、幕府の許可のもと、元禄6年(1693)から翌年の2ケ年にかけて行なわれた。それは、黒滝を中心に長崎から糠野目に至る長距離間の大工事で、総工費1万7千両にのぼる巨費を投じたものであった。

岩場に作られた櫓に鉄錐を吊り下げ、岩盤に落下させて破壊したり、岩盤上で火を焚いて熱し、冷水をあびせて急激に冷却させ粉砕する方法などがとられた。

西村久左衛門の開削により、置賜地方の輸送物資は急流に適して船足の速い小型船(主として小鵜飼船)で左沢に運ばれ、そこからより大型の艀船に積みかえられて酒田へと運搬されるようになった。こうしてついに最上川には、4郡を貫徹する物資直送ルートとしての水運が完成する。言い換えれば、4郡間の陸路にはきまって峠があり地理的に閉ざされてきた出羽国が、最上川という一本の経済パイプで結ばれたといえる。

じつは、このように最上川水運の開発を促進させた大きな要因に、日本海海運の発達ということがあった。特に西村久左衛門の開発の動機は、幕府領の年貢米(御城米)や米沢藩の蔵米、及び領内の特産物の青苧などを酒田まで下して、そこから日本海の西廻り航路の海船で京都、大坂、さらには江戸に輸送することであった。

それまで、米沢領内の蔵米は阿武隈川の水運を利用し太平洋側の荒浜河岸から江戸へ送ったりするなど、高い輸送費と難儀が多くルートも一定していなかった。(注4)

しかし、寛文12年(1672)に伊勢の豪商河村瑞賢が、最上川流域に散在する幕府直轄地の御城米を安全に江戸へ直廻しとするために、酒田を起点と

して日本海沿岸の寄港地を経て下関-瀬戸内海-大坂、さらには紀伊半島を迂回して江戸に達する西廻り航路を整備したのである。

この西廻り航路の発達も、全国的な商品市場の形成や流通経済の進展と密接に関連しており、最上川水運の発達も、そういう一連の社会経済史の大きな流れの中で考察する必要があるだろう。

図4は、最上川水運の開発により、河口の酒田からどこまで川船の遡航が可能となったかを、年代ごとにおおまかに図式化してみたものである。

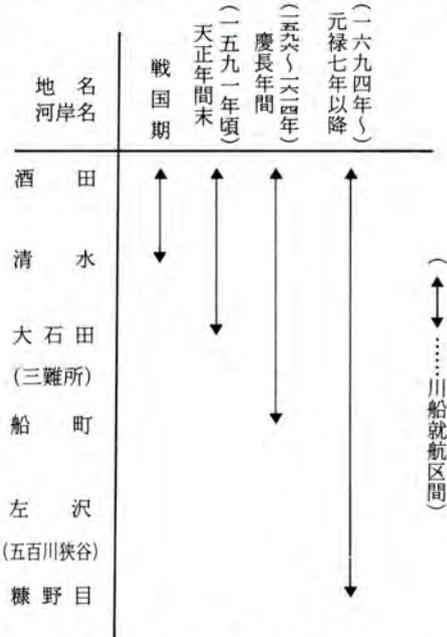


図4 最上川水運の開発推移

最上川を航行する川船数が最も多いのは、五百川峡谷開削後の元禄10年(1697)で、酒田船大小360艘(4人乗りに平均すれば327.3艘)と大石田船大小292艘(同じく319艘)だとされる。(注5) このことから、最上川水運の最盛期が元禄年間(1688~1703)とみることができる。

川船の増大ということは、輸送物資の増大であり、そこには城米、蔵米の中央市場販売が確立したこと、さらに民間商品が全国的規模で拡大していったことなどの経済事情が背景としてあった。

幕末まで最上川水運を担う川船の主役は、左沢から酒田を往来した幕府公認の艀船であり、ほかには、左沢上流を航行した小鵜飼船があった。建造上の相違を持つ船はおおよそこの2種であり、ほかは、地域により、または所有者により名称の違いがあるだけのようである。たとえば、寺津から船町間の須川では瀬取船、庄内の支川では無棚船(高瀬船系)、最上郡の鮭川では鮭川船、町船に対する米沢藩、新庄藩、などの経営する御手船、のごとくである。

なお、小鵜飼船は元禄期以降阿武隈川から移入された船で、明治に入ってから水運が衰退するまで艀船にかわって最上川の主役を務めた。

最上川流域には、清水、大石田、寺津、本楯、船町の5河岸をはじめ、数多くの河岸又は船着場が発達して、物資の移入や搬出の玄関口となった。登せ荷と称して京・大坂方面に搬出される物資は、米、大豆、小豆、紅花、青苧、真綿、蠟、漆、胡麻、葉煙草、荏油、などであり、下り荷(帰り荷)と称して酒田湊に搬入されるものは、塩、木綿、鉄、茶、古手、木材、干物など、上方を中心とする各地の物資であった。

紅花商人や青苧商人などの豪商が山形を中心に輩出するのは、海運と水運による流通経済の進展と相俟ってのことであった。

最上川水運は、明治時代にはいつてからもしばらくは山形県にとって重要な輸送ルートにかわりはなかったが、江戸時代にはみられなかった変化が訪れる。

明治5年(1872)、新政府はこれまで禁止をしていた本流における小鵜飼船の航行の承認、大石田船役所の廃止、新河岸設置の承認など、旧来の水運制度に終止符を打った。明治7年(1874)の小鵜飼船274艘、艀船101艘という逆転した数字や、(注6)あらたな運輸会社による貨物や旅客の開始などは、この間の情勢の変化を物語る。

なんといっても鉄道輸送のはじまりは、最上川の機能を著しく低下させた。奥羽本線は、明治32年に米沢、同34年に山形、同36年に新庄まで開通したが、決定的であったのは大正3年、酒田・新庄間の陸羽西線が開通するに及んで、ほぼ最上川水運はその歴史的使命を終える。

昭和に入ってから、一部亜炭輸送のほかは渡船や農耕、漁業用の小船が使われているだけである。

注1、文中各数値は国立天文台編『理科年表』(平成3年度版)や山形県統計調査課発行『山形県の人口と世帯数』(平成3年度版)などに拠る。

注2、水運史を記すにあたって、主に次の文献を参照させていただいた。

○長井政太郎『山形県交通史』 不二出版 昭和51年

○横山昭男『近世河川水運史の研究』 吉川弘文館 昭和55年

○菅田慶恩・横山昭男『山形県の歴史』 山川出版 昭和45年

○梅津保一「近世後期における最上川水運の諸問題」(『柏倉亮吉教授還暦記念論文集・山形県の考古と歴史』所収)昭和42年

○『山形県史』第二巻(昭和60年) 第三巻(昭和62年)

注3、たとえば、『三代実録』にみる軍事輸送の記事、『延喜式』にみる「水駅」の存在、『古今和歌集』東歌に表わされた「稲舟」の航行、さらには『義経記』に示す義経一行の乗船などがある。

注4、『米沢市史 第二巻 近世編1』P488~500 平成3年

注5、前掲『山形県の歴史』P143

注6、前掲『近世河川水運史の研究』P342

[3] 西廻り航路と近江商人の活躍

寛文12年に河村瑞賢が西廻り航路を整備したことは先に述べた。西廻り航路とは、広義では日本海側の各湊と下関から瀬戸内海を経て大坂・江戸を結ぶ航路をさし、狭義では江戸をのぞいた日本海諸湊と大坂間の航路をさす。この航路は、日本海海運、瀬戸内海運、伊勢湾海運などを連結したもので単区間においてはすでに近世初頭には開発されていたようである。

日本海海運は北国海運ともいわれ、北陸や東北地方の米をはじめとする物資を敦賀まで海上輸送し、そこから陸上輸送と琵琶湖の水上輸送で大津に運び、最終的に京・大坂へ送った。出羽産の紅花と青芋の輸送は、江戸時代を通じて大部分このコースを辿っている。

北国海運の輸送にあたった主たる船持商人は、三国、敦賀、小浜などの廻船問屋で、いわゆる北国船(ハガセ船)と称す海船を多く所有して北陸や東北の各藩と結んで物資を運ぶ特権的豪商たちであった。これらの豪商の中には「酒田36人衆」があり、特に加賀屋与助、永田勘十郎、粕谷源次郎は、最上氏や南部氏らの大名の御用商人として海船で蔵米や材木の輸送にあたってその名を馳せた。

しかし、西廻り航路が開発されるに及び、敦賀もしくは小浜での陸揚げの輸送コースは、陸送が長く運賃もかさむことから下関廻りが多くなっ

てきた。そうすると、越前の各湊の存在価値が低下し、おのずから特権商人たちも打撃を受ける状況となった。庄内藩が敦賀廻米をやめて大坂廻米を始めたのは、延宝2年(1674)である。(注1)

幕藩体制の整備による経済基盤の変動や、西廻り航路による遠隔地間航路の一本化が確立されるにつれて、やがて旧来の北国海運とそれを担った豪商たちも姿を消し、新しい北前船の時代を迎えるのである。

北前船は、元禄年間(1688~1703)以降から明治時代中頃まで活躍した船で、大坂を起点として瀬戸内海各湊、そして蝦夷地を結んだ区間を航行した。北前船の名称は宝暦11年(1761)頃から名づけられたというが、(注2) 弁才船型の船が主流を占めた。弁才船は江戸後期に千石船と称されるようになり、(注3) はじめ瀬戸内地方の船大工が建造した帆走専用の海船であったが、性能の良さから次第に広く使用されるようになり、大坂と蝦夷地間の北前航路の中心的役割を果たした。

広義では、北前航路につく大坂、兵庫などすべての船を北前船というが、狭義では、越前、若狭、加賀、越中など北陸地方の船主の所有する船をさ

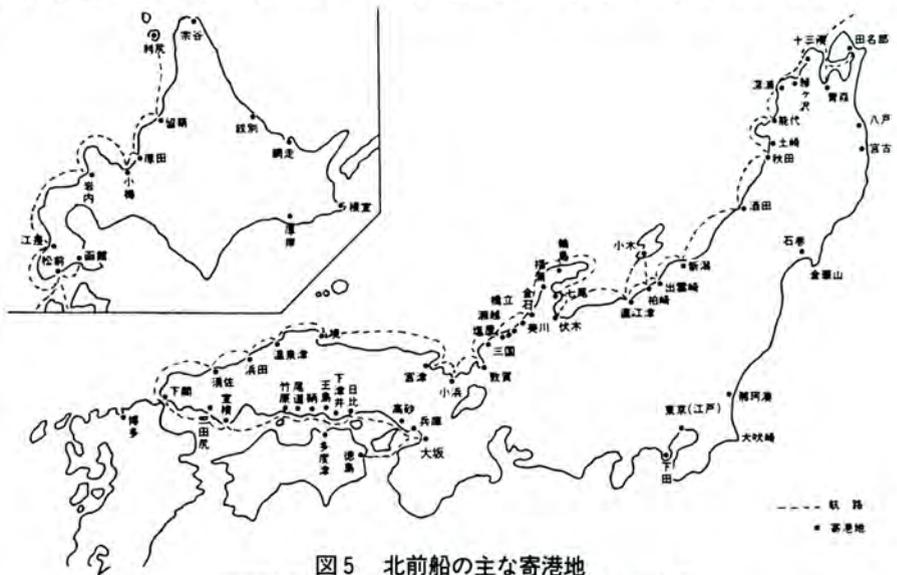


図5 北前船の主な寄港地
(牧野隆信『北前船の時代』教育社歴史新書) に加筆

す。(注4)

したがって、北陸地方には北前船の有力船主たちが輩出したことになるが、北国船時代と異なるのは、三国、敦賀、小浜などに特権的豪商が集中していたのに対して、それらの周辺に群小する地方実力者が育ったことである。(注5)

酒田には、先にみたように江戸初期は海船所有の廻船問屋である豪商が存在したが、中期以降は所有する地元商人もなく、また庄内藩船もなかった。

幕府領の米を積む御城米船は、幕府が直接上方の雇船を採用し幟を付けて官船としている。最上川流域の諸大名の蔵米も、大坂で雇船を調達して依存度を高め、その結果、西国の弁才船が大量に北前航路に進出することになった。

ただし、米以外の日用品などの商人荷物の輸送については、先にあげた北陸地方に船籍を持ついわゆる北前船が江戸時代を通して圧倒的多数を占めていた。(注6)

このような北前船は、物資輸送の運賃で利益を得る方法は取らず、自分で買い込んだ特産品を大坂と蝦夷地間の各湊で売買しながら航行して利益を上げる買い積み商法を専らとし、これ故に北前船は「動くマーケット」とたとえられている。(注7)

このような北前船の積極的な商業活動が、商品の全国的規模での流通化を促進させることに大いに役立ったと思われる。酒田湊に集まる下り荷や登り荷の品々は、この北前船によって上方から、或いは蝦夷地、秋田方面から運ばれたものであり下り荷は、さらに酒田から川船に積みかえられて最上川を遡って内陸地方まで運ばれた。

以上、最上川水運、日本海海運の発達をみてきたが、このように輸送手段が整備され、広域流通経済が進展する中で、なんとといっても近江商人の果たした役割の大きさに着目しなければならない。

近江商人は、高島商人、八幡商人、日野商人、五個荘商人など、それぞれ近江国の出身地別に異なることができ、発生時期もそれぞれ異なるようである。しかし、彼らの活動が活発化したのは、いづれも江戸時代である。

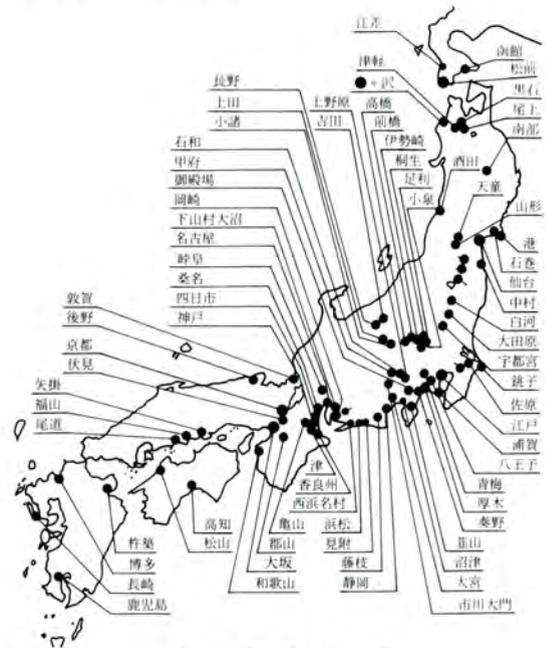


図6 近江商人の出店

江頭恒治「江州商人」(日本歴史新書)より引用

近江商人の商業活動の基本は行商であり、そのスタイルは道中合羽に天秤棒を肩に担いだ姿として定着している。天秤一本で千両を稼ぐなどということから、「近江の千両天秤」という言葉が全国に知れ渡った。かつては多数で商隊を組んでの行動であったのが、江戸期に入って個々人単位の行商形態となり、活動範囲はほぼ全国的であったようだ。とりわけ関東から東北にかけて最も多かったようで、東北地方に進出した理由として、上方と東北地方の気候差からくる産物の相違、生活水準及び経済水準の格差、大藩が少ない、などがあげられている。(注8)

全国に行商活動を広めた近江商人たちは、図6

のように活動拠点地に出店を設営するようになる。本国近江や上方の産物は本店から出店を通して地方へ売りさばかれ、地方の産物は出店が仕入れて上方へ売った。この近江商人の商法は「のこぎり商い」とか「諸国産物回し」といわれた。

これら登せ荷、下り荷のうち、軽量荷は陸上輸送したが、重量荷は北前船の海上輸送に依存したはずである。近江商人の中で、西川伝右衛門、岡田弥三右衛門、藤野喜兵衛などは自ら海船を所有し海運業にかかわっている。(注9)

山形と近江商人とのかかわりは、五百川峡谷を開削した西村久左衛門が大津出身の近江商人であったということなど、じつに深いものがある。

山形に進出した近江商人としては、まず日野商人系といわれる村居清七家と浜村伊惣治家があげられる。特に村居家は元禄頃には十日町に店舗をかまえ、大蔵村(現山辺町)の稲村七郎左衛門家と提携して紅花や青芋を取り扱う強力な荷問屋に成長し、秋元・水野両山形藩の御用商人にまでなっている。さらに村居家は、およそ7・8百石積の「万福丸」「万代丸」と称する自前の海船を酒田湊に持ち、自ら海運に従事している。(注10)

近世中期になると、山形に出店を持つ八幡商人系が多くなる。西谷伊兵衛家、西谷清兵衛家、中村喜兵衛家、中村林兵衛家、西谷惣右衛門家、西谷金兵衛家、西川孫七家などである。天童には、日野出身の植村長右衛門が日野屋と称する出店を構えているが、のち没落して同じ日野出身の中井家が日野屋の経営権を握り文久元年(1861)まで続いている。(注11) なお、西谷清兵衛家の屋号尖印を帆に記した船が最上川を上下して当時の風景の1つをなしたといわれるほどであった。(注12)

これら近江商人の勤儉力行・積極果敢な商業姿勢や経営方針は、山形の地方商人たちに強い影響を与えないはずはなく、やがて地元出身者のいわゆる紅花商人と称される豪商が、近世中期以降多

く輩出し、広域流通経済の担い手として活躍する土台をなした。

この時期の商人たちの願いは、物資を積んだ船の安全航行であり、最上川や日本海上での難船が最大の恐怖であったといえる。ここから無事通船への祈願、信仰が生まれ、最上川流域にある各寺社、たとえば貴船神社(山形市など)、金毘羅神社(大石田町)、乗船寺(同)、外川神社(戸沢村)、善宝寺(鶴岡市)など舟乗りや商人たちの祈願所となった。

その願いは狛犬や石燈籠などの台座に「通船安全」「船中安全」「海上安全」などの文字として刻まれており、今なお数多く見出すことができる。

江戸時代の流通経済のかなりの部分が、海運と水運によって成り立っていたことを物語るものであろう。

注1、前掲『山形県史』第2巻 P669

注2、『酒田市史改訂版上巻』P490 昭和62年

注3、石井謙治「千石船(弁才船)の実相」(『特別展 千石船』展示資料図録所収 船の科学館) P3 平成4年

注4、牧野隆信『北前船の時代』P55 教育社歴史新書 昭和54年

注5、福井県立博物館編『第2回特別展 北前船と越前・若狭』 昭和60年

注6、前掲『山形県史』第3巻 P571の表58には、天明7年、寛政8・13年、文化13年、文政4・9年、慶応3年の7年間の酒田入津船数が船籍ごとに累計されている。これによれば、合計2,163艘のうち北国(北陸)所属が867艘と多数を占めている。

注7、北前船の里資料館編『日本海の商船 北前船とそのふる里』 P8 昭和60年

注8、近江商人郷土館編『特別展 近江商人の旅』 P11 平成2年

注9、朝日新聞大津支局編『近江商人』

P54.55.58 かもがわ出版 平成3年

注10、山形大学付属博物館には村居家から寄託された万福丸の見取図「十歩一の図」(約3m)がある。板に墨書された図の右端に「天保14年卯九月吉日 新立^{ちようだて} 棟梁太兵衛」とある。

注11、今田信一『最上紅花史の研究』 P221 高陽堂書店 昭和47年

注12、『滋賀県の歴史』 P195 山川出版 昭和47年

[4] 運ばれた文化

次に、江戸時代に最上川水運によって出羽に運ばれた文物の主なものを取り上げ、最上川が与えた文化的影響の大きさについて考察したい。

1、仏像文化

山形城主最上義光の神仏への厚い保護が下地となつてか、出羽の人々の寺社への思い入れはかなり深いものがあるように思われる。それは、古くからある出羽三山信仰に根ざすものなのかも知れない。

こうした信仰心の深さは仏像崇拜となつて現われ、より優れた上方や江戸の仏師によって作られた仏像が、日本海と最上川によって運ばれている。その数は予想以上に多いのが実態と思われる。こうした仏像文化財ともいべきものが、今なお寺院に安置されて参拝者を魅了している。

(1) 釈迦涅槃像

大石田町にある大石山乗船寺(浄土宗)は慶長元年に開山された寺で、最上川の大石田河岸にほど近いところであつて、水運の盛んな江戸時代には船乗りたちが航海の安全を祈り足しげく参拝に訪れた所である。

この寺の経蔵(釈迦堂)には釈迦涅槃像が安置されている。俗に寝釈迦様とも称されるように、全

長約2メートルの巨体を台座の上に横たえている。寄木造りの全身は金色に輝き、神々しいばかりの姿を示している。

寺伝によれば、この仏像は元禄7年(1694)に山形市の来迎寺の僧木食傾誉叶心が寄進したもので、京都で作られて日本海と最上川を船で運搬して大石田で陸揚げしたものという。高さ約60cmの台座には「木食傾誉叶心」「京 光恵尼 拾五歳書」と記され、寺伝を裏づけるものとなっている。昭和62年に町指定文化財となった。

なお、乗船寺本堂には山形県指定文化財の千手観音立像があるが、背面に「正慶2年(1333)」の墨書があり鎌倉時代に作られた古い仏像であることがわかる。じつは、この仏像は近江国出身の戸田安右衛門なる人物が江戸時代に北前船に乗って運び、寺に寄進したと言われている。戸田安右衛門は正徳2年(1712)に没したと寺伝にあるが、戸田家は現在まで16代を数え江戸時代は水運に力を尽した荷宿代表であり、現在は大石田町内で菓子店舗を営んでいる。戸田安右衛門は近江商人であつたとされており、(注1) 戸田家にはらくがんの木型や「根元 京菓子所 近江屋製」の銘ある包装紙などが残されている。

(2) 釈迦如来大仏

東根市沼沢地区、森谷繁男氏宅に棟続きで隣接する一室に、釈迦如来の大仏がある。もともこの大仏は、同地にあつた桂岩山佛心寺(黄檗宗)の本尊であつた。その由来については、『東郷村史』によれば、宝永3年(1706)に沼沢村の名主森谷愚兵衛が発願して田畑及び敷地を寄進、寺院を建立した。正徳2年(1712)寺号を佛心寺とし、同5年(1715)には江戸の仏師法橋善慶の作による釈迦如来を、代金百五拾五両で購入した。この仏像は酒田から船廻りで取寄せたとある。(注2)

このことから、この大仏は西廻り航路(場合によっては東廻り航路)と最上川を辿って運ばれた

といえる。

さらに、「東海林梅吉氏所蔵文書」として以下のような内容が紹介されてある。

大仏注文受負書写

一、捨花釈迦如来

御長け御髪極迄座像八尺に仕唐様作り木寄せ随分念を入れ上桧を以て仕立合めに一々堅木にてほぞを立其上木地作り至極念を入れ造立可仕候事

其上御腹内并御首之内何も不残銘々念入其上はぎめはぎめ志んのこくそをかい地さび黒塗に可仕事

一、塗仕様右之御本尊継目合めちきりを入れ銅の釘線を掛け志んのこくそをかい同せしめ漆をもって布總袋をせに仕布揃致し地堅め仕上堅地切粉さび段々とつけ化精村さび致し中塗の上一々利にて可申上候事

一、御身の内何も上々金粉地塗まま蠟色に致し随分念入可仕候

一、台座の巾壱丈三尺八寸 同高三尺五寸

一、御光高壱丈三尺七寸 同巾壱丈二尺八寸

一、台座後光惣高 壱丈七尺七寸 本尊代金七拾兩 台座後光代金七拾五兩

一、和久結綿御座渋紙共此方にて相納可申候代金拾兩也 三口合金百五拾五兩

正徳五年末ノ七月二十四日 南伝馬町1丁目

大仏師 法橋善慶 印

佛心寺様

このように、釈迦如来大仏は檜を材料にした木像で全高2m77cmもあり、県内では如来像としての大きさは中山町の大日如来像（銅製・全高2m80cm）に次ぐものであろう。購入時は蓮華台座と後光が備わっていたが、堂内安置の際入りきれず取り払ったとされる。

佛心寺本堂は今では取り壊され、堂守にあたる森谷氏本宅の一室に安置されている。平成2年度に市有形文化財に指定された。

(3)胎蔵界大日如来

中山町長崎柳町の烏兎沼宏之氏所蔵の胎蔵界大日如来は、かつて烏兎沼家が代々住職を務めた天形山長大寺(天台宗)の本尊として祀られた仏像である。20年前の家屋解体の際、「御注文」とタイトル書きのある文書が発見されたが、これには胎蔵界大日如来、台座、厨子の製作方法、特徴、代金などが微細に説明されてある。内容からして現存する大日如来のものと思われるが、「御注文」には「天明6年京富小路二條下ル所 佛工 法橋友学印」の銘がみられることから、この仏像が京都の仏師によって作られていることがわかる。

仏像の全高は台座も含め79cmあり、全身に金が塗られていたようであるが、現在は剥落している。豪華な宝冠を戴き、首に瓔珞、肩から天衣をまとった気品にあふれた姿である。

中山町は最上川の長崎河岸で栄え、上方をはじめとする他地域の文化が大いに流入した場所でもある。この仏像も京都からはるばる船で運ばれて、草深い奥羽の地で人々の祈りの対象となったのである。

(4)五百羅漢

①山形市山家、佛母山金勝寺(曹洞宗)

金勝寺の第17世太素慧元大和尚の発願で、土蔵造り二階建の五百羅漢安置堂が完成したのは天保6年(1835)である。翌年にこの安置堂に京都から五百羅漢の大量の仏像群が運ばれた。船で運搬した際の荷札が金勝寺に残っているが、それによれば、京都から大坂を経て海路酒田まで運び、最上川を遡って長崎河岸で陸揚げし長崎の同円寺に一旦運んだ。そこからさらに山形まで運搬していることがわかる。

五百羅漢の仏師は、京都室町通り錦小路上町の

七条左京康伝及び康朝の二人で、運慶や湛慶の流れをくむ人物らしい。(注3)

同寺の安置堂には、太素和尚自身が揮毫した「羅漢閣」の扁額が掲げられ、2階から1階まで釈迦三尊像、十六羅漢、五百羅漢の大仏像群が所狭しと並べられ庄巻である。釈尊の500人の弟子(最高位の修行僧)として信仰のある五百羅漢は、1番から5百番まですべての羅漢に番号と名前があり泰然と座している。

すべてが木像で高さは台座、法輪を含め、座像は約40cm、立像は56cmほどが平均である。五百体に1つとして同じ姿態はなく、彩色が施され、様々な持ち物を手にしながらそれぞれが独特の表現を示していて興味深い。圧倒されるほどの仏像数は、当時の信仰の深さを物語るものであるが、この五百羅漢の信仰は、庶民信仰としてこの頃全国的に広がりをみせていたようである。

②高島町金原、玉龍院(曹洞宗)

寺伝によれば、天保6年(1835)、玉龍院の第12世祖岩良印大和尚が飢饉や疫病から村人を守るため、京都で製作した五百羅漢を日本海と最上川を経て当院に運んだ。

陸揚げした場所に2説があるようで、1つは長井で揚げたとするものと、当時は最上川の渇水期で上流部分は船の遡航が難しかったことから、谷地で揚げて高島まで陸送したとするものである。

五百羅漢の仏師は、京都5条の庄司覚太を中心とする一門のグループであり、寄木造りで彩色が施されてある。ほとんどが法輪を含め全高37cmぐらいの仏像で先の金勝寺同様、五百体が肩を並べて整然と安置されている。羅漢堂には五百羅漢のほかに、同じ作者たちによる十六羅漢(天保2年搬入)と三十三観音(嘉永2年搬入)が安置されて、威風堂々の空気に気圧される思いである。五百羅漢像は、昭和47年に町文化財に指定されている。(注4)

このほか、江戸期に京都でつくられて船によって運ばれたいわれのある仏像について簡潔に記す。

③鶴岡市大山、善宝寺の五百羅漢

京都の仏師の製作で、安政2年(1855)に納められたと寺伝にある。

④酒田市相生、海晏寺^{かいあん}釈迦堂の釈迦涅槃像

寛政元年(1789)頃、酒田本間家の分家、本間新四郎が京都に趣き注文してきたもので、2メートル以上の巨大な銅製の釈迦涅槃像ということであるが、(注5)同寺住職の話によれば、釈迦堂が半倒壊状態が続いて仏像の調査は進んでいないとのことである。

なお、同寺経蔵にある輪蔵も、寛政元年に京都の仏師駒野丹下によって作られたものという。(注6)

⑤羽黒町手向、黄金堂の二王尊(2体)

〈その1〉黄金堂を管理する正善院には、製作を依頼された仏師の注文請書や安置されるまでの経過を記した日記が残されている。それによると、二王尊は元禄年間に京都の仏師が製作し、海路を経て酒田で川舟に積みかえ、最上川から赤川、さらに赤川から京田川へと遡って山麓の添川で陸揚げし荷車で運んだという。

〈その2〉寛永年間(1624~1643)に有俊が発願して建立した入口の二王門には、もう一体の二王尊がある。この仏像の胎内から発見された文書によれば、宮内卿と称する京都の仏師康音が二王尊を製作し、やはり船で運んできたという。

このほかに、黄金堂本尊の座像3体と弁才天像、正観音菩薩立像30体、土肥次郎実平の木像も京都の仏師の手になるものという。それから、昭和49年に出羽三山歴史博物館に寄贈された243体の仏像の大部分も同様のことがいえるという。(注7)

⑥天童市道満、新源寺の勝軍地藏菩薩像

菩薩像台座裏にある記述から、貞享5年(1688)に宝幢寺第24世亮辯が、京都の仏師井関念正法師

に彫らせていることが知られる。

⑦山形市舟町、善行院大日堂の三十三観音像

寺伝によれば、大日堂の中の大日如来を中心に安置されている三十三観音像も、京都で製作されて運ばれたものとされているが定かではない。

注1、富山和子『水の文化史』P85 文芸春秋社
平成2年

注2、名和季蔵『東郷村史』P311 昭和29年

注3、『佛母山金勝寺誌』P56～58 昭和58年

注4、玉龍院発行資料「文化財五百羅漢像」による。

注5、6、前掲『酒田市史 上巻』P927及び酒田市田村寛三氏のご教示による。

注7、〈その1〉〈その2〉ともに戸川安章「日本の潮流と文化」(『山形県民俗・歴史論集』所収、東北出版企画)昭和52年を参照した。

2、梵鐘

最上義光は文禄元年(1592)に山形の城下町を整備するにあたって、銅町を設けて鋳物職人を住まわせている。職人たちは大型の梵鐘などの鋳造技術はまだ持たず、比較的小型の仏具や鍋、釜などの製造が中心であった。寛文10年(1670)作の谷地長楽寺の鐘と同11年作の山形長源寺のその2例を除き、山形周辺の寺院の梵鐘は正徳年間(1711～1715)あたりまでは、京都、大坂、越後などの鋳物職人の製造によるとみられている。(注1) これらは現地製造のものもあれば、職人が地方に下り製造したものもあるようである。以下は主な例である。(注2)

(1)現存する主な梵鐘

- ①山形市専称寺 慶長11年(1606)天下一道二作
- ②山形市宝幢寺(現埼玉県深谷市福寿院所蔵)
慶長11年(1606) 天下一道二作
- ③山形市光禅寺 元禄11年(1698) 藤原国次作

④山形市称念寺 元禄12年(1699)筑後大掾^{じょう}常味作

(2)現存しない主な梵鐘(戦時供出、その他)

- ①大石田町浄願寺 寛永8年(1631)藤原宅次作
- ②村山市葉山大円院 元禄4年(1691)作者不明
- ③大江町巨海院 元禄10年(1697)筑後大掾常味作
- ④東根市佛心寺 正徳4年(1714) 藤原国次作
- ⑤山形市光円寺 正徳5年(1715) 藤原国次作
- ⑥山形市等栄寺 享保4年(1719) 藤原国次作

(1)①の天下一道二は、京都三条釜座の鋳物師で、豊臣秀吉から天下一の称号を与えられたとされる名工である。出羽三山歴史博物館に所蔵されている祓川の橋の擬宝珠と黄金堂の擬宝珠も天下一道二の作である。この梵鐘は船で日本海を北上して酒田を経て最上川をさか上ってきたものとされる。

藤原国次は、和田信濃大掾藤原国次と称し、京都三条釜座に属する大物専門の鋳物師であった。

(1)③から(2)⑥の製造に至る21年間、最上・村山地方に藤原国次作の梵鐘が13個存在したことが確認されており、(注3) その間、8度も出職^{でしよく}鋳物師として出羽国に来て鋳造指導を行なっているという。(注4)

(1)④と(2)③は京都堀川住の鋳物師筑後大掾常味の作で、県内では彼の作はこの2鐘のみしか確認されていない。(注5)

(2)①の藤原宅次は、越後高田の鋳物師であり、大石田の豪商二藤部兵右衛門義房が梵鐘を浄願寺に寄贈したものである。

(2)②について、『醫王金剛日寺年要記』には、大円院中興の祖舜與が京都に梵鐘を求め船で運んできたことが記されてある。それによれば、京都で鋳造された梵鐘は元禄4年(1691)に大坂から海路酒田に運ばれ、最上川を川舟で遡って大窪村(現村山市大久保)で陸揚げした。同年6月6日大窪村から険しい山道を修羅に乗せて曳き上げ、9日の日

没に大円院本堂前に到着した。この作業に要した人足は2千余という。(注6)

大円院の梵鐘は戦時中供出して今は残っていないが、藤原国次作であったかも知れない。

注1、前掲『山形県史』第3巻 P399

注2、同『山形県史』第3巻、及び小形利吉「山形市内の梵・半鐘(1)(2)」(『研究資料集』第6号・第7号所収)昭和58、59年
小形利吉『幼の梵鐘』高陽堂書店 昭和51年、以上の文献を参照した。

注3、榎昭一『地場産業と職人たち10』(『婦人やまがた』所収)昭和63年

注4、榎昭一「出羽の鋳物業」(『人づくり風土記』所収 農山漁村文化協会)平成3年 P121

注5、前掲「山形市内の梵・半鐘(2)」P3

注6、『北村山郡史』下巻 P432~433 名著出版 昭和47年

3、石造文化財

瀬戸内地方や北陸地方産の自然石が、西廻り航路を往来する海船によって運ばれ、庭石、石燈籠、石鳥居、場合によっては墓石などの材料として用いられている例は多くみられる。

ところで「綿積石」という言葉があるが、綿を積んだ船を安定させるため、とくに重しとして積みこまれた石の意という俗説や、海の神又は海を表わすワタツミから名付けられたとする説もある。どちらかはともかくとして、比較的小型の石材は、船の重心を低く安定させる目的をともなって重い陶器類と一緒に船底に積まれた。一方、大型の石材は船によってではなく筏で運び、しかも筏の底に吊り下げのように海中を運搬したのではないかと考えられている。

筏の上に石材を積むよりは、海中に吊した方がより重心が低く安定し、さらに石に浮力がかかる

ことから重さが軽減される効果を生む。こうした利点を生かして石材を吊り下げた筏は、船に曳航されながら日本海と最上川を遡航したと思われる。

石材は、腕の良い石工によって産地で加工し分解して運ばれたものと、自然石のまま当地方に持ち込まれ、のちに上方の石工によって加工、整形されたものの2種があったものと思われる。

後者の例に類似するものとして、信州石工たちのような領外の名だたる技術者が訪れて石造物を建立していった事例もある。

県外産の石材でつくられたとされる石造物、及び上方方面の石工名が明らかである石造物を記す。

(1)河北町下楨 白山神社の石灯籠

下楨地区の紅花商人であった本木林兵衛が、嘉永6年(1853)に当地区の鎮守白山神社に寄贈したものである。林兵衛の他に協力者と思われる奈良屋権兵衛と表屋庄兵衛の2人の名が刻まれているが、風化が進みなかなか判読しにくい。この2人は播州姫路の高名な古着問屋で本木林兵衛の大量取引先であったという。(注1)

高さ195cmの石灯籠は御影石と思われ、70cmの自然石の台座にすえられている。

(2)山形市十日町 佐藤利右衛門家の石灯籠

紅花商人として有名な佐藤家(屋号⊕)には、商取引による上方との交流を示す文物が多く残されている。たとえば、船の重しとして運ばれた春日灯籠4基のほかに、京都貴船神社敷地内にあった菊の苗を庭に移植して今も花を咲かせる貴船菊、京都で染色された紅花染の帛紗、衣類、建造物として上方志向が濃厚に表現された蔵座敷、などがあげられる。

大坂住吉神社へ奉納した石灯籠なども、上方との交流を明瞭に示すものである。

(3)山形市八日町 六棧八幡宮神社の石灯籠

石灯籠1対のうち、社殿に向かって左側の灯籠台座下から4段目に、「大坂心齋橋 石工 名田屋

喜兵衛」とあることから、大坂石工の手によることがはっきりわかる。また、同台座に「⊕大屋 世話人 山口吉助」とある。⊕大屋とは、先にあげた紅花商人佐藤利右衛門家であり、対をなす右側灯籠には「安政6年8月 海上安全 願主 佐藤利右衛門」の文字が読み取られる。

ついでながら、石灯籠の手前にある狛犬の台座に「海上安全 天保5年 午 十日町 佐藤利兵衛」の銘がある。この佐藤利兵衛家は、佐藤利右衛門家の本家にあたり、海運、水運を通じて上方と広く交易を行った一族豪商たちの宗家である。

彼らが「海上安全」を祈願して石灯籠、狛犬を奉納したのは、この神社が境内隅に海の神を祀る住吉神社を擁していたからではないかと思われる。住吉神社の社殿前には、慶應3年(1867)建立の石灯籠1対があり、やはり台座に「海上安全」とあり、寄贈は佐藤屋文吉である。

(4) 山形市蔵王山頂 刈田嶺神社の狛犬

安政4年(1857)建造で、寄贈した多数の商人名の中に「山形石工 片岡吉之助」と並んで「大坂石工 西川弥兵衛」の名を見出すことができる。山形を代表する蔵王山頂にまで、上方の影響をみることができるのである。

(5) 山形市宮町 鳥海月山両所宮の狛犬

参道に沿って狛犬が2対あるが、神殿に向かって左側手前の狛犬の台座に「嘉永2年 通船安全」とあり、さらに「大坂西横堀 細工人 和泉屋四郎兵衛」の名がようやく判読できる。先の六樞八幡宮神社の石灯籠、刈田嶺神社の狛犬とともに、大坂石工たちの活躍ぶりがここでもみられる。

両所宮の狛犬には寄附者として数十名の商人の名が屋号とともに記されており、「通船安全」の祈願の深さが思い知らされる。

(6) 寒河江市丸の内 古澤酒造庭園の石灯籠

御影石で作られた雪見型灯籠で、全高150cm、笠の長さ136cmの大型のものである。言い伝えによれ

ば、最上川を筏で運んできて、西村山地方では大きな船着場である本楯河岸で陸揚げしたという。重量感あふれる立派な灯籠であるが、おそらく上方でつくられて分解して筏で運んだものと思われる。

(7) 中山町岡 柏倉九左エ門家庭園

柏倉家は12ヶ村の大庄屋を務め、約400年の歴史を持つ旧家である。敷地約4千坪、建坪約6百坪の広大な中に、長屋門、主屋、米蔵、仏蔵、前蔵などを所有し、住宅全体が昭和55年に県文化財に指定されている。

柏倉家は10戸に及ぶ有力分家とともに財閥を形成して、現在所蔵する文物から上方との交流は深いものがあつたことがわかる。主屋前庭園の石灯籠は、小豆島産の御影石でつくったとされ、大坂城三の丸にも同様の石灯籠があることから兄弟灯籠といわれる。このことから、この石灯籠は近世以前につくられたとみることもできるが、柏倉家に運搬され庭園に設置されたのは江戸時代に入ってからと伝えられている。古澤酒造の石灯籠とよく似た雪見型のものであるが、柏倉家のものが大きく火袋が精巧にできている。

さらに、柏倉家に入入りする庭師によれば、仏蔵前庭には京都の鞍馬に産する閃緑岩の一種のいわゆる鞍馬岩が使われており、京都冷泉家の庭園の造りときわめて類似しているという。柏倉家の経済活動の広がりや財力の大きさ、上方との交流などからして、上方の庭師が関与していることは充分ありうる。

(8) 酒田市浜田 藤井治康家の石灯籠

藤井家は代々地主として浜田地区周辺に影響力を持った旧家である。蓄積した財力を背景に、慶応年間(1865～1867)に小豆島産の極上々の御影石を運んで、春日型や雪見型の石灯籠を庭園に多数建造した。その時の「注文書」が残っており、それによれば15基存在したが、今では13基となって

いる。(注2)

(9) 鶴岡市馬町 榎尾神社の石鳥居

「大山の犬まつり」で有名なこの神社の石鳥居の柱の銘文から、慶長16年(1611)に越前国から運ばれたことがわかる。昭和30年に県文化財に指定されている。

なお、石造物とは直接かかわりはないが、鶴岡市の酒井藩校「致道館」の屋根瓦の一部に、文化年間作の「越前瓦師 喜兵」と刻銘された、いわゆる塩焼瓦が現存するとのことであるが、(注3)越前石とともに越前国との交流を示す資料として注目される。

(10) 鶴岡市大山 石敢当(せきかんとう)

市道大山橋線の道路敷に、お堂に入った高さ約40cmの自然石があり、表面に「石敢当」と刻まれている。

石敢当とは、南九州から琉球各地で信仰され、辻や三又路などに立てて一種の魔よけとした石神の1つである。一時期、大山が北限とされたが、この石神がはるか遠い出羽国に存在することは、やはり西廻り海運が文化を運んだと考えることができる。建造年代は不詳。昭和41年県有形民俗文化財に指定されている。(注4)

以上、石造建造物について述べたが、最後に墓石の例として、山形出身の俳人小林喜左衛門風五(1742~1791)の墓が山形市六日町の天然寺にあるが、この墓石とすぐそばに並ぶ数基の小林家の墓石は大坂方面から船で運んできたものといわれている。(注5)

注1、前掲『最上紅花史の研究』P299

注2、前掲『酒田市史上巻』P505及び酒田市田村寛三氏のご教示による。

注3、鶴岡市致道博物館学芸員 犬塚幹士氏のご教示による。

注4、鶴岡市戸川安章氏のご教示による。

注5、後藤利雄「小林風五一出羽の鬼才一」(『文学』所収)昭和61年

4、陶磁器

先に、船の安定のために船底に石材とともに積み込まれたものとして陶器類もあったと記した。そういう場合、いわば重しとして重量あるものが主として選ばれたのは当然であるが、一方では容器として名だたる高価な陶磁器や機能的な日用雑器類も、航路沿いの各地から船積みされて運ばれてきたものが多くあった。

それらの中には、近代に入ってから名器として売買の対象となり、持主を変えたものも多かろうが、依然として最上川河岸附近の集落や旧家の土蔵などに所蔵されているものもある。

中山町には九州の鍋島焼、唐津焼、伊万里焼、薩摩焼、苗代川焼、三川内焼(平戸焼)、波佐見焼、四国の能茶山焼、中国の萩焼、京都の清水焼、北陸の九谷焼など、西廻り航路沿いにあたる各地の有名窯で焼かれた陶磁器が大量にもたらされ、現在も個人蔵として大切に保管されている。これらは中山町立歴史民俗資料館において時々企画展の資料として出品されている。

中山町は最上川の長崎河岸で繁栄したところである。同町に住み藻南文化研究所を主宰する烏兎沼宏之氏は、長崎河岸は最上川水運の最終港であったと考えている。(注1)つまり、本流を遡航する艀船は長崎河岸を終点とし、そこからさらに上流の置賜方面へ上るには小型の小鷄飼船に荷の積みかえを行なわねばならなかったからという。この烏兎沼氏の最終港長崎説に立てば、中山町は荷揚げの場所として上方や瀬戸内、北九州などの航路沿いの文物がより多く流入した地域ということになる。確かに、先にあげた柏倉九左衛門家には、出羽国内ではけっして手に入らない高級な日用品

が数多くある。また、関西型唐箕がこの地方にあることや、大量の陶磁器の存在、岩谷観音に残されているイラタカの数珠が沖縄や九州産の宝貝を連ねて作られていることなど、いろいろな事実をつなぎ合わせると、中山町が海運と水運を通じて西日本と直結していた様子が浮かんでくる。

ところで、最終港が長崎や左沢かについては、最上川の流路状況や諸史料から、これまでは左沢が最終港で、艀船から小鵜飼船の荷積みかえは左沢で行なわれた、とする見方が主流である。長崎港が活況を呈するのは明治期に入ってからであるが、最終港の当否は別にして、大石田や谷地と同様に文物の集積が行なわれた中山町の歴史と文化は、最上川水運に大きく影響を受けたことは間違いない。

烏兎沼氏が胎蔵界大日如来の所蔵者であることは先に述べたが、各種のやきものも所蔵されているので主なものを記しておく。

- (1) 二川焼(福岡県三池郡高田町) 松絵甕2点、
- (2) 大外山焼(佐賀県) 大鉢2点
- (3) 伊万里焼(佐賀県) 染付湯飲み茶碗4点、徳利3点
- (5) 備前焼(岡山県備前市) 船徳利1点、角徳利1点
- (6) 丹波焼(兵庫県多紀郡今田町) 徳利2点
- (7) 瀬戸焼(愛知県瀬戸市) 徳利1点
- (8) 小鹿田焼(大分県日田市) 平甕1点

注1、烏兎沼宏之「芋煮会のはじまり考」P16 藻南文化研究所 昭和56年

5、建築物の影響

上方の影響を受けた建築物で知られるものに、蔵座敷がある。蔵座敷とは、土蔵の中に座敷をつくり上客の接待や家族の居住に使用したものである。普通、土蔵は物資の収蔵や保管等に使用する

いわば倉庫であり、直接日常生活には利用されないが、湿気を防ぐ、保温性が高い、熱を遮断する、などの効果が高い。したがって、夏はおおむね涼しく冬は暖かいその快適さと防火上の利便性に着目されてつくられたのが蔵座敷といえる。

江戸時代、さらには明治時代を通じ、蔵座敷を所有するという事は上流階級への帰属を誇示することであり、それは、いわゆる旦那衆としてのシンボルのようなものであったと思われる。

上方の蔵座敷の始まりは桃山時代あたりからと考えられている。上方の外壁の色は白が一般的であるが、江戸時代の土蔵造の外壁は黒色である。山形県内にある蔵座敷、仏蔵、店蔵などはほとんど白壁であることから、やはり上方文化の影響が濃厚に反映されていると解釈される。(注1)

山形県内に現存する蔵座敷は、山形県の調査によれば、昭和58年までに656棟という結果が出ている。(注2) ただ、その大部分は明治期以降のもので、江戸期のは77棟と全体の11%にすぎない。

その分布は限定的であり、水運の発達した最上川沿岸内陸部で羽州街道や六十里越街道沿いの紅花商人や豪農の屋敷を中心として存在しているようである。県の同調査では、山形市、山辺町、東根市、村山市、大石田町、尾花沢市、寒河江市、大江町、西川町の5市4町に全体の約84%の蔵座敷が集中している現状である。

江戸期のものとして注目されるのは、山形市十日町の佐藤利右衛門家の蔵座敷で、天保5年(1834)に本家佐藤利兵衛家より分家した際建造したという。蔵座敷の襖は江戸期のものが現在も使用されており、菊紋様の襖紙は今なお続く京都の業者「唐長」の江戸期の作品である。さらに、幕末の京都の絵師横山清輝の手による襖絵もそのまま残されていたり、釘かくしが京都産であることなど、利右衛門家の屋敷全体が、上方の世界そのものの感がある。その他、特徴的なものとしては、

先にあげた中山町の柏倉九左エ門家の書院造り、河北町の細谷大作家の二階造り、などがある。

日本民俗学会評議員の木村博氏による上山市の蔵座敷所在調査がある。(注3)

それによれば、大門地区9棟、檜下26棟、中生居6棟、久保川4棟が存在している。この数字は上山市郊外の農村部では、移転してきた家屋を除き従来からあった家屋の1割から2割の屋敷に蔵座敷があることを示す。木村氏は江戸末期以降明治時代に入ってから、経済的ゆとりのある層は農村部においても、かつての豪商、豪農の豪華な蔵座敷に準ずるものを模倣して建築したのであろうと推測している。

ところで、現在京都や大坂などの上方で蔵座敷はほとんど残っていないことから、果して上方の影響によるものなのか疑問視するむきもある。それに対しては、元治元年(1864)の京都大火で町の大半が焼失して蔵座敷も失われてしまったのが原因と考えることもできるが、(注4) 広く利用されて建築物としての価値が定着していたのならなぜ再建されなかったか、多少疑問である。

蔵座敷に関連するものとして、扉の掛金具に大坂の職人名が記されているものがいくつかある。

まず、前述した佐藤利右衛門家の掛金具で、右側取手に「大坂」、左側取手に「鍛冶 亀右衛門作」とある。天童市五日町の相沢兵助家蔵座敷の掛金具にも「大坂 鍛冶 亀右衛門作」とある。(注5) さらに、天童市五日町の旧佐藤伊兵衛家の掛金具にも、右側取手に「伏見鍛冶 八兵衛作」、左側取手に「大坂備後町 井池」とある。(注6) これら3点の掛金具は、石造物の石工と同様に、上方とのかかわりの濃さを一層浮き彫りにさせてくれる。

大石田町は江戸時代から大工、舟大工、左官などの職人の町としても知られる。腕の良い大工たちが地元の社寺の建築に携わっているのはもちろんのこと、他地域の建築物にも関係し、大工同士

の交流も深かったことが明らかである。

この大工職人を代表するのが、乗船寺門前に居を構えていた佐藤家である。佐藤家には、三代目の佐藤吉住の時代に京都とかかわりを持った事実を示す貴重な資料が保存されている。その資料とは、明和9年(1772)に京都笠井若狭守から伝授された「上棟之大事」など3巻の秘伝書、「本堂再建工匠 京都笠井若狭守門弟 佐藤吉住」と「本願寺 笠井若狭守内 佐藤吉住」と書かれた木札、「東本願寺本堂木割」の図面などである。この資料により、佐藤吉住は京都の笠井若狭守の門弟として東本願寺本堂の建築に参画したことは明らかであり、また、おそらく京都の他の社寺の建築にもかかわっていたであろうことが推測できる。

このように、佐藤吉住以外にも大石田の大工職人の中には技量が認められて上方に出向き、大いに活躍した人物がいるのではないかと思われる。このことは、やはり最上川水運と西廻り海運があつてのことであり、文化や技術の交流を示す好例である。

なお、佐藤吉住関連資料は大石田町クロスカルチャープラザ「桂桜会館」に展示されており、職人の町の姿がよく理解できる。

注1、2、「山形県蔵座敷等調査報告書」(山形県教育委員会) 昭和59年

注3、木村博「蔵座敷(座敷蔵)の問題」(『置賜の民俗第6号』所収) P129 昭和49年

注4、前掲『調査報告書』P11

注5、6.野口一雄「作者銘のある蔵金具」(『村山民俗第2号』所収) P10~11 平成元年

6. キリスト教文化

日本におけるフランシスコ=ザビエルのキリスト教布数(1549)から約80年後の寛永3年(1626)、フランシスコ会派の管区長パアレ=ディエゴ=

デ＝サンフランシスコを中心とする数人の伝道者たちは、奥羽伝道を目的として4月9日に長崎の郊外を船で出発した。その後、日本海を北上して73日目に酒田湊に到着し、さらに最上川の川舟を使って山形の中野まで行ったことなど、これらの全行程は「ディエゴ＝デ＝サンフランシスコ報告書」の中に克明に記されている。(注1)

この報告書によれば、「終点は酒田で、そこから川舟に乗って中野に行き、中野から山形までは2里許り、山形は最上の都だ。そのために馬を用いずして到着することができた。」とある。そのあとに「旅行は次の如し」と続いて一行の行程が詳細に記されている。それによると、酒田から川船で鶴岡へ、鶴岡から馬で清川と進み、清川から最上川の川船で清水に至っている。さらに清水から馬で舟形の関所を通して、最終的に中野に到達している。舟形から中野までの交通手段が書かれていないが、前段部分に、「川舟に乗って中野に行き」とあるし、諸情勢から最上川を遡航したのではないかと思われる。

この行動は、キリスト教弾圧下における、まさに死を賭した隠密行動であった。

当時、奥羽地方にはすでにイエズス会派の宣教師たちが布教活動を展開しており、ある程度の信仰地盤はでき上っていたようであるが、本格的な活動は、このディエゴの海と川からの潜入によって始められたのである。最上川はキリスト教を運ぶ役割も果たしたといえる。

ディエゴは、みずからの布教担当区域を山形を中心とする最上地方とする一方、酒田、鶴岡にはそれぞれ部下の宣教師を配置して布教組織を強化した結果、寛永6年(1629)、上方に帰還するまで奥羽の入信者を格段に増やす実績を残している。

しかし、キリスト教の弾圧、迫害はいよいよ厳しさを増し、各地で宣教師、信者たちの受難が相次いでいた。ディエゴ帰還の1年前、寛永5年

(1628)12月、米沢城下郊外の北山原において、キリスト教徒七十余名が処刑されており、弾圧の嵐は信者の多い置賜地方を中心に吹き荒れた。

西置賜郡白鷹町は、佐野原をはじめキリスト教者が多かったところで迫害にまつわる伝えが多い。現在、白鷹町荒砥の称名寺(新義真言宗)には、この時期の信者の苦悩の歴史を刻む古文書等が残されている。たとえば寛永13年(1636)の「起請文」は、佐野原村の隼人ほか3名が、キリスト教を放棄し改宗したことを明らかにしようとして称名寺に提出した文書である。貞享4年(1687)の「書付を以申上候事」の文書は、十王村の72才になる斉藤長左衛門とその子長三郎が、自分の先祖にキリスト教徒はおらず、したがって自分たちはその類族では決してないことを強調し、称名寺と肝煎に訴えたものである。元文元年(1736)の「御訴状之事」は、佐野原村のキリスト教類族の者が死亡したことにつき、肝煎組頭五人組が死骸を見届けて土葬したことを称名寺から代官に報告したものである。さらに称名寺にはこれらの文書とともに十字架が残されている。十字架は縦7cm横7.5cm、十字の幅は縦横ともに1.1cmあり、黒光りする立派なもので損傷はほとんどない。これらは町文化財に指定されている。

このように、キリスト教の足跡を示す資料が各地に様々残っているが、マリア観音像は特にキリスト教迫害史を物語るものとして象徴的である。

マリア観音は、隠れキリシタンが観音を似せて作ったマリア像であるが、中にはマリアとして崇拝した観音もあり、いずれにしろ弾圧をかいくぐるため、日本に古来からあった子育て観音や子安観音の中に巧みに紛れ込みながら、秘かに信者によって崇拝の対象とされてきたものである。

東根市観音寺地区の竜泉寺(曹洞宗)には、古くから「子安観音」像が地元の人々に信仰されてきたが、昭和3年、三浦新七、五十嵐晴蔵、和田譲

三郎の各氏による合同調査の結果、この観音像は隠れキリシタンが所蔵したマリア観音であると判明し、昭和44年には市文化財に指定された。

観音寺地区は、仙台方面と関山峠で結ばれており、古くから交通の要衝であった。元和6年(1620)仙台でのキリスト教大弾圧の際、関山峠を越えて逃れてきた宣教師や信徒たちが携えてきて、この地で長く保存されてきたとも考えられている。

このマリア観音像は色どりがまことに美しい木像で、聖母マリアに抱かれた幼な子キリストは、明らかに洋装姿である。台座から後背までの高さ76cm、像の全高41cmである。

このほか、県内でマリア観音を所蔵している所は、長井市成田高関の善明院、櫛引町西荒屋の徳昌寺、鶴岡市山王町の大昌寺、出羽三山歴史博物館、などである。

そのほかに隠れキリシタンの所持品とみられるものでは、山形市船町の阿部美智代氏所蔵のロザリオと幅約3cmの墮円型レリーフ状のメダイがある。同氏によれば、これらは地区内のかつての隠れキリシタンから阿部家に伝えられたものという。

山形大学附属博物館にも、十字架、踏み絵キリスト像が保存されている。

注1、浦川和三郎『東北のキリシタン史』

P464～465 日本学術振興会 昭和32年

7、花風呂敷

以下に記すことがらは、多くを徳永幾久氏の『刺し子の研究』に拠っていることをまず断っておく。

(注1)

かつて、紅花や青芋の売買でばく大な利益を得た町方の豪商たちは、家紋や屋号を大きく記した看板風呂敷、あるいは大暖簾を店前や門前に下げ、格式ある家柄を誇示していた。また、行商用に背負って歩く風呂敷にも、家紋や屋号入りの暖簾を

使って自己宣伝の1つとする風潮もあったり、嫁入り道具を包む風呂敷にも嫁ぎ先の家紋を入れることもあった。これらの風呂敷は、染めを京都に依頼したが、1枚の染代は米1俵という高価なものであったという。

このように、京染の風呂敷とか暖簾は上方との交流を持つ商家としての存在を示す1つの手段になっていたのであるが、一方では商品経済の流れに乗り、地元の特産物を扱って収益を増やした在方の豪農や商人たちも成長するにつれ、町方商人たちのこういった風習に憧れ、模倣するようになっていった。

ところが、京染風呂敷の染代金が高価なために在方商人の妻女の知恵により刺し子による家紋や屋号、さらには鶴や亀、麻の葉、その他京都の友禅風呂敷の紋様を模倣した風呂敷が考え出されるのである。

また、上方産の古手ものの一部(緋布)を風呂敷の周辺に継ぎ足して大型の風呂敷とし、上方との交流の一端も表現して心意気を示そうとするようになる。こうした刺し紋、継ぎ刺し風呂敷のことを花風呂敷と呼んでいる。

これらは、最上川の経済パイプに支えられた当時の商人たちのくらしや心をうかがう貴重な生活文化財であるとともに、上方の優雅な香りのする芸術性の高い作品ともいえる。

江戸期の花風呂敷はほとんど現存していないが、徳永幾久氏は明治後期～大正初期に製作したものを所蔵されている。

注1、徳永幾久『民俗服飾文化 刺し子の研究』

衣生活研究会 平成3年

8、大津絵

大津絵とは、寛永年間(1624～1643)に現滋賀県大津市に住む絵師が描いた仏画を出発点とする。

次第に風俗や風刺を含んだ内容も多くなり、処世や戒め、人間の本性などを画題に盛りこんで人々の心をつかみ、好評を博するようになった。需要の増大とともに速書きと独特な筆使いを積み重ねるうち、大津絵としての独特の画風が完成した。

大津は全国的な物資の集散地である大坂、京に近いことから、大津絵は船乗りや商人たちの土産物、ときには呪符、護符として買い求められ、上方文化の1つとして地方にもたらされたものと思われる。

最上産紅花は、西廻り海運の敦賀港で陸揚げして琵琶湖を湖水船で運んで大津で下ろし京都に搬入していることから、大津は出羽国人にとってはいわば通い道のようなものであり、大津絵を手にする機会も多かったものと思われる。

中山町長崎の烏兎沼之氏は8枚の大津絵を所蔵している。画題に描かれているのは鬼、猿、弁慶、武士、奴、雷公、鷹匠などで、野太い線と数種の顔料で染め民衆感情を率直に表現している。

大津絵など、野趣に富んで皮肉や可笑しみも含んだ大衆レベルの絵画を民画といっている。大津絵は今でも根強い人気を誇る。

9、庶民信仰

日本海及び最上川の航行には破船、難船など大きな危険がつきまとっていた。一瞬にして人命や財産を失うこれらの災難に出会うことのないよう、安全航行と商売繁盛を願い、船乗り関係者や商人たちは篤く神仏に祈りを捧げた。

こうした信仰心は、先にみた石燈籠や狛犬の奉納はもちろん、絵馬の奉納、船玉神社、貴船神社、金毘羅神社、仙人掌などへの参詣、「船玉大明神」「船型准胝観音」「金毘羅大権現(象頭山)」など石碑の造立となって現われた。

ここでは金毘羅(金刀比羅)信仰について述べる。金毘羅信仰は香川県仲多度郡琴平町に鎮座する

「金刀比羅宮」を本社とする信仰で、全国的に神社、石碑が分布する。この神は航海安全、水難守護を司る神で、コトヒラとは梵語で龍神のことである。また社殿は象頭山(標高521m)の中腹にあり、瀬戸内海を航行する船にとって一際目立つ存在で目印となる山であったことから、コトヒラ=象頭山となり、石碑として「象頭山」が多くつくられた。

西廻り航路で瀬戸内海を航行する出羽の船乗りたちも、安全祈願のために社殿に詣でたが、それが不可能な時は「流し樽」を流した。流し樽とは、酒樽に「奉納 金毘羅山」などと墨書し、さらに幟を立てたりして海に流すことをいい、海を漂いながらついには金刀比羅に到達する、あるいは海面に漂う流し樽を見つけて拾った人から本社に届けてもらうことをねらいとする。そうすれば、みずから本社に参詣したと同じ功德が得られるとする風習があった。

この流し樽の風習は、山形県内にもかつては各地で行なわれていたことが報告されている。(注1) 水運、海運関係者はもとより、山の木を伐採して谷川に流す木流し稼業や筏流しに従事する人たちの間にも流し樽の信仰があったという。(注2) むろん、洪水や子供の水難防止の願いもこめられたものだったようである。

中山町川向地区には、石碑「金毘羅山」がたてられており、毎年4月15日に祭礼が行なわれる。

神主による祈とうが終ったあと、「奉納 金毘羅山」と墨書した直径15cmの酒樽を、すぐ近くを流れる最上川に流す流し樽の風習は今なお行なわれている。中山町は水運で賑った土地柄で、本来は船の安全を願って行なわれていたものと思われるが、現在では、子供の水難防止を主たる願いとして行なわれている県内唯一の行事である。

注1、野口一雄「山形県内の金毘羅樽流し」(『こ

とひら』所収 琴平山文化会) P114~118 昭和60年

注2、前掲戸川安章「日本海の潮流と文化」

P11

10、紅花染衣裳

江戸時代、羽州の特産物の筆頭にあげられるのが紅花である。内陸地方産の紅花は「最上紅花」と総称され、江戸時代に入って間もなく質的に全国一となった。正徳2年(1712)刊行の『和漢三才圖會』に「羽州最上及山形之産良ト為 伊賀筑後之次ク 予州ノ今治及摂播ニ州之産又之次ク」と最上紅花を最大に評価している。(注1)

紅花は乾燥した干花の状態では梱包して輸送した。その輸送コースは青苧の場合と同じで、まず大石田まで陸送して川舟で酒田に運び、海船で敦賀まで行って陸揚げする。陸送して琵琶湖北岸の塩津か海津に運び、そこから琵琶湖を湖船で縦断して大津で再び陸揚げして京都へ運んだ。最終的には京都の紅粉屋や紅染屋で口紅や衣類の紅花染の原料とされ、上流階級の華やかな服飾文化を支える役割を果たした。

主として京都で染色された華麗な紅染衣裳は、山形の紅花商人たちが買い求めて持ち帰ったものが多数あり、それらが現在、旧家や芸能装束として寺社に残されている。青苧と同様に、原料供給地と需要地間の経済、文化交流がなされたことを如実に示すものであろう。

これら山形県内に残る紅花染の衣裳等については、県立博物館発行の『紅花関係資料所在目録』(昭和59年)に詳述されている。それによると、主な所蔵者は、小倉芝居衣裳保存会(5点・上山市)、上杉神社(7点・米沢市)、黒森歌舞伎保存会(4点・酒田市)、稲村七郎左衛門家(6点・山辺町)、広谷常治家(5点・寒河江市)、などがあげられている。

この『目録』以外の所蔵者としては黒川能保存伝承事業振興会(榎引町)、谷地の舞楽保存会(河北町)柏倉九左エ門家(中山町)、工藤幸治家(酒田市)などがあげられる。特に黒川能装束についていえば、平成3年9月に米沢女子短期大学名誉教授徳永幾久氏、県教育センター主任指導主事(当時)工藤幸治と筆者の三人が、上座、下座、春日神社各所蔵装束の虫干しの際、紅花染装束の調査を実施した。ぼう大な装束数のゆえ調査は未完成なので詳細な数はまだ把握できないが、紅花染は今のところ約100点が確認できた。これは相当の数といわねばならない。

黒川能は、東田川郡榎引町大字黒川の鎮守春日神社の氏子が上座・下座に別れて神社に奉納する神事芸能で重要無形民俗文化財に指定されている。この春日神社は、承元3年(1209)から天正10年(1582)までこの地を支配した武藤氏が勧請したと考えられており、黒川能も武藤氏が中央(上方)の能を招いて始まった可能性が大きいと言われていいる。江戸時代は藩主酒井家の保護が厚かったと見え、現存する装束の大半が中期以降のもので酒井家からの拝領品である。これらは貴重な民俗資料であり、今後、黒川能は紅花染を中心にした装束面の調査研究を一層推進しなければならないと感ずる。

注1、寺島良安『和漢三才圖會』東京美術 P1315 昭和45年

〔5〕青苧文化の創出

青苧あおそは、別名苧麻ちよま、からむしとも呼ばれ、イラクサ科の多年草である。山野に自生し、高さ1~3mぐらいに成長するが、茎の直径は約1cmぐらいである。その茎の表皮を剥いで残る白い繊維は長くて強靱で美しい光沢を有し、古くから衣料の原

料とされてきた。

広義では麻(大麻)の1種とされるが、麻と青苧は本来的には別種である。

古くから庶民衣料の原料とされたのは、青苧、麻、楮、シナ、葛などであったが、農村地域では明治時代以降も、労働着をはじめとする生活衣料の主流は麻であったと思われる。しかし、一方では木綿はすでに江戸時代に衣料として用いられており、都市部や中・上流階級を中心に次第に広範囲に使われ出していた。

木綿普及の中で、青苧栽培は良質を産する特産地域にしぼられてきて、藩政府には課税や専売制による貴重な財源となり、生産する農民にとっても換金作物として収益は大きかった。

青苧は汗を吸収し発散させ、また涼感があることから、大名や旗本などの武士の礼服である袴、奥方や町人など上流階級の夏の衣料の原料として大いに需要があった。以下にみるように越後縮、越中八講布、能登縮、近江麻布、奈良晒など全国に名高い麻布特産品は、いずれも青苧を原料とした織物である。

青苧特産地は東北では羽州山形と会津が特に有名であった。羽州村山地方産は最上苧、置賜地方産は米沢苧と呼び、合わせて羽州苧ともいった。

最上苧の主要生産地は、月布川流域(現大江町)、五百川郷(現朝日町)、寒河江川上流域(現西川町)、その他最上川流域、葉山山麓、奥羽山脈西麓などである。特に月布川流域に産する「七軒苧」が良質とする評価を受けた。中世にはすでに京都方面に売りに出されていたという。(注1)

米沢苧の主要生産地は、白鷹町、長井市、南陽市方面であるが、特に白鷹町柝窪の「柝苧」は良質とされた。

これら羽州苧は、先にあげた越後縮、越中八講布、能登縮、近江麻布、奈良晒の主たる原料となったことは最上川との関連で注目しなければなら

ない。

近世中期以降、特に村山地方では平野部に紅花栽培がさかんとなり、青苧栽培は山間部に限定される傾向を示すが、特産地からの原料需要は幕末まで続き、陸送とともに最上川水運を利用しての他領移出は活発に行われた。

最上苧の村山地方では、大蔵村(現、山辺町)の稲村七郎左衛門家や大谷村(現朝日町)の白田弥治右衛門家などが青苧商人として有名であった。稲村家の寛政11年(1799)と12年の「青苧売仕切」によれば、青苧は京都、奈良、近江八幡、越中高岡など上方と、北陸の荷受問屋に広く輸送されていることがわかる。(注2)

米沢苧の置賜地方は、米沢藩の一元的な支配が貫徹された所で、青苧農家からの買い上げで、厳格な専売制度を実施して幕末まで継続された点に特色がある。藩の特権商人であった西村久左衛門は慶安元年(1648)から宝永6年(1709)まで、奈良晒の原料となった青苧の藩による専売を一手に請負い、上方市場の取引を独占している。

このようにして、羽州苧は紅花とともに全国でも優れた品質を誇る特産品として最上川水運を主としてさかんに移出され、各地において織物衣料として人々の生活文化を支える役割を果たした。最上川は他国から文物を運んだとともに、他国において青苧の文化というべきものを創出するのに貢献したといえる。

以下は、青苧を原料とした各地の特産織物について考察してみる。

注1、『大江町史』P526 昭和59年

注2、渡部史夫「最上苧の生産と流通」(『出羽南部の地域史研究』所収)昭和61年 P138

(1)奈良晒

正徳2年(1712)寺島良安が著した『和漢三才圖

會』には、「曝布さらしぬのは和州奈良より出づる布の上品なり、羽州最上の商麻まおを絹うんで布と為す、細緻絹の如し、」とある。(注1)

また、天保7年(1836)に梶野良材が著わした『山城大和見聞随筆』には、「其価の登りたるハ、羽州からむしを買入て奈良にて織立さらすことにて青苧の直段巳前に倍せり、(中略)問て當国にからむしハなきやと尋たれハ、野生にあれば、米沢の産格別生合よろしきゆへに用ゆと答ふ」とある。(注2)

さらに、宝暦4年(1754)平瀬徹齋らによって著わされた『日本山海名物圖會』には、「麻の最上は南都なり、近国より其品数々出れども染て色よく着て身にまとわず汗をはじく故に世に奈良晒として調宝するなり」とある。(注3)

南都すなわち奈良で生産される麻(この場合は青苧)を原料とする織物であった奈良晒は、主として武士や町人の礼服など、「身にまとわず汗をはじく故に」夏の衣料として、江戸、大坂、京都の三大都市を市場に栄えた。

その起源は不明であるが、商品生産として奈良晒業が成立したのは17世紀初頭とされる。すなわち、慶長16年(1611)に徳川家康の上意によって「南都改」の朱印が与えられ、幕府の御用品とされたことが奈良晒の名声を全国的に高らしめた。(注4)

この背景には、近世という安定した封建社会の中で武士や裕福な町人たちの奢侈的な消費欲求の高まりがあった。奈良晒は、こういった三都の富裕階級が求める高級衣料として、慶長年間(1596~1614)に始められたのである。

この奈良晒は、各地の青苧の織物にさきがけて商品生産を開始した。寛永以降、武士の式服として五月の節句には必ず帷子かたびらを着用して登場することになったのも1つの理由になって、17世紀中期から急速に販路を拡大したという。(注5) はじめ

奈良町が中心であったが、次第に周辺農村や東山中、山城方面まで生産を拡大し隆盛をきわめた。

さて、『和漢三才図絵』や『山城大和見聞随筆』のとおり、奈良晒の原料には羽州苧が使われていることが明らかである。上杉鷹山の執政であった竹俣たけのまたまきつな綱が著した『国政談』には、「青苧、撰苧とも云フ青苧の内ヨリゑらみ出して上苧とす 右奈良之晒布、小千谷之縮布みなこれ此國の青苧を以て織り成して天下の人これを着さるハなし」とある。(注6)

米沢苧の需要がいかに強かったかがうかがえるくだりである。

米沢苧で、奈良晒の原料として用いたのは長苧といわれるもので、青苧の根元から先端まですべての茎を使用するものである。刈り取りから青苧はぎと言われる表皮剥ぎを終えて、残る白い靱皮繊維を干すまでが生産農家の作業で、その後については、乾燥した長苧を荷作りして奈良へ送り、現地ではこれを水漬けしてしごき、苧積おとうみすることから工程が始まる。(注7)

米沢藩の青苧の専売制を独占した西村久左衛門について先に記したが、村山地方に産する最上苧も一部奈良晒の原料とされ、五百川郷(現朝日町)の青苧商人の活躍が目立っている。その一端を示すものとして、延宝4年(1676)の奈良西大寺の弥勒菩薩座像の修理に、10数名の五百川郷方面の商人や有力者がかかわっていることが胎内墨書及び胎内納入箱の墨書から判明している。(注8)ここから、五百川郷青苧商人たちが、奈良地方にまで活動を広げ、奈良晒の生産に深く関与している様子が浮かび上がってくる。

ところで、青苧の奈良への輸送コースは、最上苧もそうであったように米沢苧の一部も最上川を下して酒田から西廻り海運で敦賀まで運び、琵琶湖を湖水船で縦断して大津で陸揚げして京都・奈良へと運搬した。ただし、米沢苧の場合、最も多

かったのは江戸まで陸送して江戸から大坂まで海上輸送し奈良まで送る、というコースであったようだ。(注9)

西村久左衛門が元禄6・7年に五百川峡谷の黒滝を開削する動機となったのは、米沢藩の蔵米と青苧を最上川水運を利用して大坂、奈良に輸送することであったことは先に記したとおりである。

ちなみに、元文2年(1737)に著された『布方一巻覚書』によれば、米沢藩の蔵苧は年間に500駄、最上・米沢の商人苧は年間100駄が奈良に入荷されていたとある。(注10)

表1 奈良晒生産高推移

万治元年(1658)	321600疋	享保2年(1717)	353937疋
寛文8年(1668)	286676疋	元文元年(1736)	230893疋
延宝5年(1677)	405045疋	延享元年(1744)	188964疋
元禄元年(1688)	356096疋	宝暦3年(1753)	155806疋
// 7年(1694)	401866疋	// 12年(1762)	142412疋
// 11年(1698)	352382疋	天保13年(1842)	115620疋
宝永5年(1708)	341047疋	嘉永4年(1851)	68040疋
正徳3年(1713)	338888疋	明治15年(1882)	32200疋

「奈良さらし」(月ヶ瀬村教育委員会)より引用

表1、にみるように隆盛をきわめた奈良晒も、元文元年(1736)以降生産にかげりが見えはじめるが、(注11) その原因は、越後縮や近江麻布、能登縮、薩摩上布などの市場への進出により、奈良晒の需要が減少したことであった。この動きに伴って、原料であった米沢苧の長苧も藩への納入が減少してくるが、これは後述する越後縮の原料となる撰苧生産の増加と反比例している。つまり、米沢苧の大部分は移出先が奈良から越後方面に向けられるのである。

しかし、奈良晒は幕末まで生産されており、従って米沢苧の奈良移出も少量ながら継続されている。(注12) 奈良晒が決定的な打撃を受けるのは、明治維新によって武士階級が消滅し、礼服である袴などの需要が激減したからである。

明治以降は、原料は青苧から大麻を使用するようになり、明治後期に入れば大半が大麻になった。

近年の奈良晒について記すと、昭和54年3月「奈良晒の紡織技術」が県無形文化財に指定、昭和59年からは「月ヶ瀬村奈良晒保存会」が結成された。保存会では伝承教室を開講して、奈良晒の維持と製品保存、及び商品化と販路の研究に努めている。現在の奈良晒は、群馬県産の大麻を原料として織られているが、一部、福島県会津地方の昭和村産の青苧も使用している。

注1、前掲『和漢三才圖會』 P361

注2、木村博「奈良における米沢商人の活躍」(『羽陽文化』第129号 平成2年)の中の記述を引用させていただいた。

注3、平瀬徹斎・長谷川光信『日本山海名物圖會』(名著刊行会 昭和44年) P144

注4、木村博一「奈良晒」(『日本産業史大系6、近畿地方篇』所収 東京大学出版会)

P91 昭和35年

注5、同「奈良晒」P92

注6、『山形県史 資料篇4』P741 新編鶴城叢書下 昭和35年

注7、芳井敬郎『織物技術民俗誌』P166 染織と生活社 平成3年

注8、前掲『最上紅花史の研究』P253~256

注9、『大江町史』P552には米沢藩の青苧は500駄が奈良に送られたが、内400駄は陸送、残り100駄は最上川水運と西廻り海運によって運ばれたとある。

注10、前掲『奈良晒』P92

注11、『奈良さらし』P13 月ヶ瀬村教育委員会 昭和58年

注12、前掲『米沢史 近世編』P474

(2) 越後縮

越後縮の起源を語るものとして、寛文年間(1661~1672)に播磨国明石藩士の堀次郎将俊が小

千谷に住んで、魚沼地方に産する越後麻布に改良を加え、横糸に強い^よ縊りをかけて^{しぼ}皺を出す縮織を完成させたという話が伝えられている。(注1)

このことから、越後縮の生産の開始は、寛文・延宝の頃(1661~1680)と考えられている。(注2) また、生産が隆盛に向かうのは貞享・元禄の頃(1684~1703)であり、(注3) 最盛期は天明年間(1781~1788)とされる。(注4) 生産地は、小千谷、十日町、堀之内、塩沢、六日町、など魚沼郡一帯であった。

古くから越後麻布の原料には地元産の青苧が用いられていたが、縮の製織が始まってからは、会津苧と羽州苧が移入されたようで、元禄6年(1693)に羽州苧が小千谷の町人に輸送されている事例がある。(注5) また、寛政12年(1801)金沢瀬兵衛が著わした『越農屋萬都登 上』には、「出羽のもがみにいづるをよしとうけたまわりて候」とある。(注6) さらに、天保4年(1833) 鈴木牧之が著わした『北越雪譜』には越後縮について実に詳細に記されており、「縮に用ふる紵は、奥州会津出羽最上の産を用ふ。(中略) また米沢の撰紵と称するも上品也。 越後の紵商人かの国々にいたりて紵をもとめて国に売る」とある。(注7)

越後縮の原料には米沢苧の撰苧が使われた。撰苧とは、根元から1m位を切り取った上部の柔か

くて上質の青苧をさした。奈良晒の原料となった長苧の生産が減少してくるのに対して、越後縮用の撰苧の生産が増加してくるのは宝永・享保頃(1704~1735)といわれる。(注8) この上質の撰苧を求めて、越後商人たちは収穫期にあたる8月~9月にかけて主人あるいは手代が直接羽州を訪れ、米沢を中心に藩内各地を巡回して各撰苧小宿(村方商人)から青苧を購入している。(注9)

表2は幕末期のもので、米沢苧、最上苧を上、中、下の3ランクに等級分けをして、その1駄の価格を示したものである。出立と帰店の期日は、上述した越後商人の羽州への出発と帰還の期間を表わす。

越後縮は、高級な夏季衣料品として三都の大消費地で需要があったばかりか、将軍家、大名、旗本の武士たちの袴や式服に着用された。将軍家では御召用に重用したため、特に御用縮布といった。

小千谷縮仲間は安永8年(1779)には19軒、天保8年(1837)に問屋10軒、屋号持ち67軒、屋号なし59軒、あわせて136軒を数えたとある。(注10)

現在、小千谷市本町通りの一角に、かつて縮問屋として産を成した西脇家が存在し、塀に囲まれた広大な屋敷が行きかう人の目を引く。このあたりに軒を並べて縮問屋が密集し、活気ある経営活動が行なわれていたのであろう。毎年4月上旬、

小千谷、十日町、堀之内では縮市が三日間開かれ、京都や江戸の商人が長期間滞在して縮の買い付けに当たったといわれる。(注11) 都人も含めた賑わいぶりを彷彿させる。

先にあげた西脇家が所蔵した『越後縮み雛形』(新潟県指定文化財)は、縮の染めと紋様をほどこした裂見本を張り合わせたもので、天明から文政頃までのものが5冊ある。中には奥州行と記されたものもあり、羽州山形方面にも、この『雛形』を携えて越後縮商人が売り込みに訪れたことをうかがわせる。また、

表2 羽州苧1駄の産地取引価格 (年平均)

年代(仕入れ期日)	産地	上	中	下
嘉永4年(1851) (7月16日出立 9月21日帰店)	米沢	37両	29両	25両
	最上		18両2分	16両3分
安政2年(1855) (7月5日出立 9月12日帰店)	米沢	30両	28両	18両
	最上		16両3分	15両
万延2年(1861) (7月9日出立 9月21日帰店)	米沢	49両	44両	37両
	最上		37両	27両2分

注：1駄の価格は御役銭、口銭、産、荷造、産地の駄賃等を含む。
西脇新次郎著『小千谷縮布史』(昭和10年)より引用、加筆。

西脇家が所蔵した縮織物約100点が小千谷市に寄贈されている。それらは袴や帷子など江戸期のものと思われるのも少なくなく、青苧を原料とする織りと染めの優れた作品といえ、越後縮を代表する資料と思われる。

また、十日町市立博物館には「越後縮の紡織用具及び関連資料」(重要文化財指定)が所蔵されており、その数は2,098点に及ぶ膨大な資料である。これらは広く周辺地域から収集されたものであるが、107点の衣類の中に紅染と思われる帷子も含まれている。それはおそらく最上紅花による染めであろうと思われ、羽州産の青苧と紅花が一体となった織物が他国の生活文化を形成した象徴的な事例である。

ここで青苧が越後に運ばれた輸送ルートについて記したい。

村山地方に産する最上苧の場合、最上川を下して酒田から海船に積んで大部分を越中高岡や上方まで運んだが、一部は新潟まで運び、さらに信濃川を川船で遡航して小千谷に運んだと思われる。

一方、米沢苧は奈良への輸送と同様に最上川を下したのもあったと思われるが、1つは陸路で国境の十三峠を越えて越後岩船郡に入り、黒川を経て木崎に出て、そこから川船で沼垂から新潟に至り、さらに信濃川を遡行して小千谷に至るルートがあった。(注12) もう1つは、米沢から喜多方面へ山越えして越後街道を陸送し、徳沢や津川湊から阿賀野川を下して沼垂、新潟に至り、信濃川を遡航して小千谷に至るルートであった。(注13) これら最上川を含めた3種の輸送ルートのどれが輸送量として多かったのか、よくわからない。

越後縮の現状であるが、現在は小千谷市で織られているもの(小千谷縮)と、塩沢町で織られているもの(越後上布)があり、ともに昭和30年に、その製作技術が重要文化財に指定されている。原料

の青苧は、会津地方の昭和村産のものを使用し、苧積みからいざり機を使用しての製織は、昔ながらの手作業によっている。こうして出来上る伝統縮織は本製と称されているが、製品としては全体のごく少量である。実際に商品化されているものは、輸入苧麻(ラミー)を原料として機械生産したラミー製品といわれるものである。

注1、小千谷織物同業組合資料『ちぢみ』P2 昭和43年

注2、『津南町史』P436 昭和59年

注3、『小千谷市史 本編上巻』P785 昭和44年

注4、佐野良吉「妻有郷の歴史散歩」(『きもの十日町』) P229 平成2年

注5、前掲『小千谷市史』P785

注6、金沢瀬兵衛『越農屋萬都登上』P12 中央出版 昭和48年

注7、鈴木牧之『北越雪譜』P73 岩波文庫 平成3年

注8、前掲『山形県史 第3巻』P457

注9、前掲『小千谷市史』P786、P800

注10、前掲『ちぢみ』P3

注11、前掲『津南町史』P448

注12、児玉新三郎「越後縮布史の研究」P117 昭和46年

注13、福島県立博物館編『企画展 江戸時代の流通路』P23 昭和63年

(3)越中八講布

越中の砺波地方は古くから麻布を生産し、中世には越中布として京都の寺社、武家もにおいて進物、贈答に多用され越中特産物とされていた。

中世に入ってから、越中で産する麻布はすべて八講布、あるいは五郎丸布と称されるようになった。それは砺波地方の八講田村、五郎丸村が藩政初期に貢祖として布を納め、その生産も豊富で

あったことに由来するという。(注1) また、一説には、平安時代以降、宮中や寺院で法華八講という法会が行なわれた際、導師の布施などにこの地方産の布が用いられたことにちなむともいう。(注2)

いずれにしても、近世初期は八講田、五郎丸両村が麻布の主産地であったが、早くも前期には砺波地方全域で広く商品化が進んで、福光、戸出、出町、井波、今石動^{いまいするぎ}などの産地が名高くなった。

加賀藩時代には、御国名物の中に越中八講布が記され、寺子屋の習字手本『加賀往来』にも登場、嘉永年間(1848~1853)の『武鑑』には、毎年7月に加賀藩から幕府へ進献物として八講布が届けられたとある。(注3)

奈良晒でも引用した『和漢三才圖會』には「高岡 今石動の八講布は色が雪のように白く奈良晒に次ぐ」と記されてある。このように、高岡や今石動地方(現小矢部市)は、砺波地方全域の八講布の集散地で、高岡や今石動商人の手で「八講布」「五郎丸布」が上方方面へ販売された。これらはすべて無地の晒布だったようである。しかし、文化・文政の頃(1804~1830)になると、福光地方(現福光町)における八講布の生産高が領国第1位になったというから(注4)、幕末には八講布の中心は福光に移っていったとみることができる。

『小矢部市史』には八講布の原料について、次のように記されてある。

「八講布の緯糸(横糸)は地元産の苧麻を用いたが、経糸(縦糸)は上質の羽州苧が使われた。羽州苧は主として高岡や今石動の商人が米沢に来て買入れ、砺波地方の村々に売り渡したというが、文政頃からは、越後商人が羽州苧を買って富山領の港、伏木港に積み回して、直接砺波地方の村々に販売したという。」(注5)

天保5年(1834)頃、大谷村(現朝日町)の青苧商人白田次次右衛門家がかかえた仲買人(荷造問屋)、

高橋熊吉の青苧移出先は高岡と伏木で、大石田まで陸送し、そこから最上川を下したという。(注6) 酒田からは北前船で一旦新潟湊に下ろされ、その後伏木湊に回されたか、初めから伏木湊に下ろされたかのどちらかであろうと思われる。また、同じ大谷村の青苧商人鈴木清助家の場合、青苧の仕入高と荷送先は表3のとおり越中が圧倒的に多かった。

表3 鈴木清助家の青苧仕入高と荷送先

年代	仕入金額	荷送先
	両分朱	
天保9	84 2 0	—
〃 11	335 3 2	越中行
〃 12	6 2 0	山形出
弘化3	92 3 0	越中行
〃 4	200 0 0	越中行
嘉永3	483 0 0	越中行
〃 4	42 0 2	撰苧2駄越後行
〃	34 0 0	撰苧2駄越後行
〃	13 3 2	1駄越中行
安政3	119 0 2	蔵苧10駄
文久3	287 2 0	越中行
〃	25 0 0	撰苧1駄越後行
元治元	848 0 2	越中行
〃	116 3 2	撰苧5駄越後行

渡部史夫「村山地方における青苧の生産と流通」

話しはややそれるが、京都洛西にある北野天満宮には、江戸の正保期から昭和に至るまで、約300基の夥しい石燈籠が寄贈されている。この石燈籠の中に大谷村の鈴木清助の名が刻まれたものが2基存在する。1つは表参道左側の宝暦6年(1756)のもので、北門参道東側の元禄4年(1691)のものである。(注7) これは、鈴木家が商用で上方と深いつながりがあったことをうかがわせるものであり、最上苧の移出先も越中とともに奈良(奈良晒)や近江(近江麻布)などの上方方面もあったことを示すものと思われる。ただし、近世も後期になれば、最上苧は左沢領内を中心に主として越中へ移出されて八講布の経糸の原料となった。(注8)

八講布の生産にあたっては、苧積みは後家、やもめ、貧人の手になるもので、機織りも中農以下の婦女子による農閑稼ぎとして行なわれた。年貢米の不足や生活費の充足にあてるものとして、砺波地方の農民には貴重な副業であった。

現在は、福光町の船岡喜一郎家が伝統的な麻布生産を続けているが、原料は経糸が紡績麻糸のラミーで緯糸が栃木県産の大麻を使用している。大麻は繊維のまま購入し、町内の老婦たちによって苧積みされ、近年は高機で織られている。去年までは晒布の「五郎丸」を出荷し、寺社の幕地に利用されていたが、伝統的方法による晒業が途絶えたため晒布は出荷出来ず、もっぱら晒さない生^{きびら}平（これも五郎丸と称す）を京都の間屋に出荷している。これは架装や修験者の装束、あるいは祇園祭山鉾従者の衣装などの布地として活用されている。

注1、2『小矢部市史』P443.P444 昭和46年
注3、『富山県百科事典』P715富山新聞社刊 昭和51年

注4、『福光町史』P815

注5、前掲『小矢部市史』P448～P450

注6、前掲『山形県史 第3巻』P469

注7、三春伊佐夫「北野天満燈籠考」（『羽陽文化第77号』所収）に、この2基の石燈籠の考察がある。

本題からそれるが、この中で北門参道にあるものは倒れて分解しており、元禄4年の年号が判読できないとある。筆者が平成4年3月10日に調査したところでは、元に復元されていた。しかし、川崎浩良氏が調査した時点で判読できたとする「元禄4年12月吉日」の銘は今回も見い出せず、他の文字が判読可能な状況も合わせて考えるに、年号については不可解な感をぬぐえない。ちなみに、北野天

満宮の「境内燈籠名簿」（昭和32年7月調査）にも年号は「不祥」とある。

注8、渡部史夫「村山地方における青苧の生産と流通」（『日本海地域史研究 第11号』所収 平成2年）P177

(4)能登縮

おおむね『島屋町誌』から、その歴史的経過を辿ってみる。(注1)

古来から能州の鹿島・羽咋両郡の村々は、麻織物及びその原糸で経糸に撚りをかけた苧^{かせ}紵の生産地であった。しかし、近世に入ってから製布技術はあまり発達せず、もっぱら苧紵の生産を中心に冬期及び農閑期の婦女子の作業として麻織が維持されていた。ところが、天明年間(1781～1788)に越後縮が大量に移入されて生産が圧迫された。そこで加賀藩は策を施し、文化年間(1804～1817)に事業責任者十村与三右衛門の手代権右衛門が、製布技術に改良を加えた結果ようやく「徳丸縮」として商品化され、文政4年(1821)頃にはある程度普及をみたという。

しかし、越後縮との競争は困難をきわめたようで、品質向上のために地元永見産の苧紵を使用せず。原料の青苧を上州から直輸入することが献策されたというが、実行されたかどうかよくわからない。

ここで注目すべきことを記す。

まず『小千谷市史』に、文政4年(1821)に能州徳丸村あたりで越後縮に似た品が出来るようになり、文政7年(1824)には原料を吟味し出羽最上産の上苧を用いたところ、ますます品質が向上したとある。(注2)

次に、『石川県鹿島郡誌』の「文政9年□郡紵方一件」の中に次のようにある。(注3)

去々年最上より5駄誠に宜敷苧取寄能州に差遣

し縮仕來為致候所 次第ニ出来宜敷相成申候ニ付 追々取寄差違圖り申談置候

以上2つの例は、時期と内容がほぼ一致しており、このことから能登縮の原料に上質の羽州芋を用いて品質向上策が功を奏したことは間違いない。このように、この地においても羽州芋が地元産や他地域の青芋よりも優れた原料として使用されたことが明白であり、その後も、羽州産の仕入れは拡大しながら続いていったと思われる。

羽州芋の輸送は北前船で七尾、または羽咋の港で荷下ろしたと思われるが、酒田から直接運んだ場合と、新潟や直江津の緒湊に一旦下ろして越後商人の手でさらに伏木や七尾に運ばれる場合があったものと思われる。表4と5は明治期のものであるが、以上のことを裏づけることのできる資料ではないかと思われる。

能登産の縮は、上述した徳丸縮のほかに^{あぶや}阿部屋縮、能登縮などの商品名で出荷されたが、明治37年に^{ろくせい}鹿西町に事務所を置く鹿島麻織物同業組合が結成されて、これらの縮は「能登上布」の名で宣伝されるようになった。同組合は昭和58年まで存在したが、上布の生産が途絶えて解散のやむなきに至った。

現在、羽咋市の山崎仁一家が伝統的な能登上布の生産を引き継ぎ、紡績麻糸(ラミー)を原料とした緋の上布を商品化している。この緋織りの技術は昭和36年に石川県指定無形文化財となった。

また、能登縮の発祥地でもあった^{ろくせい}鹿西町では、近年村起こしの一環として能登上布再興に取り組

表4 能越諸港の芋移入高

年度	港名	伏木	七尾	羽咋浦
明治10年		芋45丸 307円07銭 青芋11個 99円	芋6,300貫 10,050円	麻芋 13個 78円
11		芋1,250個 37,500円	芋 300駄 18,000円 (1駄は36貫目)	

『小千谷市史』より引用

表5 新潟県諸港の芋移入高

年度	港名	直江津港	新潟港
明治10年		麻芋 1,158個 22,520円30銭	麻芋 4個 36円
11		麻芋 1,168箱 24,310円40銭	麻芋 78個 1,652円20銭
12		麻芋 18,021円40銭	麻芋 17個 306円
			(以上「東北諸港報告書」より)
28		麻 3,000個 60,000円	麻芋 2,950貫 6,490円 青芋 440貫 968円 麻 1,690貫 3,718円
			北海道各地へ 伏木へ 四日市へ
29		麻 4,000個 80,000円	芋 209貫 1,045円 麻 106個 530円
			北海道、酒田へ 四日市へ (以上「新潟県農商工年報」より)

『小千谷市史』より引用

んでおり、全国の麻織物産地を訪れて原料提供と技術指導を仰いでいる現状である。

注1、『島屋町誌』石川県鹿島郡島屋町 昭和30年

注2、前掲『小千谷市史』P803

注3、『石川県鹿島郡誌』P550 昭和4年

(5)近江麻布

近江国の犬上、^{えち}愛知、神崎の3郡には、早くから麻布生産が起こり、その中心地が犬上郡高宮(現彦根市)であったことから近江麻布のことを「高宮布」といった。高宮布の名が文献に現われてくるのは室町時代からというが、(注1)慶長5年(1600)に高宮が彦根藩領となると井伊家では幕府に対する献上物、さらに広く贈答用として「高宮上布」を用いたことから生産が一層さかんに、さらにその名を全国に高めたのは、近江商人が八幡蚊帳とともに下し荷の代表産物として販売したからという。(注2)

高宮布の中で^{きびら}晒さない生平は無地の帷子として庶民の夏季の常服となり、また袷としても用いられ、綿を入れて冬服ともした。晒したものは主として袷や袴地とされた。晒業は^{やす}野州の晒屋が繁盛し、野州晒ともいわれた。

どの麻布生産地も同じように、近江麻布製織も農間余業として発達した。特に経糸の場合、強靱

でなければならないので地元産の青苧を使い、苧積みとともに撚りをかける必要があった。緯糸は撚りはいらぬが、当然苧積みの工程は必要である。これらの苧積み、撚り、そして機織りはすべて農家の婦女子の手になり農閑期の副業とされた。

ところで原料の青苧であるが、『越後風俗志』に次のようにある。(注3)

読物類称呼(元禄8年印本)に曰く 苧麻は土として生ぜざる所なし 散子分苗の両種あり 色も青黄の両種あり 毎年両度刈取之然れ共 土に依りて同種の物も其性の強弱あり 既に近江に植る物其性弱し 東北国寒地の物は至て強し

この文章は元禄8年(1695)刊の『続物類称呼』を引用しているが、これによれば近江産の青苧は脆弱で、東北の寒冷地のものが強靱で良いという評価があったことがわかる。東北のものとは、おそらく羽州産と会津産の青苧をさしていると思われる。次に『近江麻布史』や『彦根市史』によれば、経糸は艶は悪いが質が強靱な地元産青苧(地麻)を用い、地麻は久徳、多賀、敏満寺、甲良など湖東平野の東側山手の諸村に産したという。一方緯糸は、艶の良さという点で上野、下野、越中、能登方面産のものが用いられたとある。(注4)

ここまでは羽州産については何も触れられていないが、さらに『近江麻布史』には次のようにある。(注5)

近江商人は元禄年間(1688~1704)から、野州(栃木県)や上州(群馬県)へ行商にでかけて、その帰りに麻苧を高崎・藤岡から仕入れて持ち帰ったといわれ、『近江愛知郡志』にも越中・能登から原料を仕入れたと書いてある。そして、日野の中井家が東北地方からの登せ荷として青苧を持ち帰った記録もある。中井源左衛門が明和7年(1770)に、米

沢新宿^{にいじゆく}の嶋津五右衛門・榎屋才次郎と資金を出しあって、同地方で産する青苧を買入れ組合商内を行なったという。これらによって、麻布の原料を野州・上州・能登(石川県)・越中(富山県)そして遠く東北地方から仕入れたことがわかる。(筆者注=米沢新宿とは、現高島町^{にいじゆく}二井宿と思われる。)

以上は近江地方の資料であるが、これに対して当地方の資料をみても。

先に大蔵村稲村家の「青苧売仕切」について触れた。その中で青苧を荷受けした上方の間屋名とその量(駄数)をまとめると次のようになる。(注6)

- 寛政11年(1799)奈良・可勢屋喜七郎 5駄
- " " 京都・日野屋友三 80 "
- 寛政12年(1800)奈良・可勢屋喜七郎 10 "
- " " 京都・藤屋忠兵衛 10 "
- " " 京都・日野屋友三 7 "
- 寛政12年(1800)近江八幡・増井新六郎 1駄

このように、少量ながら近江麻布の産地近江八幡地方にも直接羽州苧が送られている事実が明らかであるし、京都の間屋に大量に送られた青苧もいずれ奈良晒や近江麻布の原料となったことはまちがいない。

以上のことから、近江麻布の原料は、上野、下野、越中、能登のほかに、羽州のものが用いられたということが出来る。それは各地の麻織物の原料に羽州産が使われたことから当然考えられることである。もっと踏み込んで考えてみるならば、越中や能登の原料とは、羽州産のものが大部分含まれているのではないと思われる。なぜなら、これまでみてきたように出羽の地まで遠路青苧を求めて越後商人や高岡商人が訪れて大量に買い込んでいたのであり、それを近江の商人たちに転売

した可能性が高いと考えるからである。特に越中八講布に羽州苧が継続的に用いられていることは明白であるし、近江麻布業者が羽州苧に目を向けなかったはずはない。

現在、近江八幡市立資料館には、西川甚五郎、伴伝兵衛と並んで八幡商人の御三家の一人として全国に名を馳せた呉服・太物商森五郎兵衛家が所蔵した近江麻布の逸品が多数保存されている。火事夏装束、産着、打敷、巡礼着、帷子、小袖、さらには裂見本帳など、江戸期の青苧織物を中心に、古文書類も多数あり、これから資料館において整理作業が本格的に開始される。

愛知郡秦荘町の「手織の里金剛苑」で現在も近江上布が製織、販売されている。原料はラミーを使用している。

注1、『彦根市史 中冊』P34 昭和37年

注2、『滋賀県の歴史』P195 山川出版 昭和47年

注3、温古談話会編『越後風俗志』P109 国書刊行会 明治28年

注4、渡辺守順『近江麻布史』P105 雄山閣 昭和50年 前掲『彦根市史』P38.39

注5、前掲『近江麻布史』P179

注6、前掲『最上苧の生産と流通』P138

[6] 今に生きる上方文化

1、雛文化

河北町谷地では、毎年遅れの4月2・3日に町をあげての雛祭りが盛大に行なわれる。この日北口地区の中心街には多くの露店が立ち並んで、雛市が賑やかにくり広げられる。ここでは雛人形はもちろん、縁起物のダルマや玩具類、雛節句用のひなあられをはじめとする食料品、さらには一般日用品も売られ、それを待ちこがれた人々の列

で混雑する。

ここで谷地の歴史を概観してみる。

谷地の道海河岸は、長い間御城米の積み出し港としての機能しか与えられなかったが、天保13年(1843)に最上川の輸送方法の改善が行なわれ、道海河岸においても一般商人荷物が取り扱えるようになった。そうすると、谷地は米も含めた一般商品の積み出しと上方方面や他領の物資の荷揚げ(上り荷)の港のある町として大いに活況を呈した。特に湯水期には、谷地上流は船の廻行が不可能となることが多く、左沢、長井、米沢までを含む広い地域の物資の集散地となった。

こうして、谷地は村山地方においては山形の城下町に次ぐ流通経済の拠点として商業が発達した。上方産の物資や北海道の五十集物などの荷上げを行い、これらを在郷に供給、在郷からは特産の山野菜、薪炭、などを町方へ供給、これら双方の品々の交換、売買の場として市が発展した。

谷地に立つ市として知られているのは、北口市、大町市、荒町市、松橋市、八幡日市で、これらの地区には現在でも8基の市神(石碑)が建立していて、その名ごりを留めている。

北口市のうち、2と6のつく日に行なわれた市を「二・六市」といったが、特に旧暦3月2日に行なわれる市を雛市(節句市)と称した。この二・六市は、谷地城主白鳥十郎長久が内楯地区に築城する際、城下町の繁栄策の1つとして、吉田村にあった市を北口に移したとする説が有力である。(注1) それは、今から約400年前のことになるが、市として活況を帯びてくるのは、水運事情を背景として考えればおそらく江戸時代の後期であると思われる。

さて、この二・六市の雛市についてであるが、盛大に行なわれるようになった背景を考えてみる。

それは、裕福な商人たちによって上方産の衣裳雛や土人形の土製雛がこの地に持ち込まれたこと、

庶民の間に土人形を主体とした雛祭りが家庭内に普及し定着したこと、さらに、道海河岸の制限解除による市そのものの活発化、などがあげられると思われる。これらのことを総合して考えれば、雛市が盛況を示すのは江戸時代の末期であろう。

かつては、寒河江、楯岡、大石田などでも旧2月下旬頃から雛市は開かれたが、谷地の雛市がこれらの市を締めくくるかのように最後に開かれたこともあって、近郷では最大規模の雛市であった。近年の例であるが、昭和10年には250軒の露店が並んだというから、その規模の大きさがわかる。(注2)

現在、4月2・3日の雛祭りでは、雛市とともに町内の雛人形所蔵者が自宅を開放して自慢の人形を公開する。これは、かつて旧3月2日の市日には家々の人形を互に見物し合った風習を、河北町全体の企画行事として発展させたものである。この両日は全国から雛人形研究家、愛好家などが参加し、露店でのお客様とともに相当の人出でごったがえす。

谷地には、今なお古い雛人形を所蔵している人が多く、その豪華さ、数の多さは全国的に注目される場所である。1989年現在の筆者の調査では、内裏雛は以下のような所蔵数となっている。(雄雛、雌雛を1対とする)

寛永雛2対、元禄雛1対、享保雛12対、古今雛16対、次郎左衛門雛3対、有織雛2対、立雛5対、さらに、次のような雛人形関連の衣裳人形も所蔵されている。

御所人形10点、からくり人形4点、竹田人形10点、鴻之巢人形6点、その他の衣裳人形20点、

これらを所蔵しているのは谷地地区内だけで30家以上にのぼるが、実際は調査もれ、新規購入などで所蔵家、所蔵数ともにこれを上回っているものと思われる。

これらの中には享保雛や次郎左衛門立雛など、

折紙つきの逸品が多く、また、愛らしい御所人形や勇装な竹田人形、巧妙な動きを示すからくり人形などにも優れたものが多い。いずれも旧家の土蔵に手厚く収納、保存されていたものと思われ、装束、顔、手足、所持物、小道具等、損傷がきわめて少なく、実に良好な保存環境にあったものと考えられる。これほどの雛人形群が谷地に存在するのは何故か。近代に入って買い集められたものを別とすれば、やはり紅花と最上川水運によって台頭した有力商人、豪農たちの存在がクローズアップされる。

谷地は良質の紅花を産出した所で、紅花に着目した他国の商人たちが来往した土地でもある。たとえば、寛文年間(1661~1669)に来た伊勢出身の福田四郎左衛門、享保年間(1716~1735)に来た京都出身の柘屋甚右衛門、青柳屋喜惣治、同年間他国(出身不明)から来た出羽屋藤蔵などがあげられる。(注3)

これら外来商人たちの影響を受けながら、谷地の在地商人や農民たちは紅花をはじめとする産物を生産、販売する有力商人、豪農に成長していったのである。紅花を中心とした商業活動で産をなした谷地商人は20名を越える。

彼らの中で、はじめから豪華な装束をつけた雛人形を買いこんで家の財産としたのはおそらくごく少数で、大部分は京都産の伏見人形を主とした土製雛人形や福岡産の博多人形などを買って自宅に飾ったり雛市に出したりして売ったのではないかと思われる。雛市の盛況は、こうした一部有力商人の雛に対する関心が大きな契機となっているように思われる。

そもそも、地方における雛市で売買される雛人形は高価な享保雛や古今雛などの衣裳雛ではなく、粘土を焼いて彩色をほどこした安価で素朴な土人形や紙製張子人形などであったと思われ、庶民が手にする雛人形とは、所詮、その程度のもの

だったと考える。

西廻り航路と最上川で運ばれた伏見人形や博多人形のほかに、元禄7年(1694)には仙台の堤人形、安永後期(1700年代後半)には米沢の相良人形などの土人形も製造が始まる。これらの土人形こそ雛市の主流を占めたものと思われ、前述したとおり、雛市が大いに賑わいを見せるのは、雛祭りが東北の庶民にまで普及する江戸時代末期であろうと思われる。こうした歴史的背景が雛に対する興味、関心の一層強い土地柄を育てたものと思われ、いよいよ谷地の有力商人たちは豪華な雛人形や御所人形、その他雛に関連する衣裳人形を買い求め、雛市の立つ日に自宅に飾っておのれの財力と格式を誇示したのではないと思われる。

雛人形は近代に入り、社会情勢の変化の中で有力商人から幾人かの手を経て今日に至っている。昭和57年からは、廃物となった雛人形を神事として焼く「雛供養」の行事も北口の秋葉神社で行なわれるようになり、祭りに一層の彩りを添えている。

一方、大石田町では町主催の雛祭りこそ行なわれていないが、相当数の雛人形が旧家を中心に所蔵されているとみられ、昭和63年度、平成元年度の2ヶ年にわたる所在調査が行なわれた。雛人形研究家藤田順子氏や大石田町歴史民俗資料館が中心となり、町内の綿密な調査が行なわれた結果、所蔵者は旧家を中心に20家に及び、約200体の雛人形と関連する人形群の所在が確認された。これは、河北町谷地と同様に最上川水運の大石田河岸で栄えた当町にも、雅びの香り高い雛文化が咲いたことの証しであるといえる。

このほか、県内のかつての豪商、豪農などの旧家には、きまって雛人形が所蔵されていることも雛文化の一端を示すものといえよう。

注1、『河北町の歴史 上』P151 昭和37年

注2、浅黄三治『河北町の歴史散歩』P43

注3、前掲『最上紅花史の研究』P259

2、祇園祭りの系譜

(1)新庄祭り

最上地方を代表する夏祭りである新庄祭りは、宝暦6年(1756)、新庄城主戸沢氏の氏神である天満神社祭礼として始められた。(注1) 前年の宝暦5年(1755)は大凶作で、領内に多数の餓死者が出たことから、5代藩主戸沢正^{まさのぶ}謹が飢饉に打ちのめされている民衆を元気付けるための方策、そして悪霊撃退の神事的行事としてこの祭りを始めた。

現在の新庄祭りは、毎年8月24～26日の3日間行なわれ、神輿行列と東北一といわれる19台の豪華な山車^{やまぐるま}及び囃子組が市内を巡幸する。この山車が祭の行なわれた当初から存在したのかどうか不明のようだが、安永5年(1776)の祭りには、すでに「紅葉狩り」「神功皇后」「子持山姥」「田原藤太」「西王母」などを題材とする10台以上の山車が出たという。それが事実とすれば山車の起源はかなり古いものといえる。また、宝暦5年の飢饉後に福井富教なる人物が記した「豊年端相談」に、祭りには「花笠鉾」があったとあり、先の安永5年の祭りには「はやし傘鉾」も出ていたとある。

ところで、新庄祭りを支えるこれらの山車や鉾の原型は、京都八坂神社の祭礼である祇園祭りのいわゆる「山」と「鉾」にあるといえる。

祇園祭りは、「祇園社本縁」という社伝によれば、全国に疫病が流行した貞観11年(869)に、これを払うために始められた「祇園御霊会」に起源をもつ。東京神田祭り、大阪天神祭りとともに日本三大祭りの1つといわれる祇園祭りは、平安時代以降は、町人層であるいわゆる町衆が支えてきた祭りであり、悪病神を追い払う、あるいは崇る神を鎮める亡魂供養のねらいを持つ、庶民の必死の願いがこめられた祭りといえる。

社伝には、当時の国数に準じて66本の鉾を立てて平安を祈ったとあるが、このことから実際の祭りにも鉾は神威を発揮して悪霊を撃退するものとして高々と掲げられるようになった。後に、鉾に加えて故事、伝説、逸話など語り継がれている名場面を表現した「作り山」が登場し巡行に加わるが、これが一般に鉾に対する「山」といわれるものである。

山は、祭りに一層色を添えるとともに、神を喜ばせる出し物と考えられる。また、鉾には榊、山には松の木が必ず添えられるが、これらは神が降臨する依代よりしろと考えられる。

現在、祇園祭りでは7月17日に9体の鉾と23体の山が市内を賑々しく巡幸する。現在の新庄祭りの山車も祇園祭りのそれとまったく同様の意味を持つもので、特に「山」の姿を模したものと言え、悪霊撃退の起源や祭りのスタイルも祇園祭りの流れを引き継いだものと思われる。

新庄祭りは京の文化が祭りの姿となって地方に伝播した1例であり、そこには多かれ少なかれ最上川が介在しているにちがいない。

注1、新庄祭りの内容については、大友義助「新庄まつりの変遷」（「写真集新庄まつり」新庄市教育委員会 平成2年）に拠った。

(2) 酒田山王祭り

酒田山王祭りは、酒田の総鎮守日枝神社(日和山と内匠町に鎮座)の祭礼として慶長16年(1611)に創始された伝統ある祭りである。それは、江戸時代36人衆でリードされる自由都市酒田を象徴する盛大な祭りであった。

毎年5月20日・21日の両日行なわれているが、木遣音頭ちきりとともに渡御行列として練り歩く山車は、やはり京都祇園祭りの山鉾の流れをくんでみるとみることができる。

かつて本間家の山車であった亀鉾は、明和2年(1765)に本間光丘が270両の費用をかけて、京都の人形師に製作させ船で運んだものという。(注1) 山車の巡行が民衆の運営によって恒例化していったのは光丘の力によると考えられている。

この亀鉾は、現在酒田市総合文化センターで常設展示されている。

山王祭りの盛大さは、大坂、江戸までも聞こえ、この祭りの行なわれる時期には諸国の船が酒田湊に入り、北前船の帆柱が林立するような情景がみられたと伝えられている。

祭礼時には、本町の廻船問屋が玄関先に家宝の屏風を飾る風習があったというが、これも祇園祭りの模倣と考えられる。つまり、祇園祭りにおいては今もなお道道の商家では店頭にも毛氈を敷いて、秘蔵の屏風を並べて祭りに彩りを添える風習があるからである。

ちなみに、祇園祭りは屏風を飾るところから「屏風祭り」ともいわれており、横山華山筆の「紅花屏風」(山形美術館蔵)は、京都四条通りに住んだ伊勢屋利右衛門が祇園祭り用屏風として発注したものとされている。(注2)

酒田市中町の小野太右衛門家が所蔵している「酒田山王例祭図屏風」(嘉永4年 五十嵐雲嶺筆)は、近世期の祭りの盛大さと山車の豪華さを精巧に生き生きと表現して祭りの姿をうかがうに大いに参考となる。また、鶴岡市の天満宮には、明治3年(1870)に奉納された祇園囃子絵馬があり、祇園祭りの地方への波及と定着ぶりがうかがえる。

なお、酒田山王祭りは、大火後の昭和55年から「酒田まつり」と改称し、酒田の復興と繁栄のため大獅子2体と各町内や企業でつくる山車が多数参加して、新生酒田を象徴する祭りとなっている。

注1、「酒田市史 上巻」P933

注2、今田信一「べにばな閑話」P206 高陽堂書

店 昭和55年

3、尾花沢雅楽

雅楽とは、日本古来の久米舞、倭舞、五節舞、田舞、などや外来の舞楽などで演奏される舞いと音楽の総称である。この日本の古典的な音楽が、尾花沢市上町の念通寺(浄土真宗)に伝えられ、「尾花沢雅楽」として昭和49年に市無形文化財になった。

尾花沢雅楽の由来について、「尾花沢風土記」(尾花沢市史編さん委員会編、昭和55年)などによって記してみる。

その起源は、以下の2つのことから寛政3年(1791)と考えられている。その1つは、ひちりき88曲譜面の奥書に、寛政3年に京都の家元安部朝臣季康の名で、安部家伝来の所作を尾花沢市仲町の商人鈴木久左衛門に口授口伝した、と記されていること、もう1つは、楽人の着装する烏帽子を入れる数個の桐箱に、寛政3年の墨書銘があることからである。

鈴木久左衛門家は、俳人芭蕉が奥羽行脚の折、尾花沢にて彼を厚遇した地元の俳人豪商鈴木八右衛門清風と血縁関係にある名家であり、念通寺檀徒であった。彼は商人として上方との交易を行ったであろうし、縁あって安部家とつながりを持つ機会があったことから出羽の地に雅楽がもたらされたといえる。安政元年(1854)には、京都の公卿入江為積が雅楽指導に尾花沢に来ているが、病を得てこの地で没し念通寺に墓碑が建てられている。

雅楽は念通寺の檀徒によって維持されてきたことから「念通寺雅楽」というべきものであるが、昭和49年に広く市民の雅楽とすべく「尾花沢雅楽」と称し保存会を結成した。

現在は念通寺の報恩講(11月23日)や諏訪神社の歳旦祭(1月1日)で演奏が行なわれている。楽器は、笙(4人)、ひちりき(4人)、笛(4人)、太鼓(1

人)、羯鼓(1人)、鉦鼓(1人)を用いており、合計15人の楽人が烏帽子、垂直の装束で古式豊かに「越天楽」「五常楽」「含歡壇」「酒胡子」「長慶子」の曲目を奏でる。

特に諏訪神社歳旦祭では、新しい年明けとともに神社拝殿で演奏が始まり、2時間あまり古雅に満ちた音色が新年の清浄な空気の中を流れゆく。初詣の長い行列の人々も、美しい調べを聞きながら新しい年への期待をこめるのである。このように遠く上方から運ばれた雅楽演奏は、尾花沢の人々にすっかり定着した行事となっている。

同じく雅楽は、東根市長瀬の光徳寺(浄土真宗)にも伝えられている。光徳寺は、尾花沢の牛房野館の城主鈴木右(左)近が仏門に入って小宇を建てたのが始まりといわれ、それは元龜年間(1570~1573)とか慶長年間(1596~1615)ともいわれている。(注1)

今のところ、雅楽の発祥年代は楽器を入れる木箱の墨書などから明治20年代あたりとされているが(注2)、あるいは江戸期までさか上れるかも知れない。

現在は定期的演奏はなく、寺に関する特別行事や地区内の慶事の際請われて演奏している。楽器は尾花沢雅楽と同じで曲目は「越天楽」「揆頭楽」「岩戸楽」の3曲である。光徳寺の雅楽は、現在後継者難の難しい局面を迎え、その対策が急務である。

注1、吉田達雄「長瀬の寺院を探る」平成2年

注2、同上「長瀬の芸能を探る」平成元年

4、香道

先に記した中山町の豪農柏倉九左エ門家には、上方から船で運ばれた文物が多数所蔵されている。たとえば、仏像仏具、茶道具、蒔絵重箱、漆器、陶磁器、絵巻物、屏風、紅染衣装など、まさに華

奢な京文化の香気に満ちている。就中、香をたてる香道具一式は欠損なく完全な姿で保存されていることは注目されてよい。この香道具はいつ頃使用されたものなのか。

柏倉家には「小鳥香之記」と記された料紙が残っており、そこには、香の会を催した時の内容が記録されている。この末尾に「明和8年正月」(1771)の銘が記されているから、香道具は少なくとも200年前には使用されていたとみることが出来る。香箱、香炉、重香合、香盤、札箱、盆、香筋建、香札、硯箱などの各道具は、2世紀以上の星霜を経た歴史の重厚さを保っており、また、漆塗り用器として工芸的な優美さも放っている。

香は、いわゆる香りの1種で、西洋では香水、東洋では香として発展した。日本には仏教とともに伝来し、仏を供養するために用いられ、やがて神々にも供えられ宮中の儀式にも採用された。

平安時代には、ここち良い香りが尊ばれて貴族社会に溶けこみ、遊びや贈答品としてもはやされ、室町時代には武家社会にもこの風潮が拡大して、ついに東山文化において日本独自の香道が成立した。

江戸時代は香道具は貴族や大名はもちろん、中流家庭では嫁入り道具としても必需品といわれるほど流行した。

香は香木を焚いて香りを楽しむものであるが、香道には、室内に香を漂わせて楽しむ空薫や、何人かが集まって何種類かの香を焚いて香の種類を当てることを楽しむ組香などがある。

柏倉桂子氏は、柏倉家の香道を今日に伝え、師匠として組香などを主宰している。小堀遠州流築山庭園を背景にした柏倉家主屋上段の間では、香道、煎茶、抹茶などの会が毎年定期的に開催されており、この雪深い東北の農村にも上方から始まった日本の伝統文化が脈々と受け継がれている。

5、言語・食文化

これまでみてきたとおり、最上川の介によって出羽と上方は直結していることが理解できた。物資の移動、文化の交流の中に、人間が絶え間なく往来する姿が浮かび上がる。近江商人、京・大坂商人、伊勢商人たちが交易を目的に、ひんぱんに出羽を訪れ、その中には定住する人たちもいたことは先にみた。

そこで、彼らの生活様式が地元民の生活様式と融合し合う中で彼らのもつ上方的要素が残ることは充分ありえた。上方言葉の一部が出羽の人々に慣れ親しみ、いつしか地元の言葉として残っていくということもその例であろう。

方言研究家の矢作春樹氏のご教示によれば、上方言葉として今日まで使用されたものに30数語あるとのことである。たとえば、なんぼ(いくら)、あっちゃこっちゃ(あべこべ)、すがはる(氷が張る)、さげ・はげ(〜だから)、ひざまく(ひざまづく)、いしなご(小石)、ちょべつと(少し)、ちゃつちやつと(さつさと)などをあげている。

一方、村山地方特有の漬物に「おみづけ」があり、「近江漬」と書くのだと伝えられている。先に近江商人の山形進出について述べた。八幡商人系の西谷伊兵衛、西谷清兵衛は、山形の十日町佐藤利兵衛家の屋敷を店借りして並んで出店を構えた。彼らは近江に妻子を残し山形に長期滞在した。手代数人と生活を共にし、食事から身の回りの雑事すべてを男手で処理した。伝えによれば、女手のない一汁一菜の簡素な食生活の中で、彼らは青菜に大根の切れ端や、からいも(きくいも)を塩漬けにした、いわば残り物利用の手軽な食べものを考え出したのである。これが近江人の漬物、つまり「おみづけ」の起こりとされている。男所帯の生活の知恵が生んだ漬物は、当地の人の口に合った風味を持ったのであろうか、近江商人の広い活動とともに近郷に広まり、今日まで村山地方の漬物

として伝えられている。

俳人松尾芭蕉が、奥の細道行脚の際味わった食べ物の中に奈良茶があったことが、「曾良旅日記」の中に記されてある。(注1)

奈良茶について、尾花沢市にある「芭蕉清風資料館」に鈴木国明氏の写真とともに詳細な説明がある。それによれば、奈良茶は元来奈良東大寺や興福寺の僧侶に広まった食事で、のち江戸浅草寺界隈に伝えられ粋人の間に流行し、主として朝食に用いられた。そもそもは大豆入りの茶粥であったというが、のち、煎じた茶に酒、大豆などを入れて塩味で炊いたご飯をさすようになった。

東根市内の旧家に、今なお正月料理として奈良茶をつくる習慣が残っている。米に小豆、ささぎなどの穀類を混ぜて炊き上げた簡素な行事食である。

また、京都名物の「芋棒」という料理は、里芋の1種で京都特産の海老芋と、マダラを乾燥させた棒鱈を一緒に炊き合わせたものであるが、山形において祭りや盆などの行事食である「棒鱈煮」は、この芋棒料理に起源を持つといわれる。

一方、冷たくして醤油や薬味をかけて食べる豆腐のことを「冷奴」とか「奴豆腐」というが、庄内地方でこれに当たる豆腐を「南禅寺」と称している。「南禅寺」は冷奴が四角形に対して、ドーム状の半円形をなした木綿豆腐の柔らかいもので、おろし生姜、鰹節、さらし葱、醤油などをかけて食べる夏季清涼食品の1種である。呼称から京都左京区にある臨済宗南禅寺豆腐にちなむものではないかとされている。

注1、「曾良旅日記」(「芭蕉 おくのほそ道」所収 岩波文庫) P106 平成3年

[7] おわりに

内容が多岐にわたり、実証的裏づけや調査が行き届かない部分も少なからずあり、今ひとつ深まりに欠ける箇所もあったと思っている。今後長期的な考察を行っていけば、最上川が運んだ文化的影響はまだ多くの分野で興味深いものが見い出せるのではないと思われる。基調として、文化の交流という視点でとらえようとしたが、水は高い所から低い所へと流れるごとく、高いレベルの上方文化がより多く山形へ流入したのが実態であろう。

しかし、それだけではない。[5]の青苧文化の創出においては、紅花と同様に文化の種が他地域へ流れ出て、その地で花開いた事例も考察した。文化の一方的流入ではなく最上川が文化を創出する役割も果たしたことを明らかにしようとしたつもりである。「紅花文化」もさることながら、「青苧文化」は今後ますます見直していかなければならないと考えている。

なお、文中に写真資料を多く掲載したいと思ったが、限られた紙数であったため実現できず悔が残る結果となった。

本稿を成すにあたっては、多くの方々に資料をご提供いただいたり、さまざまなご教示をいただいた。あらためて厚く御礼申し上げる。

特にこの度は、県外の方々の現地におけるご協力にご指導を仰いだ。次の方々には特にお世話になった。

[越後縮] 小千谷市教育委員会・山崎忠一氏、及び遠藤孝司氏、小千谷織物同業協同組合・阿部康治氏、十日町市史編さん委員会・佐野良吉氏、十日町市博物館・竹内俊道氏

[近江麻布] 近江八幡市立資料館・江南 洋氏及び河内美代子氏

[奈良晒] 月ヶ瀬村奈良晒保存会 代表・奥田な

みえ氏、奈良市邑地町水越神社 代表・久保久三郎氏、奈良市柳生町八坂神社 代表・荻田徳三郎氏、

〔祇園祭〕さくら銀行京都文化財展示室・今北昌宏氏、

このほかに、奈良県立民俗博物館、滋賀県近江商人郷土館。滋賀県立図書館、福井県北前船の里資料館、石川県立歴史博物館、高岡市立博物館から多くの資料をお寄せいただいた。

以上、はなはだ簡単ではあるが、ここに記して深く感謝の意を表する次第である。

明治四年十二月十六等出仕准席申付候事

天保十年十二月生

山形 県

庶務掛申付候事

全五年二月十七日任山形県史生尾花沢出張所詰申付候事

全七月十八日日本県詰申付候事

全六年三月十五日職務往復受付三掛専務申付候事

全四月廿七日新莊出張所詰申付候事上等月給十五円下賜候事

全十二月十八日補十三等出仕

山形 県

下等月給下賜候事

ここでとぎれる。かなりとぶが、明治二二年四月一日山形市が誕生する。それまで山形市は南村山郡に属し、六ヶ所に戸長役場がおかれており、市誕生につき各戸長から七月に事務引継ぎがなされた。

その文書によると、吉徳は、六日町外四ヶ町（六日町・小橋町・旅籠町・鍛冶町・四日町）の戸長として名がでてくる。（『山形市史資料 第75号』。ただ戸長役場が六ヶ所になったのは明治一七年六月二四日であり、水野源冷が戸長である（『山形市史』下巻）ので、途中交替したのもと思われる。また第75号の付録の「山形県下市長村長・助役・議員人名録（明治二二年）には、市参事会員六名の一人として名がでてくる。明治二六年参事会員をやめ、明治二七年市長第三候補となっている（『山形市史』下巻）。なんとかここまで拾いあつめた。浄光寺の過去帳には、大正七年一月二六日没、八〇才、戒名顯寿院有祥日徳居士とある。つまり後半生がわかっていない。さきほど顔を出した甲子太郎が一〇代、弟悌次郎が一一代、その子が一二代ということになる。

あとがき

水野家臣の調査をてがけている筆者にとつて、「秋元家文書」は貴重な資料に思えた。資料の紹介と、秋元家についてとくに宰介について述べようとした。ところが事は幕末の江戸湾防備と軍事改革にかかわる問題で、浅学の筆者などの手におえるようなものではなかった。従つて解説も半端なものになり、どっちつかずのものになつてしまつた。ただ、これを発表することによつて、全国各地から関連資料や類似資料を紹介して頂いたり、本館資料をご活用頂いたため、貴重なものをとばしているおそれも容赦願いたい。

表記について、1、原文引用は原文尊重の立場をとり、読点と返り点を付するぐらいいにとどめた。2、人名は一つにしほつて書いた。参考文献は、そのつど掲げたほか、全体的に左の諸書にお世話になつた。記して謝意を表したい。

- 北島正元 『水野忠邦』
- 有馬成甫 『高島秋帆』
- 佐藤昌介 『洋学史の研究』
- 石山滋夫 『評伝 高島秋帆』
- 勝海舟全集
- 仲田正之 『江川垣庵』
- 佐藤昌介 『渡辺崋山』
- 佐藤昌介 『洋学史研究序説』
- 戸羽山瀚編 『江川垣庵全集』

号)による。

系図をみて気付いたことは、七代吉当の妹(宰介の義叔母)が、長崎代官高木作右衛門手代塚田多十郎義都に嫁している。唐津時代のことである。宰介には、男一(三才で没)女五名の子があるが、長女ミチは養子吉徳と配偶するが、四女セン(嘉永四年生)は、山田丘馬(秋帆門、後、三太夫・巍山)の子丘馬(嘉永三年生)に嫁している。

八代 吉徳

吉徳は同藩小林信近(百石、一四才で末期養子に入り遺跡二百石の半)の二子で、天保一〇年二月二三日生まれ。安政三年二月四日吉順(宰介養子、同四年正月一日一九才で中扨従、八両三口、同五年三月二〇日吉順長女ミチ(天保一〇年四月二五日生)と配偶、文久元鋏輔と改、元治二(慶応元)年七月二日改革により先手組差図役、中扨従上位、同一二月二六日遺跡無相違、三〇〇石、先手組差図役頭取(以上『庶士伝後編』と系図、慶応二年も同様、『山形県史』資料編18)。

系図によると御目付役にもなっているらしい。

戊辰の役に際しては郡奉行としてだろうか、米沢・上山・仙台・長岡等各藩使者の応待をしている。九月二日山形藩降伏謝罪が受入れられ、器械目録を福島へ届ける役を果している(『山形市史編集資料』第19号)、一〇月二九日藩重臣等の藩主への歎願書をもち東京へ届けられている。

○明治二年六月二九日版籍奉還、忠弘山形藩知事に任ぜられる。七月二六日嶺岸半内・秋元鋏輔ともに参政被仰付、郡奉行務向只今迄通り、一〇月四日嶺岸半内・秋元鋏輔は少参事、定禄五〇俵、

職禄二二俵。(東京都立大学付属図書館文書・写真山形市総務課)

○明治三年三月五日 御触 嶺岸少参事 秋元少参事 右前々郡方奉行職名、今後民政副総督と被改称候事、以来、郡奉行ハ民政局、以来御代官役所ハ租税役所(中略)右相達候間、惣町へ可相触候。三月五日 民政局 とある。(『山形市史資料』第78号)

○明治三年七月一八日 山形藩知事水野忠弘近江朝日山藩知事に任命

○八月二八日 山形県(第一次)設置 (『山形県史』年表)

○十一月二日 在山形の士族卒は山形県貫属に仰付られる

○二月五日 県官に貫属掛はいるが、士卒族統率のため入札によつて、

士族長	川澄 明憲	雄倉 正実
士族副長	秋元 吉徳	緒川 永
卒長	山崎 正亮	石川 方淳
	石川 利哉	
卒副長	山中 重道	町田 三一
	岩永 吉迪	

(組頭もきめる)

○明治四年一月七日 川澄が一五等官禄として県に出仕、繰上つて吉徳が士族長となる。

○一月二〇日 甲子太郎(吉徳長男)等計六人が給仕になる。一三才、明治五年一月二七日免

一 一月七日 第一区(郭内)後の香澄町)戸長申付候事(以上『山形市史編集資料』第20号による)

○以下『山形県史』資料篇1「山形県史」を写す。

山形県士族元山形藩 秋元藤原 吉徳(鉄八)

は、家康生母お大の同母兄」を誇り、幕府への忠誠心も人一倍強く、何事にも熱中する癖の忠邦は、老中として外国状勢をも深く摺むことができたであろう。一方では、強固な保守派を考慮にいれながら、前述の通り段階的に、時には強引に、自分の構想である西洋砲術を中心にした軍事改革（坦庵を牽引軍として）をめざすものであった。印幡沼開鑿や上知令をも含むであろう壮大な江戸を中心とする海防計画も、一四年閏九月老中被免により挫折した。

浜松藩としては、小銃の買付け、居屋敷や中渋谷村下屋敷での訓練、藩士の葦山入門、ホーイツスル筒の藩邸での試作（10図）、また坦庵への歩士用軽量剣付銃試作依頼などをしていっている。これらは宰介が連絡係のようにして坦庵の援助を受けているようである。

浜松藩は武衛流・佐々木流・荻野流の古いものであったが、それに山田丘馬が学んできた高島流が加わった。忠邦は藩の軍法を一定し効率的な軍制にするため、天保一三年小野寺慵齋を招き、古市ら五名に極意を伝授させた。慵齋は師の清水赤城と同様西洋砲術を評価、高島流砲術を長沼流に組み入れるため、みずからも丘馬の門に入ったりした。しかし武衛流・佐々木流・荻野流を学んだ者はおちろん、丘馬やその門人たちにも露骨な反感を示される。忠邦は家老水野平馬・拝郷縫殿を軍事取調掛兼兵学修行総司に任命、反対派にもれないよう古市ら五名に調査立案させ、弘化元年一月に『海防御備組書』、二年三月に『自国警衛組書』ができ、農兵隊をも含む海防組織で画期的なものであった。

宰介と兵馬はともに秋帆門であったが、宰介は江戸、丘馬は国元と分担したかたちであるが、これは結果論かも知れない。

注、この項は北島正元『水野忠邦』、仲田正之『江川坦庵』

佐藤昌介『洋学史研究序説』を参考にさせて頂いた。

宰介にもどると、弘化二年二月六日英烈公（忠邦）に奉仕、嘉永元年一月二三日、多年側勤精勤を以渋谷（下屋敷・忠邦謹慎）扈從頭取、小納戸位次、増二両、（嘉永四年二月一〇日忠邦死）同四月九日大納戸奉行、位如故、一二口に改め、その料三口、御書役兼で山形に移る。安政二年五月一七日家督二五〇石（三〇〇石の内、五〇石は父隠居料）動向如故、三年四月一五日者頭、五月九日『庶士伝後編』編纂（嘉永二→安政三年老関泰継が主任）を助るを以銀一枚、一二月一九日亡父隠居料五〇石給、五年一〇月一四日近習物頭、一二月一四日天兵衛与改、文久二年二月一九日槍奉行、元治二（慶応元年七月一二日改革に付先手頭、位は先手頭上位、大隊司令士、教頭・教佐・助教輪番持、九月四日彦番中隊を預る。一月五日死、五四才、系図には、慶応元年六月召に依り出府とあり、同年一月五日病に罹り死、府内三田聖坂日蓮宗蓮乗寺へ埋葬、実相院実円日融居士とあり、○扈從奉公二三年、○部屋住二七年とも書かれ、碑の画も添えられている。また、山形浄光寺の過去帳にも戒名が載っている。

前述したが、宰介は、下書き的であるが系図を書いているし、山形市八日町浄光寺にある「秋元家墓」は吉順（宰介）の建てたものである。側面に刻されている、「安政五年丙辰九月八日」は養父吉当の、「嘉永六年癸丑九月二日」は養母美喜（同藩剣持正雄妹）の亡くなった日である。『庶士伝後篇』編纂にも携わっており考証にも関心をもち、先祖崇拜の念が強かった人であろうか。

注1、吉当・宰介の経歴は、系図以外は『庶士伝後篇』（『山形市資料』第71

寄水鶏恋 まちまてと問こぬ人をよひよひに

閨のとたく水鶏ともかな 吉当

雲雀 葦草紫にほふあけほの

かすむ末野にひはりなく也 吉順(宰介)

初冬霜 を山田の稲から白くおく霜の

けふるや冬のはしめなるらん 吉順

宰介吉順について

天保一二年五月九日、徳丸原演練に参加したことは前に述べた。宰介は文化九(没年から逆算)、須賀井正敏(一五〇石)の四子として生まれ、初新之助、文政九年二月二三日吉当(三〇〇石)の養子、文政一二年正月二三日一八才で扈從(八両三人扶持カ)、天保四年四月二一日刀番、翌年正月一日増二両、八年八月二三日江戸詰、翌九年一〇月一〇日部屋番兼、他に衣料金七両、翌一〇年四月二四日宰介と改め、一二月二五日増二両(二両三人扶持と衣料金七両)、そこで天保一二年を迎える。老の養子で、江戸詰、忠邦側近ということになる。徳丸原演練で、本稿に関係ある人々の年令をあげておく。

氏名	生 年	演練時年令	没年(没年令)
水野忠邦	寛政 六(一七九四)	(48)	嘉永四・二・一〇(58)
高島秋帆	寛政一〇(一七九八)	(44)	慶応二・正・一四(69)
江川坦庵	享和 元(一八〇二)	(41)	安政二・正・一六(55)
下曾根金三郎	文化 三(一八〇六)	(36)	明治一七 (69)
秋元宰介	文化 九(一八二二)	(30)	慶応元・一・一五(54)
山田丘馬	文化 六(一八〇九)	(33)	明治五に64歳

こゝで忠邦の海岸防備について簡単にみておきたい。その前に、川路聖謨の忠邦評に、「申サバ仁恵ハ深カラザル人ナレドモ、人ノ功ヲ賞シ、能ク人ヲ用ヒ、才力十分アリ。只剛愎ノ癖ハアレドモ、世間ニテ悪シク言フ程ノ事ハ決シテナカルベシ」とある。忠邦は文化九年一九才で襲封、さっそく藩政改革を宣言し、文武の奨励につとめる。一方唐津藩主として長崎警護の大役を勤めることになる。文化九・同一三年等長崎を巡回し、オランダ商館長ゾーフと会談したこともあり、海防への関心は諸藩主中とくに強かった。同一四年海岸をもつ浜松へ転封。文政八年二月異国船打払令が公布(五月大坂城代に昇進)されると、それぞれの役向きから出させた案をもとに藩庁が作成した領地海岸警備計画に、忠邦は自分の意見も加え、四ヶ所の海辺出張の案を認めた。文政一〇年英軍艦小笠原諸島占領。天保三年忠邦本丸老中に転。天保九年二月羽倉外記伊豆七島巡視。一二月鳥居忠耀・江川坦庵江戸湾備場巡見。一〇年一二月老中首座。翌一一年二月アヘン戦争、九月秋帆西洋砲術採用を建策。一二年一月家斉没(大御所時代終焉)、五月徳丸原演練、秋元宰介を入門させる。七月坦庵一人へ皆伝を命ず。(保守派は、西洋砲術の各藩への普及を警戒)、秋帆帰国に際し、山田丘馬ほか一名を長崎へ派遣入門させる。一三年六月秋帆に砲術師範の自由を許す。七月天保薪水給与令。九月坦庵高島流砲術師範許可される。一〇月秋帆逮捕、坦庵大砲製造許可。忠邦以下四閣老製砲依頼。一二月下田・羽田奉行設置。一四年五月坦庵鉄砲方兼帯を命ず。これは、従来の幕府鉄砲方井上・田付両家の与力・同心数も増員しながらの坦庵鉄砲方採用である。穎悟で譜代意識が強く、將軍家の「御外戚」(水野初代藩主忠元の父忠守

の用勤るを以銀三枚、三年正月一日精勤を以上下一巻(た)、七年正月一日同上銀三枚、八年一月七日物奉行位順、九年三月二七日老た足一〇〇石(老は三〇〇石高。人材登用のため、持高の不足分だけ足した。役をやめれば持高にもとず。)役料一三〇苞、一二年四月六日勝手方(財政担当、)天保二年二月五日勝手用上方筋滞留辛勞すとして御服一重・継上下、九年二月二四日勝手用により出府、精勤を以御服一重、一一年五月二四日出坂(大坂)精勤を以御服一重、弘化四年正月一日移封浜松引渡畢て御刀(武蔵国正永金五枚)、五月一八日精勤かつ一人にて相勤、老年(七〇才)大儀として継上下・羽織給、嘉永二年八月六日公入部の時上ノ山駅(へ出迎え)、拜謁、羽織給、三年一〇月一五日増一〇〇石(足高をやめ実質三〇〇石になる、)五年一二月一四日臨時送金精勤を以銀二枚、六年正月二四日老衰(七六才)、願により勝手方免精勤を以御服一重・銀一〇枚、安政二年五月一七日願により隠居、隠居料五〇石、年寄まで精勤により御服一重・羽織一・銀五枚、一九日剃髪、樂齋卜改、三年九月八日死、七九才(以上『庶士伝後篇』による。)山形浄光寺に葬、得元院真浄日法老居士(系図による)

見事な経歴というほかないと思う。若くして老公付の小姓に採用されるだけの器量を持つておつたらうし、またそれを勤めることによって、才能を発揮する場を与えられたであろう。唐津、浜松、山形、忠鼎・忠光・忠邦・忠精と四代、六十年以上、老職だけでも三十二年、しかも藩財政破綻ともいえる状態での勝手方である。敬服以外にない。和歌山藩の歌人加納諸平(一八〇六―一八五七)の編集になる『類題鮫玉集』に、吉当、吉順父子の短歌がのつており、吉当は天保七年、吉順は天保十二年以降にのつている。従つて作歌はそれ以



秋元家墓 (山形 浄光寺)

前に始まっていることになる。忠邦が大坂城代、京都所司代時代(文政八年五月〜同一年一月)に、村田春門、高林方朗(みちあき)に指導を受け、国学、短歌に精進した影響でもあろうか。秋元父子のほかに、京麿(水野小河三郎)、直躬(拜郷族)、重明(石原辨蔵)、信輓(水野志津馬)、重眞(大谷道長)、敬昌(鈴木増右衛門)がのつている。また『詠草』(京都立大附属図書館蔵)にもこれらの人人の歌が集められている。一部紹介しよう。

深夜擣衣 まつ人のこぬ夜しられて更るまで

たゆむまもなく衣うつなり

吉当

三、秋元家について

八代吉順が書きなおした系図によると、初代吉久の父単人介から始まる。姓は藤原、本国は安房か武蔵とし墳墓も不明。初猪之助といい、上杉景虎に仕え、また長尾弾正入道に仕える。入道堅顕、下野国足利で死、歳七二才、法名顕養居士といい、忌日は一二日である。附記として、総州中山法花律寺のことを書いた書に、その寺の中に秋本寺という寺があり、縁起に房州白子住人秋本太郎兵衛建立とある。一方我家には筒御書というものがある。これは日蓮が甲州身延山に開庵の時器物を送ったのを上人が喜び、その志を謝せられた返書の写し(本文焼失)が現存する。その文にも秋本太郎兵衛とあり、両者をつきあわせると安房国が本国であろう。なお糺したいとしている。『庶士伝考異』^{註1}によると、

初代天兵衛吉久、長尾但馬守に属し、佐野修理大夫宗綱と戦ふ時功有 **書上** 天正十年壬午三月廿四日十八才、一番槍を入、北條氏政之陣に

して、但馬守其功を吹嘘し、天兵衛と可称と両將に感書を給、其書火災に罹る後皆川山城守に仕へ、又本多大隅守に仕、元槍奉行二百五十石、寛永元年甲子六十才、落合九郎兵衛・若菜助左衛門吹嘘、**書上** 二人先に皆川氏に仕ふ、於山川槍奉行二百五十石、十五年戊寅 **元禄集** 十四年寅誤、十四年是ならずは丁丑なり 十月七日田中に死(本文の脚注を本稿では一行にし小文字にした。)とあるが、『丕揚録』^{註2}には、

秋元天兵衛某八旧ハ本多大隅守忠純ノ家士也、此者関東ニカクレナキ名譽ノ武士ニテ、忠純ト秋元ト二人ノ兵ナリトテ、大隅守ヨリ折字ノ心持ヲ以テ天兵衛ト名を賜トイフ、鳥ハ木ヲ扱ムノ意ナルニ

ヤ、尾張垂相ヨリ禄千石ニテ招カレケレドモ応ゼズシテ、寛永元年甲子六十才ノ時二百五十石ニテ御家ニ召抱ラレ御旗奉行仰付ラル、鉄性公(二代忠善)ノ時ハカクノ如キ士、物奉行動メケル故、平生奉行共ヘノ御詞御取立ノ老臣ヨリ却テ慙ニナシタマフとある。二と人を組んで天、それに兵で天兵衛となる。忠純は吉久二二才の天正一四に生まれ、元和元年の大坂の陣での手柄をたて、加増皆川二万八千石に封ぜられたのは二九才、吉久は五一才になっている。前者の方が正しいようにも思うが如何であろうか。

注1。東京都立大学附属図書館蔵。松本尚綱編

注2。北島正元校訂『丕揚録』公德辯、藩秘録

途中省略し、四代吉豊は四六歳で没し、子の新九郎は享保九年一月二〇日三歳で遺跡をつぎ百石(幼少家督知行半額)、宝暦二年三才のとき五〇石、さらに宝暦六年五〇石増で、二〇〇石まで回復した。

一代とんで七代吉当(宰介義父)について述べよう。

吉当は、安永七年生、(系図死亡年令より逆算)、寛政五年一月二三日中扈從(八両三口)一六歳、八年五月一日扈從、一二年五月一日増二両、文化元年五月二四日増二両、二年九月四日隠居忠鼎(九代)に奉仕、八年正月一日増二両、九年四月二日公二〇代忠光に奉仕、十一月二七日家督一七〇石(父豊高隠居、二〇〇石の内隠居料三〇石を引く)、一二月九日目付、一〇年正月一日郡奉行、筆紙料金一枚、二三日天兵衛ト改、一三年一〇月二日雄嶽靈場造営に銀二枚(忠光の遺命により、唐津雄嶽に御剣と御衣を埋める)文化二年三月、一四年正月一日亡父隠居料三〇石給、文政元年一月一八日転封(唐津→浜松)

96 朽木近江殿内 安原文右エ門 欄外に
 97 松平出羽守殿内 庄司 郡平 肥後 志水 新之丞
 98 薩摩宰相殿内 竹下 覚之丞 柳沢 近藤百合之助
 99 吉川尚五郎内 足立 栄 // 上田丹左衛門
 100 松平大膳大夫内 藤井平左衛門 越州 市川 斎宮
 101 肥後 古キ弟子 藤森茂左エ門 松前 下田 主殿
 (重徳) 102 市ヶ谷浄溜理坂上 友成 英之助 〆百三人
 鷹匠町郷右エ門作

となつてゐるが、友成英之助は前ページ下段にもあり一〇一名となり欄外を含めると一〇九名になる。氏名の上の〇印は徳丸原演練参加者で筆者がつけた。ところでいくつかの疑問を生ずる。

秋帆の出府であるが、『高島秋帆』では、天保一二年閏正月二二日に長崎を出て、二月一九日大坂着とだけであり、『江川担庵』では二月末か三月初旬江戸到着とし、『洋学史の研究』では正月二二日出発の二月七日江戸着としている。担庵の受業が二月とすれば二月中に出府していなくてはならないことになる。また、前出『江川担庵』では、江川文庫蔵の『高嶋流砲術御用留』を引用し、

天保十二年四月十日朝五時前

此方様御儀、御清服三両、高嶋四郎太夫方江被届入砲術門入

一 御肴代 金五百足

一 御上下地 壹端

右之通被遣之候事

と秋帆の門人となつたことを記し、幕府の公認を得べく、四月一八日「長崎町年寄高島四郎太夫江砲術門入之義奉伺候書付」を勘定所へ

出し、許可されぬまま五月九日の徳丸原演練となり、五月一九日再び「長崎会所調役頭取高島四郎太夫江砲術門入之儀三付申上候書付」を提出、許可を督促したとある。また同書には、担庵が秋帆の砲術を知つたのは天保八年以降で、渡辺華山の教えによるものと考えられるとし、自身長崎遊学を志ざしたが許されず、やむなく岡田万蔵、山田熊蔵、柏木総蔵の三名を派遣入門させ、想像以上のものであることを知り、さらに岩島千吉、斎藤三九郎、秋山桑蔵、大原安兵衛、大原俊七の五名を送り入門させたとある。しかしこの八名はいずれも四月受業性名の中にでてくる。とすれば、この受業性名は入門手続きなどとは関係なしに、秋帆の江戸滞在中指導を受けた者、また月ということになるか。さすがに四月後半(日順配列とはいえないかも知れないが)と五月の人々は、松平内記、別所内蔵助が仮屋留守居として参加している以外には演練に参加していない。

注 佐藤昌介『洋学史研究』では、根拠がないとしている。

徳丸原演練参加者名簿は、山根寿信編『高島秋帆先生追遠法会記事』、長崎県長崎図書館『高島秋帆徳丸原演習図』(荒木千州筆、山本晴海賛)によつた。両者間、また本史料との間に文字の違いはあるが、当時の文字の書よう一般から、こだわらないことにした。

本資料の氏名の上の肩書きは貴重な資料と思われる。今回は見送つたが、主人毎にまとめたり、主人についても調べてみると、西洋砲術についての関心度などをみる手がかりになるかも知れない。また、担庵や下曾根・小野金三郎など六名が、一字上から書かれてゐるのは、何を意味するのであろうか。幕臣の内の士分か、高島流免許皆伝者でもあろうか。今後の問題である。

		○受業性(姓)名 番号は筆者	
	二月1	葦山縣令○江川太郎左衛門	24 山野辺家中○金沢 求馬
	三月2	御進物方○下曾根 金三郎	25 葦山 ○柏木 莊藏
	3	薩州 ○吉井 七郎	26 // 雨宮 一之助
	4	// ○相良 弥之助	27 // ○齊藤 三九郎
	5	御坊主衆 ○高橋 栄格	28 // 望月 鴻之進
	6	薩州 ○伴 鉄太郎	29 // ○山田 熊藏
	7	// ○法元六左衛門	30 // ○岡田 万藏
	8	// ○山本 小弥太	31 // ○岩嶋 千吉
	9	浜松 ○秋元 宰介	32 // 小駒 宗太
	10	字和島 葛西 三郎	33 // ○秋山 久米藏
	11	// ○小波 軍平	34 // ○大原 安兵衛
	12	水戸 ○関根 傳次	35 // // 俊七
	13	// 山縣南△阿弥	36 松平内匠頭殿内 ○工藤 久平
	14	岩国 ○有坂 淳藏	37 // 堀 覚藏
	15	// ○同 隆助	38 水戸 ○吉野 英臣
四月16		○小野 金三郎	39 // ○田土部六衛門
	17	与力 ○小川 昌吉	40 // ○富山 岩之助
	18	紀藩 ○遠藤 圭介	41 // ○久保 忠次郎
	19	参州田原 ○村上 定平	42 // ○金子 竹四郎
	20	佐賀藩 ○丹羽 作兵衛	43 佐倉 ○兼松 繁藏
	21	同 ○永渕 藤五郎	44 水戸 相羽 総八郎
	22	水戸 ○近藤 彦八郎	45 // // 九十郎
	23	山野辺家中○藤田 右源太	46 // 西野 固次郎
			47 葦山 ○齊藤 弥九郎
			48 葦山 齊藤 新太郎
			49 対州 難波 斎宮
			50 // 永野佐五右エ門
			51 // 樋口 右内
			52 葦山 杉山 藤七郎
			53 高松 赤井 二郎
			54 下曾根家来○出谷 春馬
			55 神尾山城守家来 中山 清之助
			56 御納戸 佐々木 道太郎
			57 与力 桜井 代五郎
			58 丹羽若狭守殿内 宮田 左内
			59 阿部 李三郎
			60 同 津次郎
			61 佐倉 児玉 碩五郎
			62 神尾山城 高間 応輔
			63 山の辺 細谷 左門
			64 榊原式部 吉田最右衛門
			65 // 加藤 金平
			66 松平内匠頭内 工藤 辰之助
			67 葦山 百合本 昇藏
			68 丹後田辺藩 本山 它吉
			69 御寄合 ○松平 内記
			70 大御番 ○別所 内藏助
			71 下曾根中 小坂橋真太郎
			72 久世家中 上田 傳吉
			73 新御番 友成 英之助
			74 // 貝塚 庄三郎
			75 佐竹藩 植松 新三郎
			76 // 水谷 又輔
			77 亀井隠キ 千葉 忠大夫
			78 葦山 松岡 正平
			79 // 山田 慎藏
			80 内匠頭殿三男 松平 帯刀
			81 御天守番 佐藤 清之助
			82 石河三ノ藩 山田 雄太郎
			83 // 石田 紋次郎
			84 松平内匠殿内 国友 金吾
			85 // 秋田 菊三郎
			86 // 大矢 作之助
			87 松平隠キ内 十河 隼之助
			88 酒井出雲内 岩島 賜
			89 // 栗原 韞
			90 // 竹下 晋
			91 松平内記殿内 伊東 庶之助
			92 // 松浦 幹事
			93 弥九郎内弟子 細田 泰次郎
			94 // 小林 三藏
			95 亀井隠岐殿内 福原 録之助

- 候、乍去差掛候用向片付、来十五日過ニ私宅え参製可申旨申聞候、且前書被仰下置候製法(卵や砂糖を加える)ニ而者差当り味宜敷候得共、左候而者却而厭、十日と食候訳ニ者参兼候、永ニ堪候ニ者麦粉一品え塩ニ而味ヲ付候。パンニ限候由、パン大サ者厚三分計差渡三寸計、夫ヲ一度ニ一つ半大食之者ハ二つ茂喰べ、其後湯茶水ニ而茂吞候ハ、別而腹中ニ至殖え候様覚え、必輕辨と奉存候旨ヲ茂申聞候、右大釜ハ何様炭焼釜と同様之工夫と被察候、作太郎等其内ニ者熱海え湯治ニ参候由、大分砲術之事茂心得居候様、且御目通をも奉願度由ニ付、其節者菲山え御出有之度旨申置候儀ニ御座候、右奉申上度如此御座候 以上
- 四月八日(天保十三年) 柏木 総藏 拝呈
- 上 (以上 原文引用は『江川坦庵全集』による。)
- 長崎ヨリ来ル人 (上の番号は筆者)
- | | | | |
|-------|---------|---------|-------------|
| 1 野鶴 | 大木 藤四郎○ | 12 老谷 | 春 禎助○ |
| 2 睦村 | 野口 善大夫○ | 13 秋谷 | 近藤 雄藏 |
| 3 卯君 | 竹内 卯吉郎○ | 14 梅岡 | 品川 梅二郎 |
| 4 研樵 | 野口 勘太 | 15 春单 | 荒木 千洲 |
| 5 尾藤 | 尾上 藤之助 | 16 稻香 | 防州三田尻 太田 梁平 |
| 6 秋香 | 福田 秋太○ | 17 東洋 | 柘植 栄之助 |
| 7 大庵 | 加藤 淳大夫○ | 18 | 小川 喜代二 |
| 8 春谷 | 上原 百馬 | 19 秋村 | 山本 清太郎○ |
| 9 竹老 | 柘植 長二郎○ | 20 肥前竹尾 | 平山醇左衛門○ |
| 10 秋塘 | 木下 勇之助 | 21 一之 | 城戸 治八 |
| 11 三畝 | 浅井 利三郎 | 22 素賤 | 横川喜野右衛門 |



4、小船将官

- | | | |
|-------|--------|--------------|
| 23 | 西田 堅吾 | 27 南田 井上 東作 |
| 24 疎影 | 檜林 嘉平 | 28 可学 藤吉 作太郎 |
| 25 | 同 長十 | 今 重作 |
| 26 子笑 | 三原 愛次郎 | |
- これは徳丸原演練のためきた人々であろう。山根寿信編『高嶋秋帆先生追悼法会記事』(天正七年)と、『徳丸ヶ原演練図』(荒木千洲繪、山本晴海||竹内清太郎)贊、長崎県立図書館蔵)の演練参加名簿を見ると、一〇六名の氏名は一致している。その中に長崎から来た者が三〇名入っている。「長崎ヨリ来ル人」は二八名、これに高島秋帆、浅五郎二名を加え、太田梁平(防州)平山醇左衛門(肥州)を除くと二八名、藤吉重作は参加者名簿になく、島田惣兵衛、北川庫吉、浅井理三郎の名が落ちている以外はあっている。もともと『高島秋帆』には銃隊九九名、戦砲隊二四名(入夫を含む)とあり、数え方にもよるのかもしれない。下の○の意は不明。

当流備向下知言葉之儀、蘭語混雜相用候も如何ニ付、師家存知付を以夫々相改、流儀中者いづれも一樣ニいたし、誰下知にても自在相成候様いたし度候間、去々五年中師家滞府中も、右之趣精々申談、帰郷後も文通を以申遣相成候儀承知には候得共、未及其儀、彼是致し候内、於彼地御吟味ニ相成候儀ニ而、右一件落着迄は尚見合、是迄其儘ニ相用來候得共、今般御鉄砲方え御用被仰付候上は、前條之次第に拘り罷在候而は、都而私之筋ニ可相当哉、御皆伝之儀ニ付、一応及御相談候、御存意無御伏藏御申聞御座候様奉存候、以上

五月廿一日(天保一四年)

江川太郎左衛門

下曾根金三郎様

小野 金三郎様

秋元 宰介様

兼松 繁蔵様

全員秋帆門下であり、下曾根、小野は幕臣で實際は江川とともに秋帆から免許を得ており、秋元は水野、兼松は老中堀田備中守正篤の家臣で徳丸原演練に参加、幕臣と二老中の家臣、当時影響するところ大であったと思われる。注 佐藤昌介「洋学史研究序説」

担庵の下知言葉の考案は、「ラップ、スコールドル、ゲヴェール」を「担え、銃」に、「パヨン、ネット、アフ」を「取レ、劍」などと、「鋭音号令」と呼ぶもので、天保十三年ごろ完成、天保十四年五月鉄砲方への兼任(代官)に際し、下曾根らに呼びかけ、下曾根らは提案に従ったようであるとし、鋭音号令の完全普及は安政の軍制改革以後としているが、前記下曾根の嘉永二年の改候ことばとの関連については、現在不明である。注 ここは仲田正之「江川担庵」

○パン法

ウドン 百六十目 蕎麦ノ調加減ヨリ少シ和(ヤワラ)カ也

饅頭 甘酒 五勺

一斤壺ツノ割

三斤三ツ半ニ割

土鍋ニ油ヲヨクヌリ、ソレへ蕎麦ノ練加ケンニテ丸テ入、先下
方焼 コケ候へハ、カヘシ上(下カ)ヨリ焼

これはメモでありよくわからない。担庵らは新らしがりでなく、兵糧、非常食としてのパンに期待するものがあつた。品川藤兵衛から作太郎の製パン技術のことを聞いた。作太郎は長崎出身で秋帆門下として砲術にも堪能で、秋帆出府に従つてきたのであつた。担庵は手代柏木総蔵へ、作太郎にあい、口述だけでなく実際に製造させてみるよう指示した。総蔵の報告を掲げる。

別紙奉申上候、然者作太郎え面会パン製造承候処、被仰下置候通、饅頭並饅頭之元、尤味能仕候ニハ鶏卵砂糖加え候得共、右者長崎之工夫ニ有之、於西洋麦ヲ荒く挽、夫え塩を少々入味ヲ付焼用候由、勿論平常食候分者、矢張同様ニ候得共、其焼方六ヶ敷、厚七寸有之切石を以、薪二十把余茂焚かれ候程之大釜ヲ築立、其上ヲ土ニ而能々塗付、一方ニ小さく口ヲ開、其口より薪二十把茂入、凡半日茂焚十分火氣満候処ニ而火ヲ不殘取出、其跡えハパンヲ入、右入口ヲ塞き少し茂空氣不入(様脱カ)ニ仕候得ハ、聊か以焦ると申事無、真中迄ツクリと火通水氣更ニ有之様ニ相成、如斯相成候パンは一ヶ年位者製候時之通ニ有之、既ニ長崎表ニ而大釜二つ築立置、火消其外之節相用候為、年々製置篤と試候由申之、永く為保候ニハ逆茂鉄之焼鍋杯ニ而者参兼

砲術伝授請候義御届書

私儀高島四郎太夫砲術伝授請候様被仰渡候ニ付、同人心得罷在候砲術
伝来之秘事不殘伝授請申候、依之此段御届申上候 以上

丑七月十七日

江川太郎左衛門 印

御勘定所注

その後、九月「砲術之義は平常打様不仕候ては御用にも難相立奉
存」と、幕府が秋帆から買上げた大筒類四挺の五ヶ年拝借、小筒の
買入れを願ひ出でて、一二月二九日忠邦は許可を与えている。十
一月には大筒・小筒の鑄立ても申請したが却下。一三年六月にいた
つて、オランダ船がアヘン戦争の詳報を伝える別段風説書とともに、
イギリス艦隊の日本渡来の計画を伝える秘密情報をもたらした。幕
府は、文政外国船打払令を撤回天保薪水令を出し、江戸湾防備体制
改革を実施した。こんななかで

高島流火術諸家伝授苦しからずの指令

天保十三年壬寅六月

御目付へ

諸組与力格長崎会所調役頭取

高島四郎太夫

右四郎太夫義、先だつて出府の節、かねて心得罷りあり候火術、伝
来の秘事まで残らず御直参のうち執心の者一人へ伝授致し、右のほ
か諸家へみだりに相伝え候義は仕るまじき旨申し渡しおき候処、以
来その義に及ばず、御直参は勿論、諸家執心の者へは勝手次第伝授
仕るべき旨申し渡され候。もつとも異様の冠物、衣服等相用いず、
常体の笠、或いは陣笠、野服、小袴、陣羽織等にて稽古致させ候よ

う致すべき旨を申し渡さるべく候。

右の通り長崎奉行へ相達し候間、承合候向きもこれあり候わば、
稽古致し苦しからざる旨相達せらるべく候。

と幕府中心の海防から、段階的に全国的なものへと転換をとげる。

高嶋流砲術指南之義ニ付伺書

当六月中諸組与力格長崎町年寄高嶋四郎太夫心得罷在候砲術之義、
御直参ハ勿論諸家執心之者え勝手次第伝授可仕旨被仰渡候趣承知仕
候、然ル処去丑(天保二)七月中、私儀四郎太夫砲術伝授可請旨被仰
渡候ニ付、同人伝来之秘事不殘伝授請候間、是迄譜代之家来共えハ稽
古為仕候得共、他より弟子取候儀無之候処、以来砲術執心之者指
南請度旨申込候向度御座候ハ、稽古仕候而度不苦儀ニ可有御座候哉、
此段奉伺候 以上

寅八月(天保十三年)

江川太郎左衛門 印

御勘定所

海防掛老中真田信濃守が反对者を説いた。

高嶋流砲術指南之儀ニ付御請書付

私儀高嶋流砲術指南之儀相伺候処、伺之通信濃守殿被仰渡候段御達之
趣承知仕候、右為御請申上候 以上

寅九月七日

江川太郎左衛門 印

御勘定所

砲術師範の許可を得門入の数も増した。下知言葉の翻訳は一つの課
題であり、徳丸原演練のとき秋帆と協議し、長崎帰国後も文通で検
討を重ねていたらしい。五月十八日、幕府鉄砲方への就任に際し、
調練下知言葉之儀御相談候書付

か一四年と推定される鈴木春山から村上定平宛の書簡に、江川担庵が忠邦密命によつて、江戸湾防備のために、友信所蔵の「フルステケンキユンデ」(築城学書)の借用を春山を通じて、申し入れたことを示すものがある。これによつて忠邦が友信所蔵の蘭書に注目していたことがわかる。^注

○下知詞ノ意味 春山ヨリ聞記ス 天保十四卯八月八日

春山は田原藩鈴木春山であろう。

ネーム ^{トル}ラツフ 「スコードル」 ^肩ラツフ スコードル

「フンセントール」 ^{尊敬スル体}「ラーデンク」 ^{又ハ}ラーデンゲウエール

「ハアンフ」 ^{用意スル}「アン」 ^{親ヒ}「スコインセン」 ^斜「ヒユール」

「フルデツキ」 ^{物ヲ覆フ}「ラム」 ^{題ス}「ラーク」 ^{提ル}「セツト」 ^{ヲロス}アフ ^{鍋ナトヲヲロス}

などが書かれている。これは、徳丸原より二年以上経過しているわけで、次項とも関連して考えると、ある程度使いなれたことばの意味を原義にたちかえて考えようとしたものかも知れない。

○嘉永二年の暮、下曾根ニテ改候言葉

手操

調練

エンテウエー	一ニ	イナニ	ロッテンフレツキ	銃陣起歩
ネーモツプ	取	組	ロッテンコロン	組
スコードル	肩	組	ホールワール	平陣
ラアデンゲ	込	組	ライトテフランク	縦陣
ハアレフ	構	組	セキチン	折陣
アーン	向	組	ケツイント	趨進
リンクツ	左	組	マルス	進
レフツ	右	組	ハルト	止

ヒユール

火

ロット

組

ハヨネツト

挿刃

ケツイントラテン

早打

ヘルヘツト

腰矯

アクトルワルス

跛脚

などがあげられている。西洋流銃砲をとりいれるについて、ことはやはり問題であつたろう。あえて得意になつて蘭語を用いるものもあつたらしいが、徳丸原演練後、服装と、もに保守派から批判が出た。また師範が各自翻訳したのでは、いくら封建社会とはいつても混乱をきたすだろう。そこで、担庵江川太郎左衛門が下知言葉の統一を呼びかけた資料があるが、その前に徳丸原演練後の火術伝習資料を一覧しておきたい。

高島四郎太夫

其方心得罷在候火術伝来之秘事迄、不残於当地御直参之内熱心之者、老人え致伝授、右名前等届可申候、且又、右之外諸家え相伝候儀ハ仕間敷候。

丑七月 (天保一一)

右者水野越前守殿以書付被仰渡候

諸組与力格

長崎会所調役頭取

高島四郎太夫

其方心得罷在候火術伝来之秘事迄、不残下曾根金三郎えハ伝授不仕、御代官江川太郎左衛門え伝授可仕候

丑七月

右者水野越前守殿御書取ヲ以被仰渡候段長崎奉行柳生伊勢守申渡

- 同 〇 ヘルトクトオツプヤーハー
千八百十一年(文化七年)ヤーハト云処へ行軍スル
道路ヲ記ス
- 水攻 〇 ビラールゼーアルテルレリー 牧氏用
千八百廿八年(文政十一年)水兵火攻略説
- 船 〇 ハンレイキオーフルデシケープスホウ
千八百二十二年(文政五年)船舶造作書
- 砲 〇 オイトクスステイングマテイリール 神器略説
陣法一 プロヒシヨネールレケレメント 牧氏用
- 陣法一 千八百十五年(文化十二年)陣法書
千八百十五年(文化十二年)陣法書
- カ 〇 インフワンテリーレゲレメント 牧氏用
陣列坐作号令法
- 陸攻 〇 オントウエルフヘルトアルチルレリー
千八百卅一年(天保二年)陸戦銃砲之法
- 船 〇 コルテシケツハンテネートルランセホントンテレイン
舟書
- カ 〇 セーマンスギツフ
千八百四十一年(天保十二年)航海ノ詳論
- 陣法 〇 レケレメント
千八百廿五年(文政八年)陣法書
- 飛騰 〇 リグトボルレン
千七百八十四年至鞋ノ氣ヲ囊裡ニ送入シテ円球ヲ
球術 〇 空中ニ騰擧スル法

〔朱書〕右天保十三寅年舶來、同十四卯年春

御蔵書トナル

- 一 ゼーアルチルレリー 渋川訳出来
千八百卅二年(天保二年)十二月十四日「ヨハンネ
ス、カルテン」誌(6番目と同じか)
 - 〇 シケープスボウキユンデ
千八百廿二年(文政五年)軍船打建方ノ書
 - 〔朱書〕右 天保十三寅年前 追々御蔵書
 - 一 ニーエンボイス
〔朱書〕右 天保十四卯閏九月、三州田原侯ヨリ御到來
注 一番上の舶、海陸火攻など、()内の日本年は朱書きである。
- 御蔵書とあるので、水野忠邦の蔵書と思われる。前出『洋学史の研究』によると、忠邦が長崎を通して購入した兵書が、重複を除くと約三〇部位と、蘭仏・蘭英・蘭独・蘭羅等の辞書や、ウエットブック(阿蘭陀法律書)などを購入しているようである。それに載っているものは、一を丸で包んでおいた。それ以外に一〇部ぐらいある。ただ仮名表記であり、著者名を含むもの含まないものなど一定していないので、正確を期し得なかつた。なお、鈴木春山(田原藩、弘化三没四六才)や牧穆中(浜松藩侍講、文久三没五五才)に兵書の翻訳をさせている。目録中の牧氏用の牧は穆中のことであろうか。
- 最後の項に三州田原侯より御到來とあるが、田原老公三宅友信のことであろうか。渡辺崋山が勧めて蘭学を学ばせ、蘭書を購入させたが、友信自筆の蔵書目録中、現存する兵書の部だけでも総冊数二一九冊にのぼる(すべて華山在世中購入とは限らない)。また、天保一三年

海防は、旧制度による充実に止まらざるを得なかつた。例えば天保八年一月に幕府の許可を得て、慣例の春秋二度の猪狩を利用し、海岸において家中の者が甲冑を着用し大筒の訓練を行っている。華山蟄居中、田原藩土村上定平が徳丸原の演練に参加し、華山死後の一三年五月長崎に赴き、高島流皆伝を許され、九月帰藩以後西洋銃陣の訓練を行っている。

図をみると、風貌が外人のような感じがし、笠はせばめてあるが、坦山の葎山笠と異なり秋帆のトンキョ帽と似るか。裁着袴のようであり、剣のほかに脇差を提げている。足は草鞋ばきである。文章では外国めいているが考え出したように書いています。

年代がわかれば、秋帆・坦山との比定もおもしろいと思う。ただ、最後に、「西洋砲術探索致し候も、全く外国防の一助にも相なり申すべき儀と存じ付き候ゆえの事にござ座候」と書き、更に「深く御勘考くださるべく候」とあるのが気にかゝる。

注1 仲田正之『江川坦庵』人物叢書 吉川弘文館

注2 「蔵書記」は、寺崎武男『華山』大正一五年刊アルス巻末に、カットのようにして、説明なしに載せてあった。

注3 佐藤昌介『渡辺華山』人物叢書 吉川弘文館

16、銃砲必書

一種メモ帳のようなもので、砲術のうちとくに薬法のことが多く書かれてあるが、筆者の興味を引くものを拾いあげてみたい。

○蘭書ノ名

船 ⊖ フアンカルクーンウイスキユンデシケープスボウ 一冊

千八百五年（文化元年）船舶之製作及航海ノ條令等測度量之術ヲノス

海陸 火攻 ⊖ セスセレルエルムストヒユールエルキ 一冊

千八百二十三年（我文政六年ニ当ル）海陸兩路ニ於テ火攻法

同

千八百十七年（文化十三年）銃砲之書

船 ⊖ フアンローンシケープスボウ

千八百廿八年（天保九年）船造書

海攻 ⊖ カルテンゼーアルテルレリ

千八百廿二年（天保三年）海戦火攻書

同

同

陣法 ⊖ ミリタイルハンドブック 牧氏用

千八百九年（文化五年）拂良寮独逸兩國之兵法ヲ兼

採セシ陣法

火薬 ⊖ フルハンテリングオーフルヘットピッコロイト

千八百十八年（文政元年）火薬制^{（イ）}造書 ⑨讓庵訳済

海陸 攻守 ⊖ タクテイキデルデリーワーヘン

千八百三十二年（天保三年）海陸攻守法

陣法 ⊖ ケレイネオールロク

千八百三十二年（天保三年）地勢ニ從テ寡兵之兵

卒ヲ以テ接戦スル事古今ノ例ヲ引

ているが、その答弁のような感じもする。しかし最後を見ると、朱の親子粹の中に、「田原藩士渡邊登蔵書記」とある。従って華山の蔵書、あるいはその写を宰介が入手したことになる。

さて、『勝海舟全集16』陸軍歴史巻十三をみると、江川担庵（太郎左衛門）の意見書に、

「伊豆国御備え場の儀につき、存じ付き申上げ候書付」三条目に、
一略一、元来鉄砲は蛮国より伝来致し、その比は火繩打のみの時節にこれあり候処、西洋の諸国、戦争実地試み候て、火繩打用立ち難く、早く捨り居り候処、砲術者、角打の中り外れを論じ候ゆえ、引がね堅くこれある間、中り宣しからずなど申し候。是はこの筒の打ち方を知らざる故の儀にて、火繩にて微雨に遭い候ても打ち方出来申さず、その上一人につき一日に二把ずつの火繩分け渡し申さず候ては相成らず、千人にては一日の火繩二千把に相成り申し候。十日にては二万把の入用、是も雨に遭い候えば一先ず無用のものと相成り申し候。砲術家、水火繩の法ありなど申せど、一把、二把は製し候事も出来候えども、中々届き申すまじく候。第一、鉄砲二段に組立て、一文字にして前後左右の角違いに、玉の切れめこれなきように打出し候節、火繩にては怪我を仕り候もの出来仕り候間、余儀無き間を明け候間、備え疎に相成り申し候、燧にてはその憂いも御座なく候

仏蘭斯偽帝ポナバルテ、欧羅巴諸国を併呑せんとし、これがために戦争止む時なし。是よりして砲術誠に精密に相成り候よう承わり及び申し候。異国御禦のためには、我が邦にても砲術精密に仕らず候ては、大なる損これあるべく存じ奉り候。砲術者流三、四十目を

始め百目以上抱打をいたし、甚しきは何貫を打つなど申すこともこれあり、急度御用に立ち候よう相見え候えども、大筒に相成り候ては、玉の重みと、装薬に釣合い申さず、中には目返しと申す装薬多く仕り候ものも御座候えども、装薬の製法至つてよわく仕り候間、同様の儀にて景気のみよく相見え、所請花法にして、その実御座なく候。右等の儀は先輩已に論じ候儀も御座候。―後略

丁酉（天保八）正月に、幡崎鼎の教示によるものとするが、華山の三段構え以外はよくにている。この後幡崎が逮捕（四月）されたので、担庵は代わりの蘭学の師として華山との出会いを望み、川路聖謨の仲介で、華山が担庵を訪れたのは九月二三日であった。もつとも、華山自身も以前（幡崎天保四年水戸入仕以後か）から師事していた。本資料もあるいは幡崎あたりに由来しているのであろうか。

華山は前から、吉田長淑や幡崎鼎・高野長英・小関三英ら蘭学者と知っていたが、天保三年五月藩の年寄役末席に起用され、海岸掛を兼務するようになり、本格的に蘭学の研究を始め、その直接の目的は海防であった。田原藩は遠州灘に突出た渥美半島にあり、三河の国では唯一の城地であり、元文四年の海防令で八ヶ所の番所をおき、文政八年の異国船打込令で総動員体制も整えられた。華山の蘭学を特徴づけるものは世界認識であるが、兵学にもわたり、長崎から「バンヨネット」銃とよばれる、新式の剣付銃を購入し、江戸の藩邸で小規模ながら西洋銃陣の演練を行なっていたりしているらしい。しかし、西洋砲術や銃陣を基にした高島流砲術さえ、一部九州諸藩士が学んだ以外に、幕府や諸藩が正式に採用するのはアヘン戦争（一八四〇）以後で、華山の生前（天保一〇年逮捕、一二年没）の田原藩

目ノ引カネヲ引起シ、下知ヲ待ツ図」と展開していく。最初の部分に、剣付歩兵筒、長四尺九寸、燧石打 巢中長三尺五寸 玉目八箋 劍の図并寸法が書かれている。下に朱の枠の中におなじく朱で「安伎あき母騰もとうち字知能布美武路ふみむろ遇於斯傳」とある。秋元氏の書室の押手(印章)の意であろうか。次に西洋砲術探索の理由を述べた文がある。筆者の読み誤りか意味の通りにくい所もあるが、全文を掲げてみる。

中壱間の内ニ二行四人たちニ致候処、三行ニて十二人たち申候間、小組四十八人の人数は凡五間中の処ニて相済申候

此小組を何程も組上ヶ申候

一文字備して、前後并左右の角違等、小組頭の下知ニて時々勝手に早打致申候、一放四十八の玉打出候て、組ニより打出候間、玉の切れめハ無御坐候、ヶ様ニ組たる備、直ニ後江放候様なる事本邦の銃陣なと、少し(も脱カ)不成由の様ニ相覚申候

我流の銃陣ヶ様組立候得者、火縄打おとし怪我出来申、甚危候間、無余義間合を取申候得共、於此筒ハ其憂無之候、陣笠・ふく(服)少く外外国めき候得とも、寄付候而備候故、笠ふとく候ては打方出来不申、込替之手数有之、何分大袖にてハ出来不申候故胸服ニ致申候、一日一人々々ニ教へ置候て、相集下知を加へ候得者直ニ銃陣出来申候、我流の銃陣などは、角前と銃陣は別の事ニ相成居申候間、火急ニ銃陣組立候義等ハ甚六ヶ敷相覚申候、先何方も右様の振合ニ御坐候処、於此法ハ実ニ感心致申候

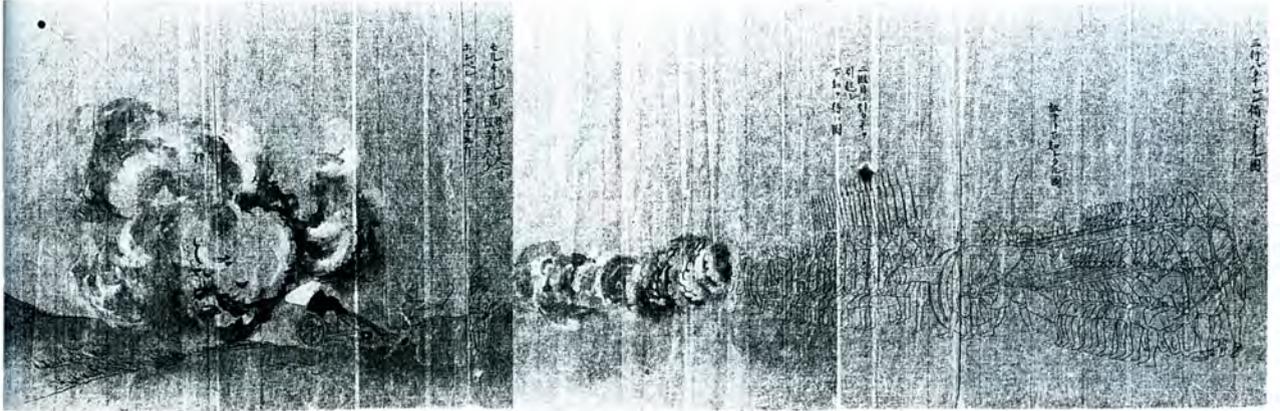
申までニは無之、元来鉄砲(砲カ)蛮国より伝来致、其頃火縄打のミの時節ニ有之候所、西洋の諸国とも戦争の实地ニ踐候て、火縄打ハ難用立と早く捨に居申候事、御案内之通ニ御坐候所、砲術者兎角、角

打の中(あたりはずれ)外を論し候故、引かねかたく有之候間、中り粗ニ有之なと申候、是は此筒の打方を知らざる故之事ニ候、第一火縄打にては微雨ニ逢候而も打方出来不申、併砲術者水火縄の法ありなど、先ツ壱人にて一日三把ツ、は分渡不申候而者不相叶、千人ニ而は一日の火縄三千把ニ相成申候、十日ニては三万把の入用、是も雨にあい候得者無用の物ニ相成申候、水火縄も一わ二わハ砲術者製候事も出来候得共、中々届申間敷候、紅毛備一ハタイレン三千五百人も有之様相聞、是は皆鉄砲斗の人数に御坐候、彼方諸国の備方同様の由承り申候、ボナバルテ(ナポレオン)以来は別而砲術一変致、盛ニ相成候様相聞候間、異国御防の為には砲術第一の戦与奉存候、三四拾目を始め百目の上までも抱打いたし、甚しきに到り候而ハ何貫目を打なと申事も有之候処、都て当地ニて打方致候ハ急儀御用ニ相立候様相見候得共、大筒ニ相成候而ハ玉の重みと打薬との釣合不申候故、景気能大筒を抱候までニ御座候て実用薄き程相覚申候、古来通用の番筒と唱へ候者、三匁五分或ハ四匁三分位ニ而、定法の早合には式匁の薬は入不申位ニ御坐候様、彼方の番筒ハ八匁筒ニ御座候而、殊ニ長筒ニ御坐候玉きくも絶尽し候、無用の事ニ候得共御含迄ニ申上候、西洋砲術探索致候も、全外国防の一助ニも相成可申儀与存付候故の事ニ御座候、深御勘考可被下候

注 原文を尊重、変体仮名の大部分はなおし、返り点、読点を付した。

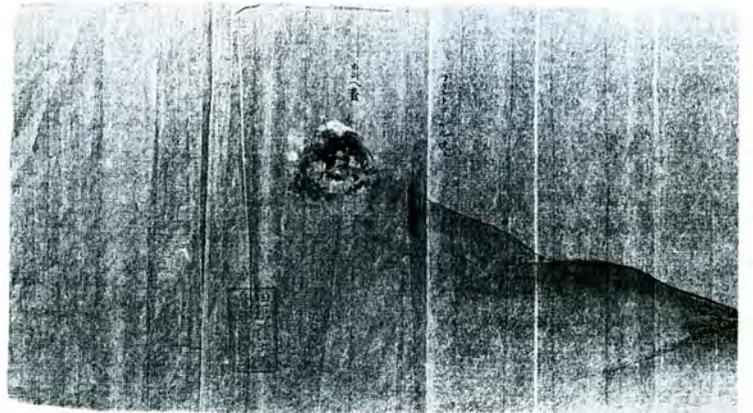
とある。前にふれた天保一二年五月九日の長崎町年寄高嶋秋帆による徳丸原演練後の見学者(直参・陪臣を問わず許可した)による意見や質問の中に、服装や下知(命令)言葉の問題も出され、秋帆が答弁し

1、〔三段の三人組合たる小口の図〕



田原藩士渡邊登藏書記

安能岐母勝此字
知能布美此字
跡通於斯傳



解・寸法・重さ・説明がある。「ラボレールヘッケン」は前者と組合わせて使うものらしい。図・寸法・重さ・説明があり、また両者を組合わせたと思われる図も書かれている。寸法は朱書で尺寸への換算も書かれている。半紙二つ折五枚で、抜き書きでもあろうか。尾本久淵訳とある。

15、炮(砲)用備忘 一一〇×一七〇mm 三六枚(表紙とも)「引馬文庫」の野紙を用いて書かれている。

ア、上段に「玉径」として七分玉から一分増毎に拾分玉まで、その上は一匁増毎に百匁玉、十匁増で一貫匁玉まで、あと百匁きざみで百貫匁まであり、下段に「紙代なし」として、上欄に対応して、一分三厘三毛五四から一尺三寸六分三厘五毛まで書かれている。

イ、出合割 銀ロウ合 真鍮ロウ合など書かれ、天保十三寅七月 国友信賢より借テ写し^(おんめ)畢 秋元吉順誌 とある。

ウ、玉ヲトリヲ知ル法、西洋尺度・秤量・時刻の換算など
エ、ホー井ツスル敵・同坐車 国友の天保十三年八月の見積
オ、カステーラ焼法

カ、鋳物の法 山形銅町ニテハ脂百目ニ臘(蠟カ) 式十目
キ、百五拾目玉野戦銃 右於三州田原大砲(砲カ) 鋳造積

田原藩 村上定平(範致)
ク、実弾、鉄棍弾などの蘭語
ケ、三百石本知 三百六十二俵式斗一升

内三百十一俵六升五合 八分五リン九毛引
秋元は三百石なので、何時かわからないが、山形での引去米

(藩財政窮乏のため俸禄減額)をあらわすものだろうか。
コ、定飛脚賃

山形より江戸迄継立島屋飛脚

百目	百	八十文	百五十目	二百二十文
二百目	二百五十文	三百目	三百文	
四百目	四百文	五百目	五百文	
一ノ目	七匁	五分	五ノ目	已上 一ノ目ニ付 六匁五分

サ、蘭語(軍用)・スペル・読み・邦名 〓九単語

16、銃礮必書 一四二×二〇四mm 四七枚(共) 〓後述
17、秋元家系図

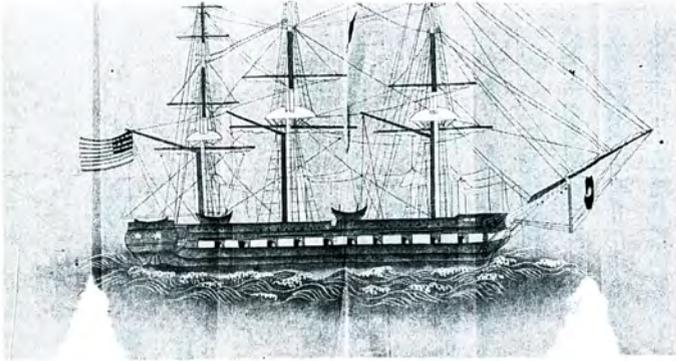
明暦三年の江戸大火に罹災しているようである。現系図は「秋元家系図参考」として「八代孫吉順謹訂」とあり幕末に作成されたものである。初代吉久の一代前単人介から一代悌次郎、すなわち猪之助の父の代まで書かれている。内容は後述の中で必要な部分をとりあげたい。

注 原題のないものでかりにつけた題は()内に、筆者の補足は()内に書いた。原文には返り点を付した。

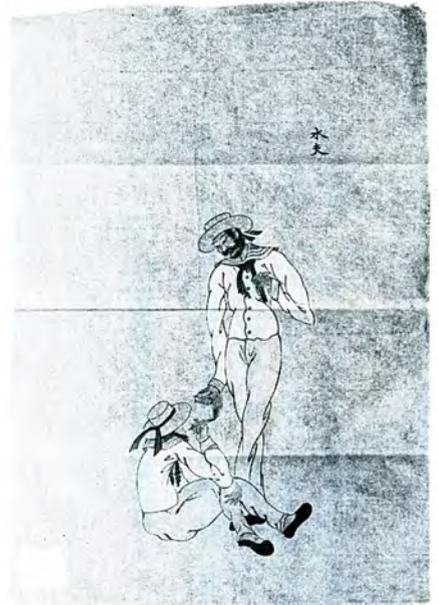
二、紹介と考察

1、(三段の三人組合たる小口の図)

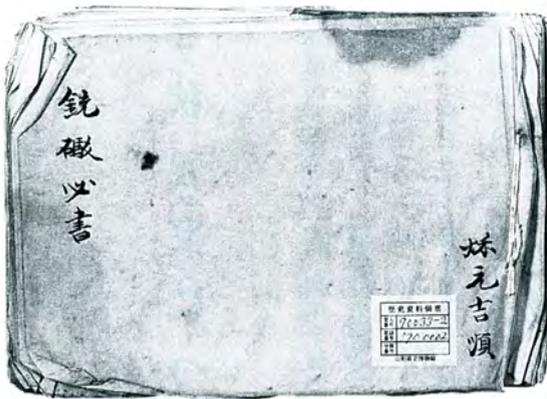
約二メートルに及ぶ横物で絵巻風になっている。表題は全体のものではなく最初の図の題と思われる。ついで「コロンネ備ニ開キタル図」「三行バタイレン備ニナリタル図」「放テト下知シタル図」「二段



2、〔アメリカ軍艦〕



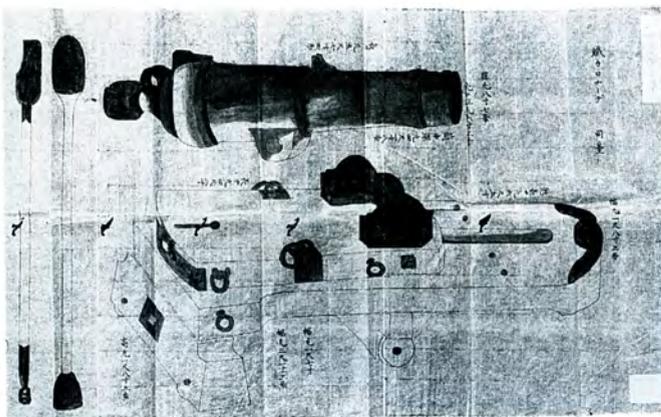
8、水夫



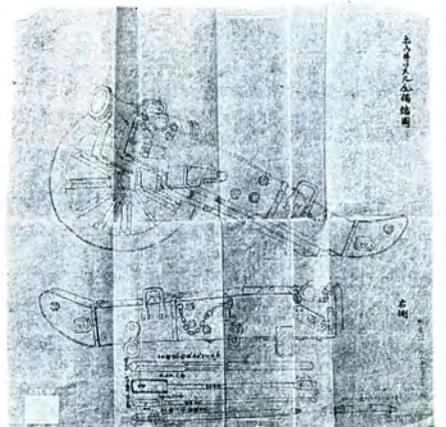
16、銃砲必書



15、炮用備忘



11、鉄コロナーデ、同台



10、ホウキツスル全備縮図

山形水野藩

秋元家文書と秋元家について

囑託 川瀬 同

平成二年九月に、新野昌生氏によって、秋元猪之助氏遺品が当県立博物館に寄贈された。その内容をみると、猪之助四代前の宰介吉順(後天兵衛)の遺品である。秋元家は水野家家臣中でも古い家柄であり、二代目藩主忠善の山川時代(下総、現結城市)寛永元年二五〇石で召抱えられ、代々天兵衛を名乗った。八代宰介は後述のように、天保一二年高島秋帆へ入門、五月九日徳丸原(板橋区)で幕府による最初の洋式銃砲演練に参加した水野藩唯一の人である。七代吉当は老まで進み、宰介とともに和歌も嗜んだ人である。九代吉徳は維新に際し、版籍奉還後少参事に任ぜられたり士族長に選ばれたりしている。それらのことから、筆者は前から秋元家に関心を持ち、秋元家を調べることで水野藩ないしは家臣のことも深められる期待を懐いてきた。

一、秋元家文書の概要紹介

- 1、〔三段の三人組合たる小口の図〕絵 着色 Ⅱ後述 2、3、
〔アメリカ軍艦(帆船)〕絵 着色 4、小船将官 5、士官
6、兵卒 7、兵卒部屋守 8、水夫 9、煙出・竈 以上
絵 着色 10、ハウ井ツスル(榴弾砲)全備縮図 墨図 部品も画

く 図中朱書の分は、「飛驒工平吉ガ写セシ図」と注記がある。水野藩邸での鑄造(後述)と関係があるうか。

11、鉄カロナーデ・同台 三九〇×一五七〇mm 端裏貼紙に「分部様より写にて頂戴」墨絵で、寸法も書かれ、部品も画く。

注、佐藤昌介『洋学史の研究』によれば、caronade 砲身の口径との割合はおよそ榴弾砲と同じであるが、砲耳が下の方に一個のみあり、これが一種の滑り台に結合され、射撃のさい砲身が後退し、反動を緩和するようになっていた。

12、山形藩土秋元吉順礮場之一器

紐つき麻袋入り、袋に表記のように墨書してあるが、象眼器と思われる。

13、砲術稽古井細工之儀御届書

私儀先達而高嶋四郎太夫砲術皆伝請候ニ付、右流儀之品々細工いたし、且又百目筒老挺試鑄立稽古仕候間、此段御届申上候 以上

丑十月

江川太郎左衛門

丑は天保一二年。『勝海舟全集15』P. 42に同文。但し丑十一月とある。

14、「ロイテナントゼネラル」遠西火攻書

前発兌紀元一千八百十七年 後発兌紀元一千八百二十三年 和蘭海陸司砲 雅空骨夫ヤシコボウ微爾列木ミケルレキ謹撰 と表紙にある

内容は、「ラポレールケートル」火薬を製するに用いる鍋として図

平成4年3月20日 印刷

平成4年3月30日 発行

山形県立博物館研究報告 第13号

編集・発行 山形県立博物館 ©

〒990 山形市霞城町1番8号

電話 (0236) 45-1111

印刷所 株式会社 藤庄印刷

